

太陽の仲間たちよ

中村 裕

講談社

身障者と共に10年間

太陽の 仲間たちよ

中村 裕

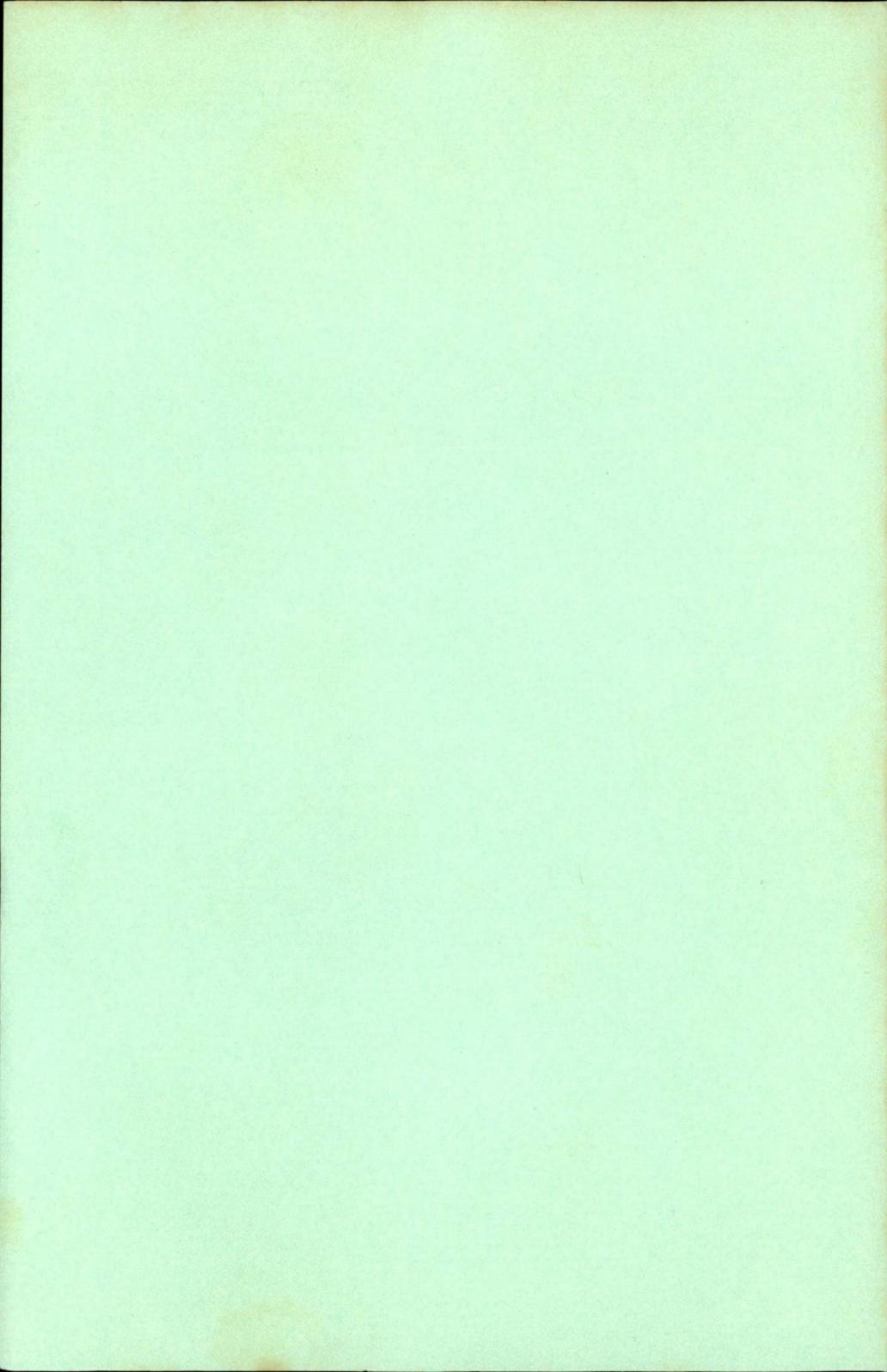


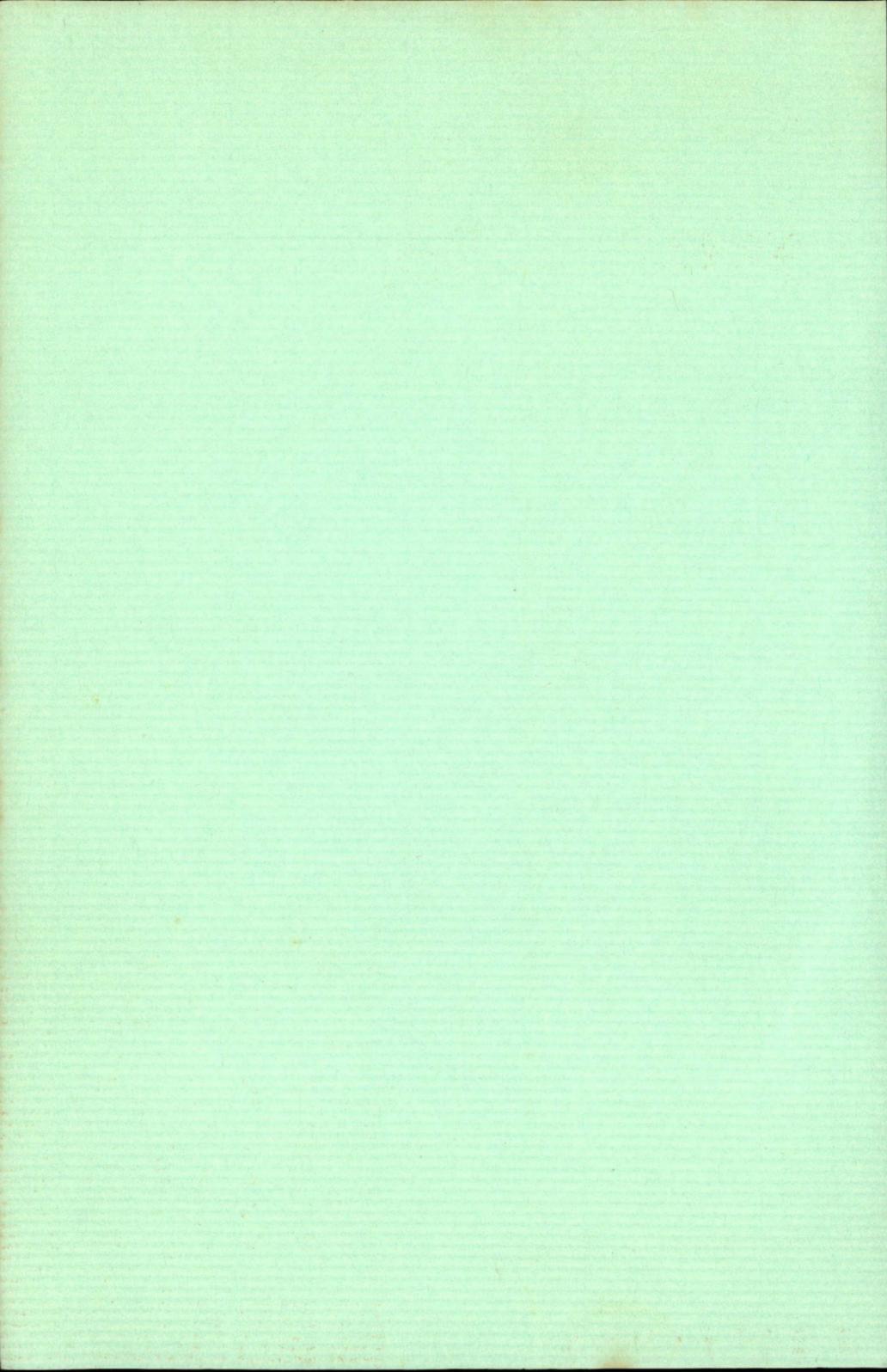
◆障害者に保護より働く機会を、太陽を

私は障害者に対して、保護より機会を、与えるようにと訴えてきた。いたずらな保護は人間をスポイルし、ダメ人間をいっそうダメ人間に決定づけるばかりでない。弱者を保護隔離するといふ健全者あるいは強者のエゴイズムは、社会を徐々にゆがめていくことにもなるからである。

福祉とはなにかということが、よくいわれている。豊かな経済力による過保護がそれではないことは、もはや疑う余地がない。それはおそらく、人間がいかに生きがいを得るかというところであろう。そして、それを支えるためにこそ経済力を必要とする。太陽の家は、障害者に働く機会を、太陽を、というスローガンをかかげているが、みずからの力で経済的安定を得ることができれば生きがいもまた得ることができらうという意味である。

(本文より)



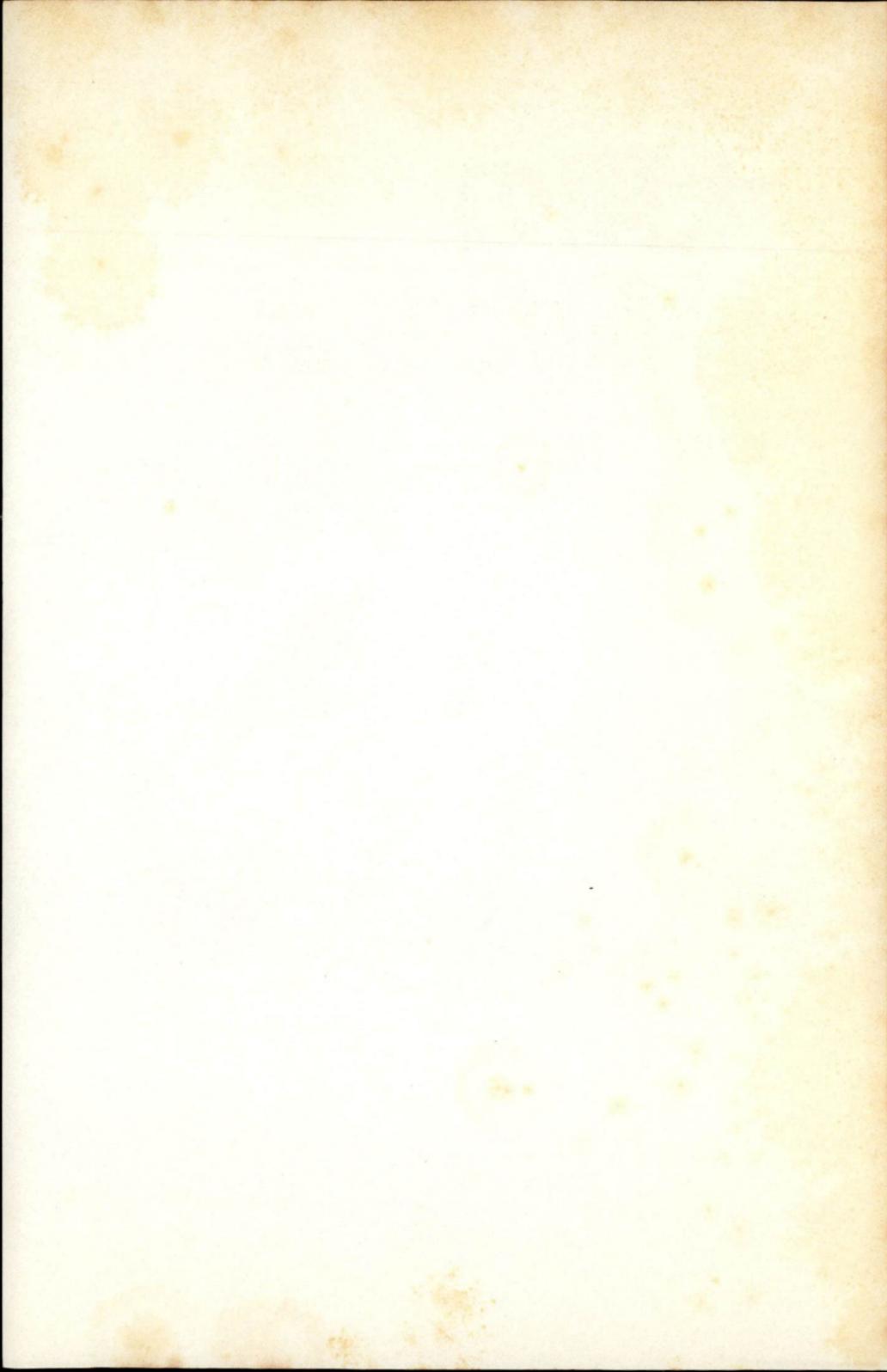


身障者と共に10年間

太陽の 仲間たちよ

中村 裕





目次

第一章 なぜスポーツをやるのか……………6

フェスピック第一回大会 6

グットマン博士の秘術 11

東京パラリンピックの教訓 18

第二章 自活できる施設を……………28

水上勉さんと身障ムード 28

ガラクタの山 善意工場 34

エンジン全開スタート 37

名称は、太陽の家 41

なぜ社会福祉法人か 45

第三章 模索する一年……………51

理想と現実のはざま 51

陳情また陳情 55

草の根の投資者 60

さまざまな協力者 65

日本のアビリティーズを 71

仕事も人も…… 75

やっとな年が過ぎた 80

第四章 自分たちの工場……………86

A級製品を市場へ 86

春のさざしが…… 93

責任追及の公文書 100

変転する協力企業 104

六階建本館が完成 108

いよいよ福祉工場へ 116

みんなが株主になるのだ 120

第五章 人生はここから出発する……………125

もう一人ではない 125

耐え抜いた力 131

障害者にはない明るさ 135

結婚 そして子どもが……………139

彼らは将来を設計する 145

第六章 より深く より広く……………151

機能活用のために 151

脊損者の褥瘡とセックス 159

機能強化でフアイターに 164

国際交流と情報提供 169

第七章 そしていま主体性を……………174

これでフルコースだ 174

外へ向かって伸びよう 179

運動を街へ—— 183

同じ屋根の下 同じ湯に 186

車椅子議員誕生 190

第八章 心は一つに結ばれた……………196

アジアの全障害者の代表を 196

大会は成功した 202

感激のあとに 210

ゲール博士からの手紙 216

結び 福祉とは何か……………222

追加報告 より広範な可能性をめざして……………231

太陽の仲間たちよ

第一章——なぜスポーツをやるのか

フェスピック第一回大会

目がさめて窓のカーテンを開けると、青空だった。電話が鳴った。

「スケジュール通り、OKですね」

「もちろん」

前日までは気象庁の入梅宣言におびやかされたが、この抜けるような青空を見ては、もうこわいものはない。気力が全身に充実する感じである。

「すごいお天気、もう成功間違いなしね。新聞もよく書いてくれているし……」

先に朝食のテーブルについて私を待っていた秋山ちえ子さんの頬が、軽い興奮のためだろう、

ほんのり紅い。秋山さんは、きょうの日のためにずいぶん奔走してくれた。ホテルでは何かと連絡が不便なので、数日前から私の家に泊っていただいていた。

新聞は、

「きょう、第一回フェスピック（極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会）開幕。一八カ国、一〇〇〇人が障害乗り越え、大分に集う」

というように、どれも一〇段でいどのスペースを使って紹介してくれている。

「天気だけが心配だったけれど、もう大丈夫ですよ」

「私たちの気持ちがあ天に通じたのね。それに、日ごろの行ないがいいから……」

大会本部を置いた西鉄グランドホテルで簡単に最終的打合せと確認をすませ、私たちは大分川河口に近い市営陸上競技場に入った。

一九七五年六月一日午前十時——。

皇太子殿下、妃殿下のご着席とともに、メインポールをはさんで参加各国旗が掲揚され、十発の煙火。そしてファンファーレが鳴りひびき、選手団が入場した。

オーストラリア（六六名）、バングラデシュ（三名）、ビルマ（三名）、フィジー（三名）、ホンコン（二八名）、インド（一〇名）、インドネシア（二五名）、韓国（八名）、マレーシア（三名）、ネパール（三名）、ニュージーランド（二二名）、パキスタン（三名）、バプア・ニューギニア（三名）、フィリピン（二九名）、シンガポール（三名）、スリランカ（三名）、タイ（一〇名）。

そして和歌山、茨城、千葉、長野、北九州、兵庫、山口など一〇九名。最後に六四一名の大部分選手団。

真夏といつてよいほどの強い陽光の下、胸を張って行進する選手たち。スタンドを埋めた二万五〇〇〇人の大観衆が送る拍手は一つのリズムになって、緑のフィールドにこだまする。

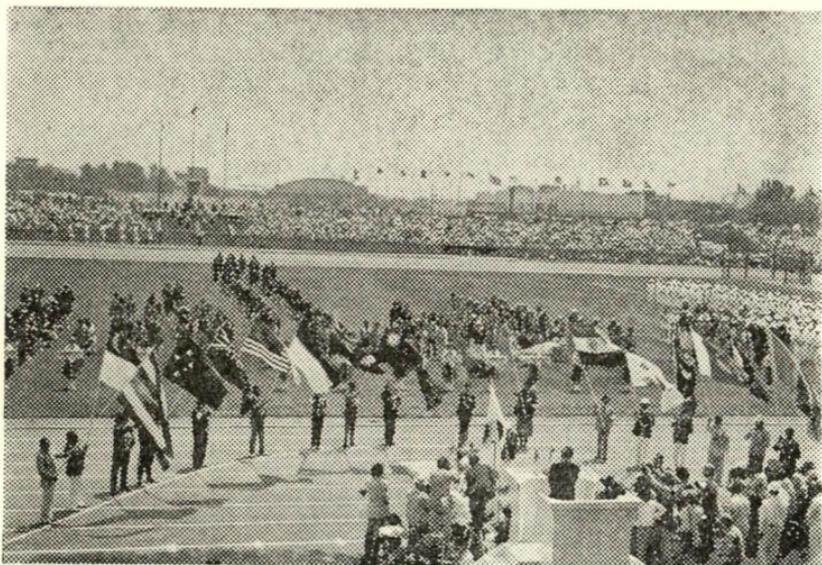
見るからに体力、経済力ともに充実した感じのオーストラリア、ニュージーランドにくらべ、旅費の都合がでさず、一度は出場を断ってきたバングラデシュ、ビルマ、フィジー、マレーシア、ネパール、パキスタン、パプア・ニューギニア、スリランカなど。だが、その表情はみんな明るい。

ネパールの国旗の後を松葉杖の少女が、懸命に歩く。右足切断のスリヤ・クマリ・グルンちゃん、一三歳だ。頭の大きなリボンが、ひと足ごとに揺れる。

皇太子殿下、妃殿下が息をつめられるようにして拍手されている。河野参議院議長、田中厚生大臣、立木大分県知事、葛西身障スポーツ協会長、天児九大名誉教授、井深ソニー会長、立石電機社長、早川電機社長が拍手する。パラリンピックの創始者、グットマン博士が拍手する。作家の水戸勉さん一家も、そろいのフェスピック陽よけ帽をかぶって拍手する。松葉杖を横に置いた直子ちゃんは、カメラを膝に拍手する。

タイの一〇人は、メインスタンド前で立ち止まり、合掌して深く頭をたれた。

選手団が整列し、私は緊張して演壇に立った。



フェスピック第一回大会（一九七五年六月一日・於
大分市）上——勢ぞろいした各国選手団 下——大
分県選手団長・吉永栄治君（太陽の家代表）の力強
い宣誓（撮影・和木光二郎氏）

「ここに歴史的な第一回極東・南太平洋身障者スポーツ大会の開会を宣言する——」

ファンファーレと煙火がダブリ、鼓隊の先導で大会旗が入場。東西両ゲートから、スリランカ選手と大分県立聾学校生徒が炬火を掲げて走り込む。この火は、一昨日、選手宿舎のホテル屋上で、韓国とニュージーランドの選手がレンズで採った太陽の火。二人はメインスタンド前で交差し、炬火台で合流。火は一つになって燃え上がった。

そして、「若い力」の演奏とともに大会旗がメインポールにひるがえる。いまはじめて、東南アジアの発展途上国の身障者がスポーツの場に集まった。脊髄損傷者だけの車椅子の大会から、身障者全体の国際大会がいま始まった。

私の感動は、出場者、関係者全員の感動だったに違いない。そして、スタンドを埋めた観衆の一人一人の胸に同じ感動が打ち寄せたに違いない。日の丸の掲揚も、君が代の演奏も、マスゲームもない会場に、朝早くからつめかけた人びとは、燃えるような太陽の下で席を移動することもなく、連帯の大きなうねりのなかにあった。

皇太子殿下のおことばのあと、大分県選手団長の吉永栄治君が選手宣誓をした。彼は太陽の家の職員であり、全国ではじめて車椅子で当選した別府市会議員である。両殿下は、

「選挙はたいへんだったでしょう。当選してよかったですね」

と、私に話されながら、フィールドにおりられる。

「からだの調子はいかがですか。どのゲームに参加されるのですか」

「いま、仕事は何をされているのですか。将来はどうされるのですか」

選手団の一人一人に話しかけられ握手をされる両殿下。そして、答える選手たちの笑顔。それを暖かく見守る大観衆。両殿下をご先導しながら、私の胸はきつくしめつけられた。

この日、がここにある幸せであった。

グットマン博士の秘術

「身体障害者に最も有効な治療法はスポーツである」

といい、それを実証したのは、イギリスの神経外科専門医L・グットマン博士である。

昭和三十五年二月、私は味噌と醬油しやうゆをつめたリュックサックを背負って、ロンドン郊外ストークマンデビルの国立脊髄損傷センターせきずいを訪れた。博士はセンターの院長だった。

ホテルをとる余裕もなく、公衆便所で着がえをして訪れた私に対して、博士の最初のことばはきわめてきびしいものだった。

「きみは日本人か。いままでにも何人もの日本人がやってきたよ。みんながここのやり方を真似したいといって帰っていった。ところが、いまだに一人として実行していないようだ」

どうせ、お前もその一人だろうというわけである。そういわれれば黙ってはいられない。

「ほんとうにすばらしいものなら、私は真似をする」

「すばらしいと思うかどうかは、きみの主観の問題だ。事実だけをいえば、この脊損患者の八五パーセントは、六ヶ月の治療・訓練で再就職している」

「それがほんとうなら、その治療法をせひ学びたい」

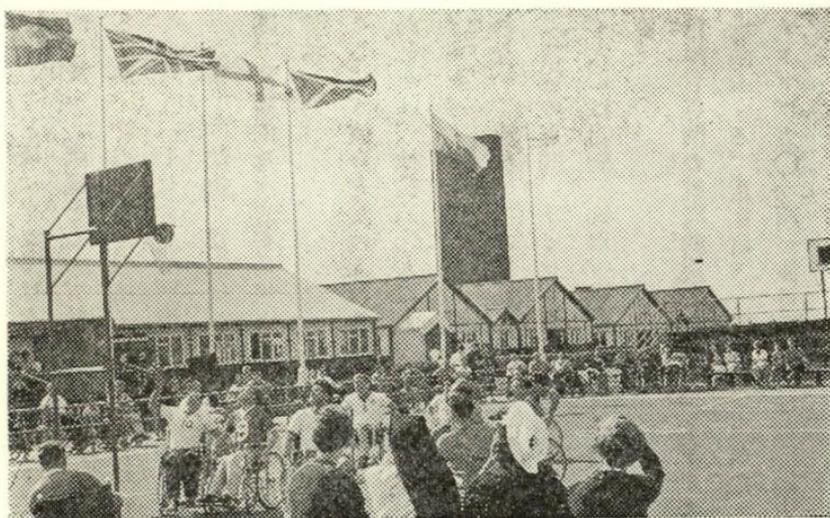
「納得できるまでいるがよからう」

そういう話をしながら、博士の話がウソかほんとうか見きわめなければならぬと私は思った。

脊損患者——病気や事故で脊髄の機能をそこねて、下半身にマヒなどの障害をおこした人——といえ、当時の日本では再起不能者であり、生ける屍しかばねとみられていた。その重度障害者が六ヶ月で、しかも八割以上が社会に復帰するとは——おそらくウソだろう。ザックをかついでノコノコやってきた東洋の若造わかぞうとみて、軽くホラを吹いているに違いない。あるいは、ほんとうだとすれば、よほど特殊な治療法があるのだ。私は、ともかく教えを受けにきたのだから、秘術というものがあるなら、何としてもつかんで帰らねばならないと考えた。

だが、博士の秘術は——秘術というものが常にそうであるように、私の予想を超えていた。

手術室でのメスの動きは、しごく平凡だった。はじめは、特別な手術方法を私に見せないようにしているのかとも思ったが、そうではなかった。事実、脊損患者は手術室を出ても脊損者だった。彼らが立ち上がって病院を出ていくという風景は、私もまた考えてはいなかった。



ストークマンデビルの国立脊髄損傷センター（1960年） 重度障害者の八割以上を
わずか半年で社会復帰させるグットマン博士の秘術はスポーツだった

では、博士の秘術は何なのか。私の疑問
に対して、スタッフの一人は、

「博士は神でも魔術師でもない」

と答えたが、それはたしかに、コロンプ
スの卵のように、明瞭で正しい治療法だっ
た。回診は、PT（理学療法士）、OT（作
業療法士）、RG（医療体育士）、ソーシャ
ルワーカー、養護学校の担当教師などで構
成されたチームで行なわれ、最も適切な訓
練方法が指示された。患者はいつまでも
ベッドで寝ていることを許されなかった。
「一日も早く、わずかでも機能を回復させ
る」ために、スポーツがすすめられた。
ある意味では、きわめてスパルタ的治療
法である。特殊な外科手術を期待した私の
予想はずれたが、日本では考えもつかない
治療法と、その効果を見ることができた。

博士のことばはウソではなかった。ここでは病気を治療するだけでなく、労働者としての人間的な教育と訓練をして、社会へ送り出していた。もちろん、可能な限りの治療・訓練をしてのことだが、脊損患者は車椅子使用者として社会へ出て行く。

その八五パーセントが平均六ヵ月で社会復帰する秘術の第一は、回診チームの構成にみられるような科学的治療。第二は、スポーツを中心に残存機能を回復・強化し、全身の耐久力をつけ、明朗で積極的な意志の持主とし、持続力と規則正しい習慣を身につけて社会生活に適合させることであつた。

そして、彼らを受け入れる社会には、すばらしい福祉制度があつた。

たとえば、社員二〇人以上の企業は、その三パーセント以上の身障者を雇用しなければならぬ。エレベーター係、自動車駐車場係などは身障者以外を雇用できず、これは三パーセントに含まれない。違反者には罰金または禁固刑という雇用義務。身障者が自宅生活をする場合は、退院前に自宅の玄関、トイレ、浴室などを車椅子に合わせて改造し、車椅子や尿器などを支給する。働く人には自動三輪車、戦傷者には小型自動車を、身障者自身で運転できるように改造して給付する。

身障者専門の就職斡旋^{あつせん}事務所が、イギリス全土に一一〇〇ヵ所あり、就職労務管理や職業訓練の世話もする。重症者で一般の職場に就職しにくいものには、国立の保護工場（レンブロイ・リミテッド）九〇ヵ所が設けられ、ほかに地方自治体立や私営の授産所に政府補助が行なわれる。

家庭へ帰れない事情のあるものには、病院と同程度の設備をもった収容施設があり、そこから彼らはさまざまな職場へ通勤する。

こうした身障者のリハビリテーションについては、保健省をはじめ労働省、恩給保険省、教育省などが完全な協力体制をつくり上げている。

ひるがえって、当時のわが国の状況はといえば、まさに天地雲泥の差。見聞が拡がるにつれて、「六カ月で八五パーセントの社会復帰」はホラどころか、疑問の余地のない現実と知ったのだ。

昭和三十五年七月 厚生省社会局調査

身体障害者福祉法による六級以上の身障者は、全国に九四万九〇〇〇人。人口一〇〇〇人につき一〇・二人。うち肢体不自由者は五九・七パーセント。全体の一七パーセントは不就業。生活保護を受けているもの七・五パーセント（一般の四倍）。一五歳以上の就業者は四六パーセント（ただし、そのほとんどは自営業）。

昭和三十五年十一月 労働省調査

従業員一〇〇人以上の事務所の常用労働者四八万三〇〇〇人のうち、身障者は四万三〇〇〇人。雇用率は平均〇・八二パーセント。

イギリスの場合——一九六〇年四月現在——

人口一〇〇〇〇人につき身障者は一四・八人（労働力人口のみ）。失業率七・九パーセント。

ヨーロッパおよびアメリカでリハビリテーションに対する関心が高まったのは、第二次大戦によって多数の傷病者が出たからだといわれる。

日本もまた多くの傷病者を生んだが、戦後長らく就職難時代が続いたように、いわゆる白衣の傷^{しやうい}残^い軍人の存在は忘れられた。しかし、欧米ではそれを貴重な人的資源と考え、税金の消費者を納税者に変えることによって国家財政的にも有利な投資としたのだった。

身障者を、片輪者^{ひとまわ}として、人間の数にいけない国と、「身障者が人間でなくて、だれが人間か」という国の差は、どこからきたのか……？

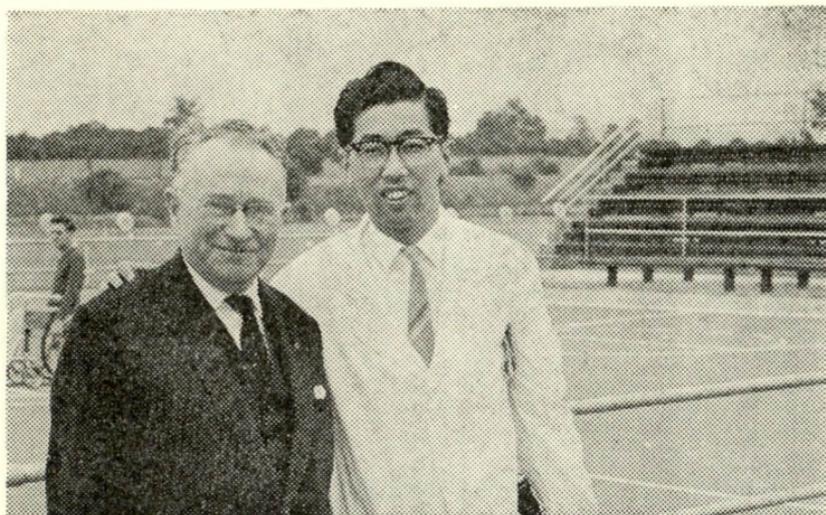
イギリスの現実を見て、「医者は患者を治療するもの」とだけ考えていた私は、まさにマブタからウロコが落ちる思いを味わったのだった。

休日に私が当直をしていると、ふらりと立ち寄る家族連れがいる。

「家族の面会や見舞いがいない患者はどこにいるか」

「あなたは？」

「見舞いに来た。これからピクニックに行くが、ここに寄るつもりで一時間早く家を出た。弁当



グットマン博士と私 「手術よりスポーツ」私は大きな目標を与えられた

も患者に食べてもらうために余分につくってき
た」

彼らのごく自然な態度で患者の爪を切り、病室
に花をいけてからレジャーを楽しむ。

こういうことが、ごく当り前のことになってい
る国である。

私は、このストックマンデビルではじめて一つ
の大きな目標を与えられたように思った。

グットマン博士の「手術よりスポーツ」という
治療方針も、リハビリテーション医学として最も
正しいことが理解できた。

妊娠中にポリオ（小児麻痺[＊]）にかかり両足が完
全に不自由になった女性が、オリンピック馬術競
技で二位に入賞（一九五二年、ヘルシンキ大会で
デンマークのリス・ハーテル選手）というような
ことが、特別に奇異な感じを与えない。ヨーロッ
パは、そうした社会的伝統をもっていた。西ドイ

ツのケルン体育大学には、身障者スポーツ専門科があるが、その主任教授H・ローレンツェンは下肢切断者だった。

グットマン博士の治療方法は、多くの実在のサンプルにも支えられていた。そして、ストックマンデビルに始まった身障者スポーツは、すでに大きな流れに成長しつつあった。

一九四八年 第一回ストックマンデビル大会

一九五六年 オリンピック委員会が、脊損者のスポーツ団体として公認

一九六〇年 ローマ・オリンピック大会直後、同施設に二二カ国、四〇〇名の選手が集

まり、パラリンピック（脊髄損傷IIパラプレギアのオリンピックの意）開催

（以後、毎年ストックマンデビルで国際ストックマンデビル大会を、オリンピック開催年にはその開催地でパラリンピックを行なうことになる）

東京パラリンピックの教訓

帰国後、私は国立別府病院の職場にもどったが、日本のすべての病院がそうであるように、患者にスポーツを強制することなどできるはずもない。では、健康を回復した身障者ならどうだろ

うか。

私は多くの関係者の意見を求めた。その答えのほとんどは、

「無茶だ」

「体調をくずして余病をおこすことになるだろう」

「基礎訓練をどうするのか」

と、否定的だった。しかし、無茶でないような体制ができるのを待つてはいられない。体制づくりをしようとするものがない場合、だれかがそのきっかけをつくらねばならないのだ。

さしあたって、私は大分県内を歩きまわった。県庁、学校、体育指導者、整形外科医、身障者団体……。そして、まがりなりにも、大分県身体障害者体育協会を組織し、協会主催のスポーツ大会を開くことができた。

一部の批判はあったが、大会は一応成功した。だが、大方の目は、気まぐれな田舎医師のお遊びとみていたはずである。反響はゼロといってよいものだった。

日本人は事大主義者である。とくに中央からみて、地方の出来事はほとんど目に入らない。逆にアメリカ、ヨーロッパのこととなると大騒ぎする。私はストークマンデビル大会に参加しようと考えた。身障者スポーツは大騒ぎされなければならないのである。

だが、スポンサーが容易に見つかる時代ではなかった。選手はいても、旅費がなければ参加できない。手当りしだいに頭を下げまわって、ようやくBOAC（イギリス海外航空）から一人分

の航空券を、朝日新聞とNHKからは、後援、ということばをもらうことができた。

こうなると、逆にイヤでも出かけなければならぬ。私は愛車を売り、やりくり算段のあげく、ようやく選手二人を連れて飛行機に乗った。この別府の二人は、はじめてストークマンデビルを訪れた東洋人身障者の代表だった。

競技成績は上位に記録されるものではなかったが、私たちは満足だった。

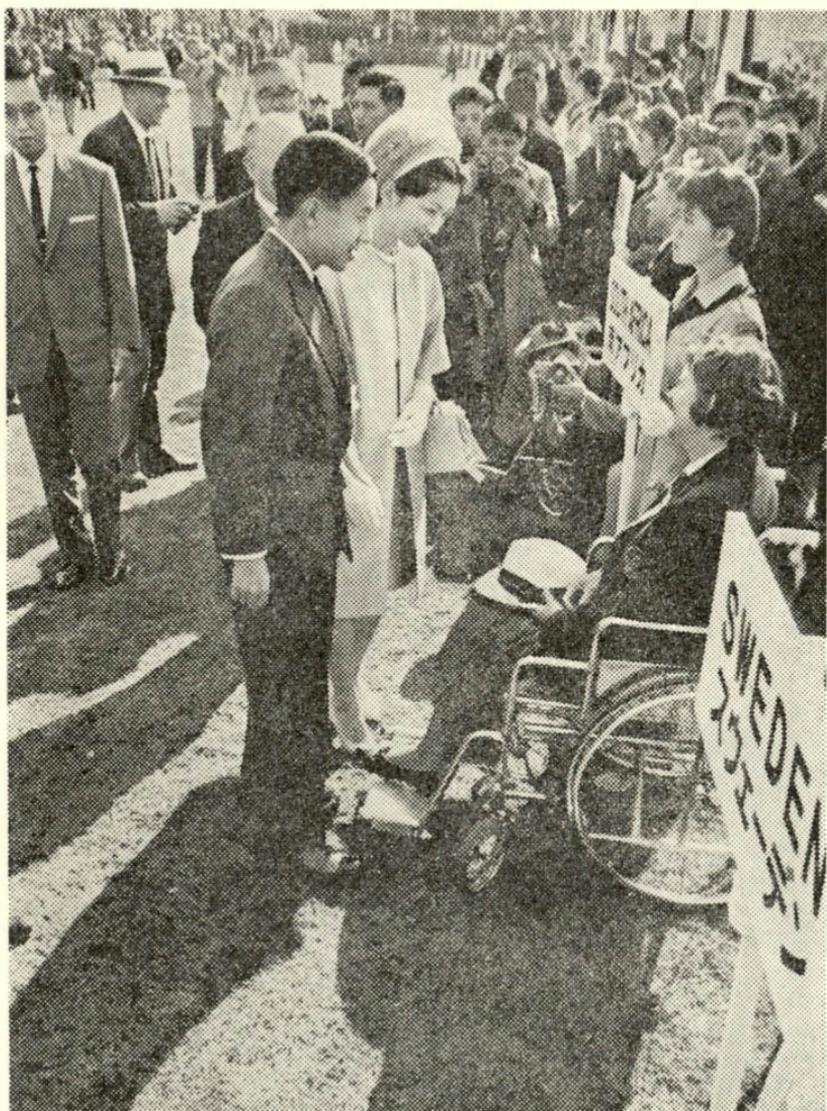
「よくきた」というグットマン博士の暖かい声と、「きみの仕事は始まったばかりだ」という励ましが、「迷わずに進め」と聞こえた。

事実、身障者にとってスポーツがどんな意味をもっているかは、もはや明瞭だった。治療（脊損者が最もかかりやすい尿路感染症や褥瘡^{じよくそう}などの合併症を予防する効果は大きい）と訓練はもちろん、身障者問題全般の啓蒙とアピールのためである。

ストークマンデビルへは翌年、翌々年も参加。ヨーロッパ一三カ国に日本が加わったオーストリアのリンツ大会では、別府市の高崎謙一選手が銀メダルを獲得した。

苦勞して出かけたかいがあった。徐々に関係者の認識もあらたまり、葛西嘉資氏を中心に日本身体障害者スポーツ協会が生まれ、国民体育大会の開催とともに全国身障者スポーツ大会も行なわれることが決定するにおよんで、厚生省から補助金が支給されるようになった。

また、国際身障者スポーツ大会準備委員会が結成され、東京オリンピックに東洋ではじめてのパラリンピック開催を誘致した。



パラリンピック東京大会（1964年） 外国選手にもお気軽に声をかけられる皇太子ご夫妻

昭和三十六年十月 第一回大分県身体障害者体育大会を開催

昭和三十七年七月 第十一回国際ストックマンデビル大会に初参加（以後、毎年参加）

昭和三十八年四月 国際身体障害者スポーツ大会準備委員会を設立

昭和三十八年七月 オーストリア・リンツの第一回国際身体障害者競技大会に参加

昭和三十八年十月 第十八回国体（山口市）において第一回身体障害者スポーツ大会を

開催

昭和三十九年七月 国際ストックマンデビル競技委員会で、東京大会の開催を受諾

体操のチャスラフスカ、マラソンのアベベ、バレーボールの、東洋の魔女。といったはなばなしい活躍の直後、代々木の選手村、織田フィールドでは車椅子選手ばかりの開会式が行なわれた。

皇太子殿下、妃殿下、グットマン博士らの前をS・M・Gと書かれた大会旗を先頭に、二二カ国、三八四名の役員・選手が進む。しんがりには、前日、日本選手団長として私が常陸宮殿下から賜わった日の丸。

ストックマンデビルの大会が、ついに、いま日本で開かれた！

だが、私はうれしきどころではなかった。少しの間も同じ場所にいることができないほど忙し

く、進行が気になってゲームもほとんど見られなかった。

数ヵ月来、資金の調達と運営準備に駆けまわったが、本番となるとミスは許されない。はたして、遠い日本まで何ヵ国が来てくれるかという不安もあったが、予想以上の参加に、うれしさは悲鳴に変わっていた。宿舎入口などに車椅子用のスロープをつけることや、フィールドの特設スタンドは、オリンピック選手が引きあげたあとの二日間で工事を完成させなければならなかった。選手の健康管理にも手抜きがあつてはならなかった。

私は緊張のしどおしだったが、ともかく五日間の大会は終わった。また、続いて行なわれた国内大会も無事終了した。

国際身体障害者スポーツ大会——東京パラリンピック 昭和三十九年十一月八—十二日

参加二二ヵ国。選手三八四名、付添い一八五名。アジア地域からの参加は日本のほか、フィリピン、オーストラリア、セイロン。

総合成績は、一位アメリカ、二位イギリス、三位イタリア、日本は一三位（金メダル一、銀メダル五、銅メダル四）

オリンピックは、参加することに意義がある、といい、競技は、友好第一、というが、競技成績はその国のスポーツのレベルを端的にあらわす。金メダルが卓球の一個だけというのは、何と

してもさびしかった。

いちばん弱いフィリピンには勝てるだろうと思つたバスケットも、皇后陛下の面前で大敗してしまつた。こうなると、「頑張れ」と声援するより、「早く終わつてくれ」と祈る気持ちになる。

「これは、ちょっと恥ずかしかつたかな」

「しようがないね、ふだんやつていないものを駆り集めてきたんだから」

「どのくらいおくられているか、はつきりしていいじゃないか」

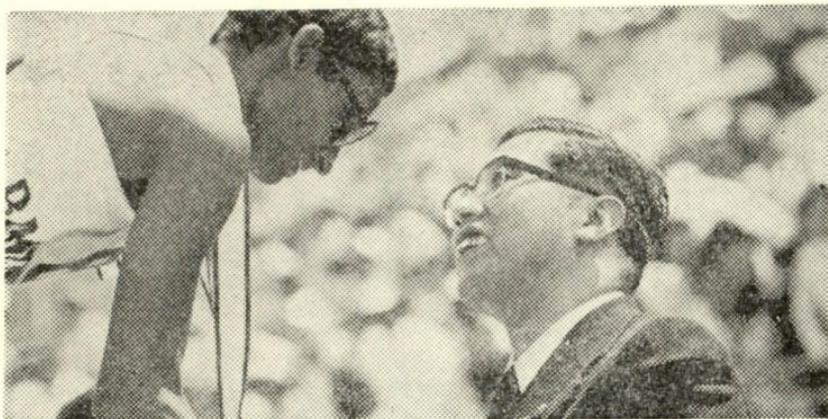
役員たちはそんなことを話し合つていた。

何といつても、外人選手は筋骨たくましい。顔色も明るい。それに対して日本選手は弱々しく、顔色も暗い。スポーツをふだんやつていゝものと、やつていゝものの違いばかりではない。日常の生活がまるで違ふのだ。

外人選手のほとんどは仕事を持つていた。神父、弁護士、会計士、秘書、事務員、電気技師、熔接工、組立工、セールスマン、記者、支配人、機械工、時計屋、本屋、タイピストなど、職種も各分野にわたり、給料も健常人とまったく差がないということだつた。

だから、競技の合い間には商社などへ仕事に出かけるものがいた。タクシーを呼んで、デパートへ一人で買物にも行く。だれの手も借りようとしなない。

一方、日本の選手は五三名のうち仕事を持つていゝものが、わずか五人（木材屋、時計修理屋、印判屋）。それも自営業ばかりだつた。ほかはすべて自宅か療養所で、だれかに面倒をみて



東京パラリンピックの教訓 外人選手は筋骨たくましく表情も明るかった

もらっているものばかり。元気がないのは当然だった。競技中の受傷事故も、外人選手は転倒して右手を捻挫ねんざしたものが一人いただけ。日本選手はアキレス腱を切るなど、基礎訓練のなさがはつきりあらわれた。

車椅子の性能の違いもよくわかった。イギリスのスポート車は、重量が二三キロ。日本の車椅子は二三キロだった。また、外人選手は体に合った車椅子を使っていたが、日本は身障者の体格に関係なく、サイズは一つしかなかった。

脊損者には必需品の収尿器も、日本では満足なものなかった。大会直前に、私はアメリカから緊急輸入して、どうにか間に合わせたが、日本選手には使いなれないものだった。

また、欧米選手のほとんどは国や保険から車を支給されていたから、オーナードライバーだった。ところが、日本は身障者が車を運転できない国だった。収尿器がなく、車がなければ、とくに脊損者はおしめをあてて家に

閉じこもるよりしかたない。そういう生活を長く続けてきたものが、いきなりスポーツ大会に出て、まともに競技ができるわけがない。

だから、「無茶だ」という考え方が強かったのだ。日本の社会全体が、「身障者は保護すべきもの」と考えていた。大会関係者のなかにも、そういう考え方をする人が多かった。

「大変だ。外人選手が勝手に街へ出て行っている。すぐ一人一人に自衛隊をつけよう。事故が起きてからでは遅い」

と、大騒ぎする人もいた。カンカンガクガクの会議の末に、せっかくの提案は没になったが、その提案が通っていたなら「東京では重要人物扱いされた」と、大会史に残ることになったろう。新幹線が脚光を浴び、高度成長の波がすぐ近くまで寄せていた。東京の街に新しいビルは建ち始めていたが、マンションという名はまだ一般的なものでなかった。個人のプライバシーという問題も、身近なものではなかった。身障者は保護すべきもので、そのプライバシーなどは論外だった。

しかし、そういう時期だからこそ、車椅子の外人の明るい姿は、あるはつきりしたもの——生命の尊さ——を教えてくれたように思われた。

オリンピックのはなやかさにくらべて、パラリンピックは静かに行なわれた。

「パラリンピックより、いま必要なのは施設をつくることだ」という声もあった。だが、車椅子選手の姿は一般にもある具体的なイメージを焼き付けたはずであった。

事実、数年後、ひとびとはハダシの王者アベベが交通事故を起こし、車椅子に乗ってストックマンデビル大会に出場するニュースを知るのである。

解団式で私は選手たちに行った。

「外人に負けてはいられない。そのためにも社会復帰できる施設をかならずつくらなければなら
ない——」

第二章——自活できる施設を

水上勉さんと身障ムード

私は、国立病院に勤めながら、別府整肢園長せいしえんを兼ねていた。病院で手術する患者は、どちらかといえば交通事故や労働災害などによる障害者が多いが、整肢園で接する子どもたちはほとんど先天的障害児である。

病院では、外科的治療がすみ健康が回復し、一応の機能訓練を終われば、医者も患者もするところがない。当然、退院というわけだが、退院したがない患者がいる。

「こんなからだじゃ、家に帰っても邪魔者扱いされるだけです。治療が終わらないということにして、もう少し置いてください」

と、泣きついてくる。受傷前の給料の六割を支給される労災患者はとくに在院期間が長びく。一日も早く家に帰りたいという気持ちは山々だが、復職はできず、再就職も絶望的となれば、病院のほかにも身を置く場はどこにもないのだ。運よく授産施設に入れたとしても、訓練期間が終れば放り出されるのである。

整肢園はどうだろう。

どこの児童施設も圧倒的に収容能力が少なく、介護人・看護婦が少なく、訓練設備も不十分、運営は赤字という慢性的状態のなかでもがいていた。

それでも入園できる子はまだ幸せといえた。障害児をかかえて一家心中というような悲惨な例はあとを絶たなかった。

しかし、入園できたものは安心かといえば、そうではない。受け入れ先があらうとなかろうと、満一八歳になれば退園させられるのである。そうした子どもたちは、恵まれた家庭を除けば、ほとんど生活保護の対象者になるだけだった。

せっかく歩行訓練をしても、家庭に帰れば畳の上を這いまわるだけである。私は医師として、医学的な遊びにふけているにすぎないのではないかという気持ちをおさえることができなくなっていた。

職業経験のあるものさえ、一度障害者になれば再就職の可能性はきわめて少ない。先天的障害児が社会に入っているわけがないのだ。

こうしたことを是正する必要があることはいうまでもない。本来、国がやるべきことではあるが、国が手をつけないなら個人でもやれるだけやろうという篤志とくし的な人びとが、犠牲的活動を続けていた。だが、そうした活動も、絶望的な身障問題を打開するだけの力を持っていなかっただけで、おしなべて、それらの活動は障害児または障害者を「保護」する姿勢をとっていたからである。もちろん、保護しなければならぬ障害者が多数いることは事実だが、自立能力をもっているものも多い。保護第一の考え方は、障害者自身の自立意志をスポイルし、活動を慈善的行為にとどめることになりやすい。

たまたま、身障者問題がマスコミに大きく取り上げられた時期であった。

作家の水上勉氏が「拜啓 池田総理大臣殿」という一文を発表した（『中央公論』昭和三十八年六月号）。先天的障害児の父親となつてはじめて、身障児対策がいかに遅れているかを知った水上氏は、進んで各地の演壇にも立った。その鋭いことばは、全国数十万の身障児をもつ親の「声なき声」を代表するものとして世論を盛り上げた。そして「あゆみの箱」運動が起こり、パラリンピックである。

ムードは盛り上がっていた。経済状況も上向きだった。

「やるならいまだ」

と、私は思った。

パラリンピックの翌年の春、整肢園に水上さんの娘さん、四歳の直子ちゃんが入園してきた。

そのへんのことは水上氏の作品『くるま椅子の歌』に書かれているが、先天性脊椎せきつゝい破裂の後遺障害で、東京の病院では「一生歩けないだろう」といわれたということだった。

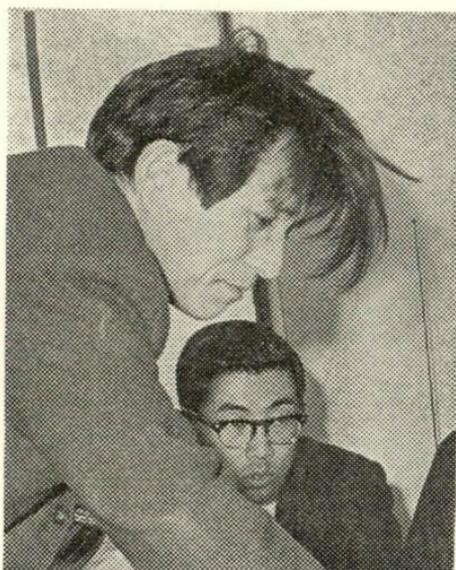
「歩けなくとも、せめて立たせてやりたいのです。家では満足な訓練もできませんし、ここならお友だちもできるでしょうから」

という奥さんに、私は答えた。

「大丈夫、手術すれば補装具を使って歩けるようになります。ただ、本人が歩こうという意志をもつことが大事ですから、しばらくお母さんと離れて暮らすほうがいいでしょう」

幼い直子ちゃんは、同じ障害児の集団に入って、見ちがえるように元気になった。『くるま椅子の歌』（中央公論社刊）には、つぎのように書かれている。

「——たとえば、これまでは、一メートルほどわきにあるものでも、取ってくれとせがみ、かまってやらないと、ヒステリーを起こして泣きわめいたものだが、最近は、自分で近づいていって掴みとるようになっていた。訓練所の友だちが三



水上勉氏 「私にできることならなんでも……」
という氏の言葉は私の心の支えになった

輪車を駆使しているのをみて、自分も乗ってみたいと、せがむようになった。友だちが、一歩一歩と看護婦に手を取られて歩いて歩いているのを見ると、自分もそのようにしてくれという」

そして、やがて直子ちゃんは、赤い歩行靴をつけ、歯をくいしばって歩行訓練を始める。足首から先の神経は死んでいたが、私は奥さんの腰骨を移植して直子ちゃんの股関節を作り直した。手術が成功し、幼児と母親の忍耐強い訓練が長い間続く。こうして直子ちゃんは松葉杖で歩くことができるようになるのだが、彼女はまた、父親の水上市と私を結びつけてもくれた。

上京した私は、水上市さんに日ごろの考えをぶちまけた。

「保護はダメです。自活しなければ幸福になれない。訓練と適当な職種・環境さえあれば、ほとんどの障害者はどんな仕事もできます」

『くるま椅子の歌』では、小島という医師がこういつている。――

「……いま、日本の医学が、社会が、政治がしなければならぬことは、これらの障害者を完全に働かせるということです。なぜなら、この人たちは、税金をたべているからです。このままでは、社会福祉亡国といって、日本は、障害者ばかりの天国になって、健康者が喘ぎながら、税金の重荷に苦しむ悲劇がくるかもしれませんね。これほど、車やオートバイが製造されて、せまい国土を狂い走るようでは、毎日怪我人の続出ですし、薬や、その他から、不具廃疾の子の生まれる率が増加している日本の現状です。……障害者の社会復帰施設は……子供の時分から必要なんです。……奥さんの赤ちゃんだって……いまのうちから、歩く練習をし、何かの才能を身につけ

る必要があるというのは、この意味からなのです。私は、不具の子だって、教育と機能の開発次第では立派に世の中に生きて、税金をたべるところか、税金を支払ってゆくことが出来ると確信しています。日本に、そのような姿がみられないのは、政治や社会の体制がそうならないため、誰もが働けない仕組みに出来ているからです。身障者を殺つぶしのように人はいいですね。いったい生命というものがある以上、この世に生きる力がある以上、その人は……何かの才能をもっている……その力を発見し開発してやらねばならない。……それが……つまり、私の施設なのです……」(前掲書)

現在の日本には十分な施設もない。だから、まず施設をつくれという声が高い。だが、単に身障者を保護するだけの施設には大きな疑問がある。だいたい数十万から百万を超える身障者の全部を収容するほどの施設をつくるわけにもいかないのだから、自活するための施設が必要なのだ。この私の主張をだまって聞いていた水上さんは、顔を紅潮させて大きくうなずいてくれた。

「その通りです。やりましょう。ぜひ、その新しい施設を作りましょう。あなたの考えが実現できれば、日本もようやく文化国家になる。早速、構想を固めてください」

はつきりした構想が、私にあったわけではない。とにかく始めなければならぬという気持ちだけである。確定的なものは何一つない。

「私にできることは……全面的に」

という水上さんのことばだけが支えであった。

ガラクタの山 善意工場

私は三八歳の一医師だった。新しい施設をつくらなければならないという気持ちは、もはや動かすことのできないものになっていたが、そのための力はまったく足りないにひとしかった。別府整肢園が社会福祉法人であることと、水上勉氏が助力を約束してくれたことを基盤にする以外にない。

私は、整肢園の付帯事業として「別府善意工場」というものを考えた。アメリカで、家庭用品の廃品を集めて更生・販売している「グッドウィル・インダストリーズ」という身障者の組織が一応成功している。それにあやかろうとしたのだ。

別府善意工場設立趣意書

〔目的〕 全国の市民が廃棄した衣類・家具・器具等を集めて作りかえ、特約店で販売するとともに、新規製品の製造もおこなうことを目的とする。これは、利益のために組織されるものではない。収益は役員、会員、個人等いかなる者も個人的な利益のために役立たせるものでなく、その果す役割は多くの人びとの善意を基とし、身障者を職業を通じて社会復帰さ

せる社会福祉事業である。

「職業的評価」 身障者がどんな能力を失ったかは問題ではなく、どんな能力が残っているかが問題である。身障者に新しい希望を与える第一の大きな段階は、この人たちにもっとも適した仕事を見つけてやることである。適性・心理的・職業的な各種テストによって、興味と技術の両方を加味し、職業訓練して社会復帰させる。

結果からすれば、この試みは見事に失敗した。まず、廃品の集まりぐあいをみるために、青年赤十字団などに協力を依頼したのだが、幾日もたたないうちに相当の量が集まったという報告だった。

「ずいぶん集まりましたよ。でも、あんなガラクタをいっただうするつもりですか」

そういわれて、集積場に駆けつけてみると驚いた。なるほどガラクタの山である。

底の抜けたタイヤや片足だけのゴム長靴、ボロボロの兵隊服、つまみがとれてデコボコの鍋、がらんどうのテレビ、錆びきった洗濯機、首がない人形……。

思わず「うーん」と腕組みをするばかりで、どうにも手のつけようもないしろものである。

「とにかく、これはこのままにして……。集めるほうは休みましょう」と逃げ帰った。

東京にも依頼してあったが、電話の様子では同じようなぐあいらしい。あのガラクタが日赤本部の倉庫にもうひと山あるというのだ。

「どうです、まだ集めますか」

私はうんざりして答えた。

「ありがとうございます。せっかくですが何とか処分してください」

豊かなアメリカでは、まだまだ使える物が廃品扱いになっているから、十分に更生できたし、その更生品を買う層もある。新品に近いものも、善意で提供する社会性があるし、一方、実用価値があれば利用する合理性をもっている。

だが、日本の家庭から出る廃品は、まったくの廃品だった。使い捨て時代に入りつつあったが、使える物を捨てる時代にはなっていなかった。また、ほんとうに使える物を捨てる時代なら、その再生品を買うこともないに違いない。

赤十字の少年たちが訪れたのをいい機会に、廃品回収業者も持っていないクズを整理した。そういう家庭のために、少年たちは奉仕したことになった。

私の最初のもくろみはずれた。何もないから廃品でも集めて、それを足がかりにと思ったのだが、そういう善意に期待する方式は日本では成功しないと知った。また、廃品更生というような消極策は、決して本筋ではあるまいと考えた。あくまでも堂々と生産体制をとるべきで、そうでなければ新しい施設になりえないし、身障者の独立、自活もないとあらためて考えた。

エンジン全開スタート

「とにかく、小さくともいい。物を作る工場をやりましょう。最初から大きなことは考えずとも、できることから始めましょう」

直子ちゃんの様子を見に来た水上さんが、少しがっかりしていた私を励ましてくれた。

「それにしても、人ですね。だれかいますか」

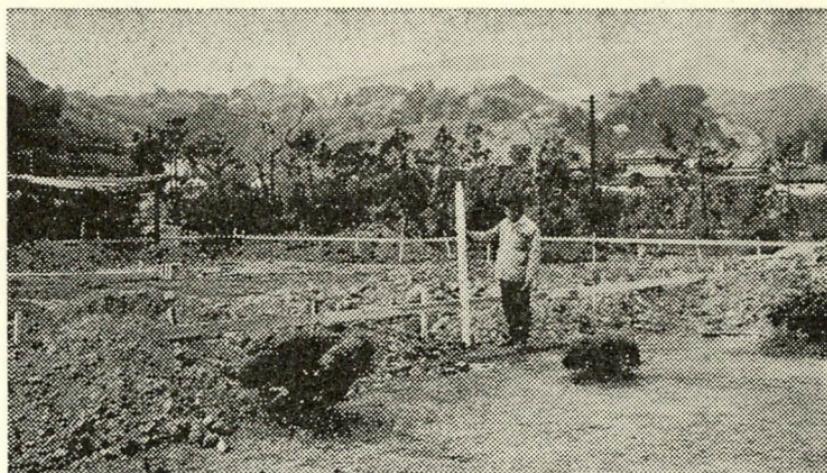
整肢園の副園長をしていた畑田和男医師と、国立病院の河野昭吾訓練士が最も信頼できる相談相手だったが、新しい仕事を専門にやってくれるような人は、周囲にいなかった。恩師や先輩に話をもちかければ、「そんなバカなまねはやめろ」といわれることがわかっていった。

だが、専従者がいなくては仕事は進まない。

「長崎のコロニーに中村泰友という人がいますよ。国立病院でベッドを並べていたから気心は知っています」

と、河野君が候補者をあげた。

「それじゃ、すぐに行って何とか交渉してみよう。中村氏がダメなら、適当な人物を紹介してもらおう」



設立当初の敷地風景

もう八月になっていた。大村市の長崎コロニーで中村氏に会うと、ABC（原爆傷害調査委員会）にも勤務していて、長崎を離れることができないという。

「では、だれかいませんか」

「そうですね、すぐにはむずかしい」

「すぐじゃないと困る。あなた、来てくれませんか」

私は、かたわらに立っている事務局長の牟田雪義氏にいった。

「私？ とんでもない。ここを放り出すわけにはいきません」

と、牟田氏はあわてたが、私は強引に頼みこんだ。

「永久にというわけじゃない。私のほうの目鼻がつくまで。書類の作り方などを教えてほしいんです。専従職員はすぐに探します。ここの仕事に支障がな

いように、手伝ってくればいいんです」

昼すぎから夜の八時まで説得を続けて、牟田氏はついに承諾してくれた。

一方、私は国立病院の近くの小野田セメント保養所に目をつけていた。住んでいる人はいたが、老朽化していて、閉鎖寸前の状態だったから、交渉しだいで入手できると考えていた。私の職場に近いだけでなく、入所者にとって医療施設が近くにあることは絶対条件だったからである。

九月に入って、いよいよ具体的な準備活動が始まった。整肢園の園長室が仮事務所だったが、私は家に帰っても寝つかれなかった。寝室でゴソゴソ起きていると、妻まで寝不足になるので、応接間にふとんを敷いて、仲間を呼び、明け方まで話し合うような日が続いた。

小野田セメントの保養所買い取りの話は、整肢園が担保を入れることでメドがついた。事業のほうは、あちこち駆けまわったあげく、別府義肢製作所と並松製簾所が、工具と材料持ち込みで指導してくれることになった。義肢装具部と竹工部である。

また、河野君が考案した車椅子をつくることと、将来のことを考えて、金属加工一般の金工部。リンツのスポーツ大会に参加した高崎君が大工だったので、彼を中心に木工部。さらに市内の洋裁店の下請けで洋裁部。

だが、深夜ふと目ざめると、私はもう眠れなかった。とんでもないことを始めてしまったのではないか。医者がこういうことに首を突っ込むのは邪

道だ。よし、邪道ではないにしても、失敗の危険性は大きい。その場合、入所してくる身障者に責任をもつことができるのか。協力してくれたメンバーには何といいわけができるのか。何よりも、新しい施設を目ざして失敗したら、今後の道を閉ざすことになるのだ。

いまならまだやめることができる、と考えた。伝え聞いた両親も先輩たちも、絶対反対の強硬意見だったから、やめることは楽だった。また、やめるチャンスは、このときしかなかった。

だが、私は天邪鬼あまのじやくである。負けそうな勝負には挑戦したくなる。やめろといわれれば、どんなことをしてもやりたくなる。子どものときから、だれもできないと思うようなことをやって、みんなが驚くのをみて充実感を感じるような、悪い癖をもっていた。どう迷っても、結局はその性癖に引きずられることになるのだと、納得するほかなかった。

牟田氏のほうの書類作りは着々と進んでいたし、県庁にも書類は提出していたから、もはや退却はできなかった。

毎日が、目のまわるような日だった。そして、とうとう私は倒れた。肝炎がかなり進んでいたのだ。体力に自信はあったつもりだが、気がつくときベッドの上だった。

「絶対安静です。面会謝絶になっています」と、まじめくさった顔で看護婦が私に宣言した。

名称は、太陽の家

絶対安静といわれても動かなければならない。面会謝絶といわれても人に会わなければならぬ。

「困ります」

と、担当の医師がいえば、

「おれだって医者だよ。自分のからだのことはわかる」

と、突っぱねて出歩いた。

別府リハビリテーション・センターの設立発起人会は、九月十一日ときめていた。

元国立別府病院長の高安慎一氏、国立別府病院の山本清人院長、別府整肢園の羽田野次郎理事長、参議院議員の黒木利克氏、県厚生部長の伊勢久信氏、水上勉氏などに発起人になっていただくことになっていた。

「みなさん、ひとつお願いします、どうせやることはきまっていますから、これは形式ですからハンコつけてください、ちゅうて、寝とってすむものか。そういうわけにはいかんじゃろうが」

「日取りをのばしたらどうです」

「一日も早く開所する。これは自分できめた至上命令じゃから、絶対にのばせん」

発起人会は、やることの確認手段にすぎない。問題は、それをどう充実させるかである。そして、それはやはり、いいだしっぺの私の仕事である。

発起人会の三日後、私は東京へ飛んだ。

「一週間は寝てもらいたい」

「そうはしておれん」

押し問答も面倒になって、牟田氏に鞆を持ってもらって病院をとび出した。

黒木議員の紹介状をもって、橋本登美三郎官房長官を訪ね、厚生省、通産省とまわると、さすがにぐったりした。水上さんの家に泊って、翌朝、トイレで私はまた倒れた。

どんどんと叩く音で気づいて、ふらふらと出ると、救急車を呼ぼうなどと騒いでいる。

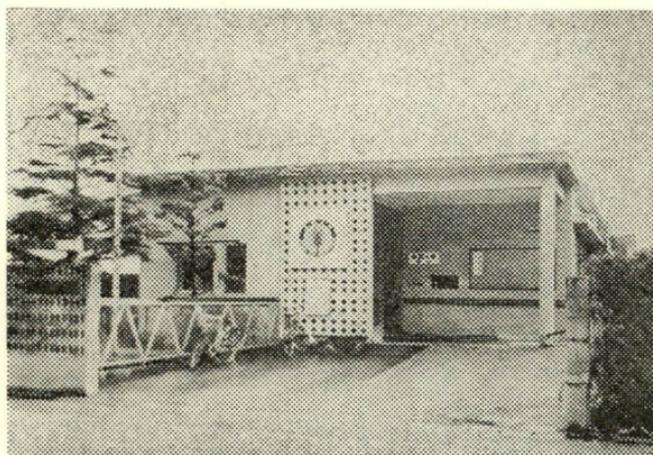
「何でもありませんよ。メシを食って出かけましょう」

「それはダメだ。一時間も倒れていたんだから、少し休みなさい」

「いや、注射をすればよくなります」

用意の注射をすると、いくらか気分がよくなった。

「それじゃ、水上さん一緒をお願いします。きょう行くことは連絡済みだから、行かないわけにはいかんです」



太陽の家 設立当時の正面玄関

そして、日本自転車振興会、朝日新聞厚生文化事業団、NHK厚生文化事業団、あゆみの箱、日本タッパルーウェアなどを歩いた。どこでも名前と顔を知られているのは水上さんである。水上さんが私を紹介する。パラリンピックなどで協力を依頼して歩いたところも、「どうしてまたやってきたのか」という顔である。だが、水上さんと私

の話でようやく納得する。水上さんの存在は実にありがたいものだった。とにかく好意的に話を聞いてくれた上に、積極的に協力しようということばが出された。海のものとも山のものともわからない計画に、ほとんど疑問を投げられなかったのは、やはり水上さんの社会的地位のためだったろうと思う。しかも、水上さんは、あゆみの箱の発起人であり、福祉に関しては、時の人でもあった。

そして、朝日新聞が私たちの計画を大きく報道してくれた。厚生省の考えとして「国庫補助も考えている」という記事だった。

「大成功ですよ。工場というイメージを打ち出して、厚生省が協力の態度をみせるなんて到底考えられない

ことでした。上京した甲斐がありました」

「あなたの情熱が通じたんですな。ほんとうなら祝杯をあげたいところだが……」

私たちはお茶を飲みながらよろこびあった。からだのことは別として、酒を飲みたいような気分だったが、私は酒を飲めない。

「だが、リハビリテーション・センターというのは舌を噛みそうですな」と、水上さんがいった。

「何かいい名称を考えてください。おまかせします」

「もっとわかりやすい、親しめる感じのものにしたいですね」

私は別府に帰ってすぐ、小野田セメント保養所の敷地（一八〇〇坪）、建物（ブロック平屋九〇坪）を買い取り前提で使用する契約を結んだ。居住者が数人いたが、国立病院の病室に移ってもらい、早速内部の改造に取りかかった。廊下、浴室、トイレなどに手すりを取付けるなど、障害者を受け入れるための最低限の改造である。

追いかけるように水上さんから手紙がきた。

「——名称は、太陽の家、としたい」

なぜ社会福祉法人か

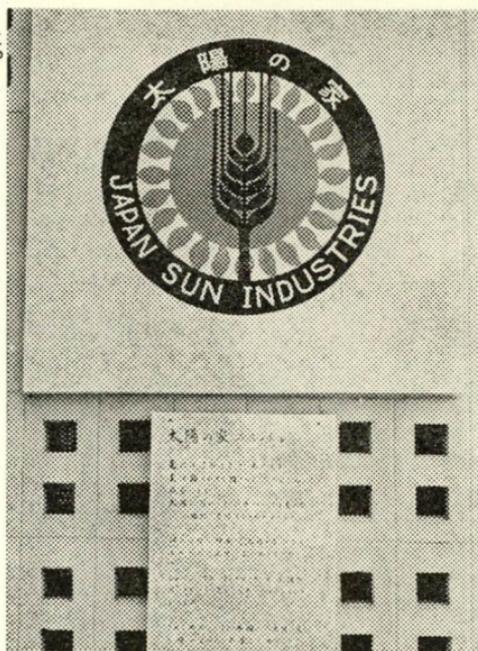
すばらしい名をつけてもらって、太陽の家はすでに現実にあるかのように、私には思えた。生命の源ともいふべき太陽の明るさと強さこそ、身障者に必要なものである。また、その家であることは、わが家にさえ身を置く場所を持たない多くの身障者にとって、最も必要な条件であるにちがいない。もちろん、家と名乗るからといって、過保護を目ざすものではない。強い意志と適応力を身につけて社会へ飛び出すための家である。

新聞に計画が紹介されて、入所希望の手紙が一〇〇通を超えた。だが、一度に一〇〇人を迎えるような態勢はとれそうもない。申し込みがふえればふえるほど、断わる数も多くなるのは、不本意だが、しかたなかった。

一方では、煩雑な事務処理があり、牟田氏は書類作りと県庁通いに追いまくられ、睡眠時間は三時間という日が続いた。すべてが苦しい。整肢園の付帯事業という形をとっているが、一円の出費もゆるがせにできない。

私はトラックを借り、ハンドルを握って走りまわった。

「机でも食器でも、古くていいから使えるものを。こんどは善意工場でなく、太陽の家です」
だが、その間にも事業部門の協力者は作業用具や材料を運び込み、開所の準備は進んだ。入所



太陽の家のシンボルマーク 踏まれても踏まれても成長する麦を太陽に添えた

者の選考も終り、第一回として一五名を決定した。いよいよ開所のための二回目の発起人会。

ここで、名称を「太陽の家」とすること。そして、「社会福祉法人」とすること。十月五日に開所することを決定した。

財団法人ではなく、社会福祉法人にすることは、厚生省その他をまわって示唆されたことでもあつ

た。

その利点は――

- ① 身障福祉法一八条一項の「収容授産施設の設置経営」ができる。つまり、事務費など措置費を受けることができる。
- ② 国庫補助が受けられる。
- ③ 社会福祉事業振興資金の借入れができる。
- ④ 財産移転登記のさい、登録税が免税になる。

などである。

私は、別府善意工場^〆の趣意書に「身障者を職業を通じて社会復帰させる社会福祉事業である」と書いた。また、四十年九月十九日付朝日新聞には、「工場を建て、自活」と紹介され、私の談話として「経営は独立採算とし、収益は能率に応じて配分する」と書かれている。つまり、従来の（身障福祉法による）収容授産施設とは違うもの、株式会社の施設を目ざすということをしてきた。

それが、ここで少なくとも表面上は一八〇度轉換したわけである。もちろん従来あるような施設をつくるつもりはない。公的な補助を受けるための便宜的方法という考えだが、建前から一歩後退したことはいぬめない。きわめて残念だったが、一人でも多くの入所者を迎えるためにはやむをえない、と自分を納得させるほかなかった。

現実には、経済的裏づけがなければ施設の運営はできない。理想論をふりかざすだけでは、何のための施設かわからなくなってしまう。迷惑するのは入所者である。

ともかく形を整え、内容を充実させ、一日も早く本来のあるべき姿へ脱皮することである。公的補助はあくまでも基礎づくりのためのものでなければならぬ。基礎が固まれば返上する。あるいは、訓練期間だけ措置費でまかない、その後は個別に雇用関係を結び、自活する、工場^〆としての付帯的公益事業部門を運営する。そのための、社会福祉法人^〆であると、あらためて自分に念を押した。

太陽の家定款第一条（目的）

この社会福祉法人は、身体障害者であつて著しく機能の低下をきたし社会復帰の困難なもので、援護・育成または更生の処置を要するものなどに対し、その独立心をそこなうことな
く職業的能力を充実し、正常有能な社会人として生活することができるよう援護することを
目的として、つぎの社会福祉事業をおこなう。

1 第一種社会福祉事業

(1) 身体障害者収容授産施設「太陽の家」の設置経営

2 第二種社会福祉事業

(1) 宿泊所・憩の家の設置経営

(2) 生活相談事業の経営

3 この社会福祉法人は、前項のほか次の事業をおこなう

(1) 付帯的公益事業、善意工場の設置経営

この定款^{ていかん}第一条の三項に、私は本来の目的を織り込んだ。もちろん、ここでいう善意工場は、すでに失敗した廃品更生の仕事をもた繰り返そうというのではない。一般企業レベルで生産活動を
を行なう工場の意味だが、抵抗感をやわらげるために、オブラートで包んだつもりである。これ

は何だと、お役人に聞かれた場合、イギリスの保護工場のようなものを将来やりたいという希望です、と逃げるための抽象的表現だった。

また、太陽の家が社会福祉法人なら、社会福祉法人・別府整肢園に属することはおかしいというところで、認可がおりしだい分離することもきまった。

全員が、乗りかかった舟という気持ちだったろう。水上さんは、あゆみの箱の理事を辞めることになった。

「募金の仕事と、実際に施設を運営する仕事と両方やっていたは誤解を招く」ということだった。

マークは「太陽を浴びて、踏まれても伸び続ける麦」のイメージで、県立芸術短大の大蔵善雄教授にデザインを依頼した。理事長は、恩師である高安慎一先生にお願いした。

そして、私は、太陽の家の基本的理念としてのモットーを書いた額を、入口の壁にかかげた。世に身心障害者はあっても、仕事に障害者はあり得ない。

太陽の家に働くものは被護者ではなく労働者であり、後援者は投資者である。

また、正面ポーチのマークの下に、つぎのことを書いた板を打ちつけた。

麦にはきびしきがあります。

麦は踏まれても踏まれても、ぐんぐん成長します。

太陽に向かって伸びつづける麦の形には団結を意味するものがあります。

以上の様な理由で、太陽の家[〃]のシンボルとして太陽に麦を添えました。

ジャパン・サン・インダストリーズは諸外国の方々との交りの為につけたものであります。

これを機会として全国に、太陽の家[〃]の種がまかれ、発展してゆくことを祈ります。

見渡せば、ここは別府市内とはいえ、蓮田のなかを雨が降れば泥んこになる細い道に沿った小さな敷地である。ジャパン・サン・インダストリーズ[〃]とは、何と誇大な名ではないかという見方もされるだろう。だが、これは最初の柱の一本である。

開所式を明日にひかえて戦争のような状態の小さな建物、そして名ばかり大きい看板。外へ出て夜空を仰ぐと、満天の星。国立病院の灯のほかは人家もまばらな静寂のなかで、秋の虫が鳴いている。

「明日が大変ですよ、もう帰られたら」

みんなが私の体を心配してくれたが、どうせ帰っても眠られない。真暗な蓮田を見つめていると、インダストリーズ[〃]の巨大な本部がおぼろにでも見えてくるのではないかと思ったが、何一つ見えるものもなかった。

第三章——模索する一年

理想と現実のはざま

開所式は無事に終わった。

県知事がテープを切り、一五人の入所者がそれぞれの作業を始めた。聾学校のプラスバンドも雰囲気盛り上げてくれた。とくに、水上さんの話は感動的だった。たくさんのお客が来てくれた。新聞・テレビなど報道関係者も予想以上に多かった。

だが、「おめでとう」と挨拶されても、よろこんでばかりはいられない。

まず、お祝儀はもらったが、開所式の費用で足が出る。募金箱を置いてみたが、その集計もしてみなければならぬ。入所者の給食をどうするか。食事の材料を買いにいかなければならぬ。

い。事務担当の牟田氏は法人の手続きその他で追いまくられている。電話が鳴る。お客の接待がある。借り集めてきた小道具類を返さなければならぬ。だからといって、報道関係者に、

「強引に始めたことで、メチャクチャですわ」というわけにもいかない。

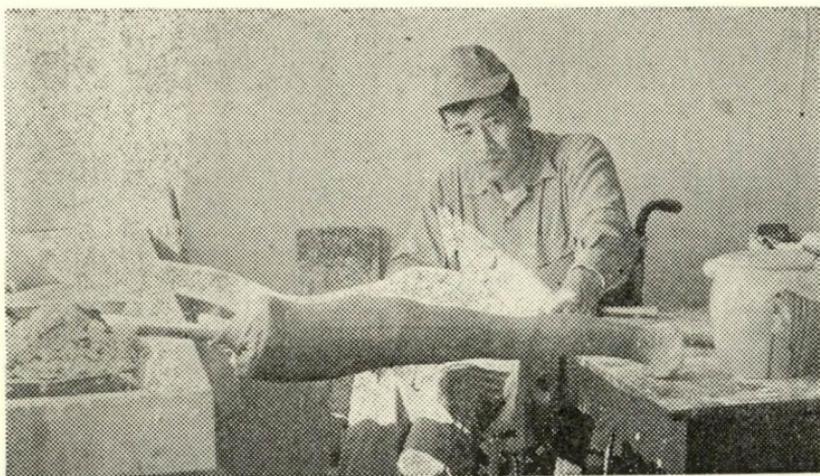
「運営資金ありません。計理担当者もいません。さしあたっての確実な予算も立てられませんが、したがって賃金体系もありません。ラジオもないくらいですから、入所者の教養・娯楽設備もゼロ」と、ないないづくしを自慢するわけにもいかない。

ここはぐっとこらえて、大きく将来あるべき姿を打ち上げるほかない。

「四十一年度中には、隣りの国有地を払い下げてもらい、施設を拡充します。寮、作業場のほかに機能強化センター、自動車練習場、身障者宿泊施設も新しくつくります。完成すると、入所者は約一三〇人にふえます。総建設資金は約一億二〇〇万円。これは、国と県の補助金、競輪収益金の配分、社会福祉事業振興会からの融資などで調達することにしています。ここでは、社会復帰への職業訓練をする残存機能強化部門と、一般企業なみに独立採算性をとる生産部門と、二本の柱をつくるので、施設もそれに応じたものになります。きょうは、それらの一部がスタートしたと考えてください」

報道機関はそろって好意的だった。水上勉さんが関係している施設だからということもあったろうか。

「これではたして自活できると考えているのか」というような質問をされずにすんで、私はほっ



設立当初の義肢科

とした。

絶対に自活できる施設にする、という気持ちは溢れるほどある。だが、気持ちだけでは説得できない。一日も早く形を整えなければならなかった。

新聞は、

「日本では類のない身障者のための本格的リハビリテーション施設」と報道してくれたが、それは将来像としてであって、現実は来客用スリッパさえあちこちからかき集めてきたものだった。

国立病院の養豚場の臭気が流れ、秋というのに蚊や蠅が容赦なく侵入する。雨が降ると雨洩りもひどい。三坪ほどの食堂は、木のテーブルが一つ。四、五人で身動きがとれなくなるし、それ以上の食器もそろっていない。入所者は雨上がりの河口でウナギを釣り、頭数に切り分けて、ホームメイドの蒲焼で栄養をつけていた。

作業の各部門も、工場にはほど遠い。

国庫補助金の協議書を提出し、施設のマスタープランづくりをすすめ、寄付金募集の方法を考え、社会福祉法人の認可申請と社会福祉事業振興会や年金福祉事業団に対して資金借入れ申請の手続き。そして、隣接国有地の購入手続き……。やるべきことは山ほどあった。なかでも最も大事な手続き、法人認可は太陽の家の定款とも関連して難航した。

「付帯的公益事業、善意工場の設置運営」の項が、お役人の法律的解释からはどうしてもはみ出すところだった。

「収容授産施設なら認可できるが、わけのわからない善意工場というのが理解できない。善意工場の部分を削除したらどうか」

「いや、それはできない。これを削除したら太陽の家をつくる意味がなくなる」

「それなら社会福祉法人でなしにやったらいいだろう。株式会社でも何でもいいではないか」

厚生省の担当課との間に激しいやりとりが続いた。とうとう私が行くと、みんなが横を向く。新聞にも、身障者の工場をつくると発表しているのだから、どうぞおやりなさい、われわれには関係のないことです、という態度とみえた。私自身が国家公務員だったから、あえて法律をまげてまで無理を通すという気持ちはない。だが、法律は国民の幸福のためにこそ生かされるべきだし、それを上手に運用することが公務員の仕事ではないのか。より新しい試みを発展させることに力を貸すべきではないのか――。

私には、お役人が意識的に意地悪をしているようにも思えた。

法人認可の申請をする前に、それを前提としての補助金の約束をもらって歩いたことなどが、逆作用をおよぼしているとも考えられた。しかし、そうした点では私は若かった。

「役人が邪魔しよる」

と、憤慨する私に、水上さんは、

「役所には役所のルールがあるんでしょう。ここはともかく法人になるということを第一に考えましょう。あとのことは力がつけば何とでもなるでしょう」

と、いさめてくれた。

実際、喧嘩をしている場合ではなかった。とにかく「授産施設の運営を主体にする」として認可されるのが先決だった。しかし、屈服しながら、私は、
「かならず善意工場をつくってみせる」と固く心に誓った。

陳情また陳情

最初の年はどうにか越すことができた。事務用品・食料品などの掛け買いもどうやら清算できた。入所者の全員が昼休みの一時間をきりつめてまで仕事に打ち込んでくれたおかげだった。また、あちこちから思いがけぬ寄付金が集まったおかげだった。

忘年会の夜、火のない部屋でもみんなの顔は明るかった。私はひどい音痴だが、歌わずにはいられなかった。牟田氏、畑田医師、河野訓練士もひどくはしゃいだ。

「これがモデルだといわれるほどにしてやるぞ」

「日本にはない身障者の工場になるまでは、絶対に手を引くわけにはいかんじゃろうの」

「いやがられようが、バカにされようが、やらんわけにはいかんでのう」

「いっそんなこと、キッチ ヨムさんち無茶もやろうかい」

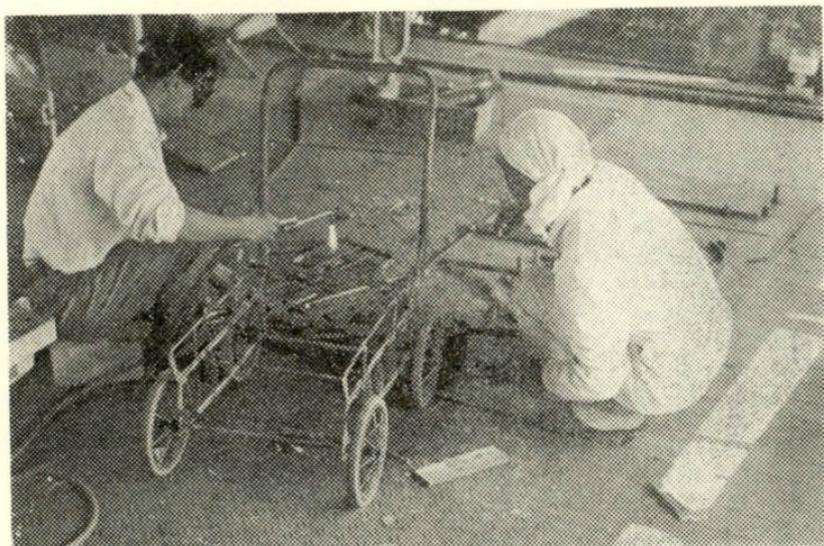
キッチ ヨムさんとは大分の民話の主人公だが、「いったいバカか利口か」わからないという常識的尺度からはずれた奇人である。無茶もすればヘマもする。思いもよらぬ方法でうまく儲けることもあるが、とぼけた調子が憎めない。そんなふうにやっついこうじゃないかというわけだ。私は小さいころから両親や親戚のものの顔をしかめさせることが多かった。

「こりやまた何ちゆうこっじやろか。こん子はようけ無茶しちよるきい、もてんわい。大きゅうなって悪うならねばいいがのう」

と、いわれつけて育った。だから、無茶を通すことはいわば習い性というもの。キッチ ヨムさん大歓迎である。

「太陽の家はみんなできつくらにゃいけん思います。ぼくらも頑張ります」

入所者のみんなも心強いことをいってくれた。実際、彼らは頑張っていた。恵まれない条件のなかで精一杯やっていた。朝は六時前に起きて清掃し、時間前に作業に取りかかる。介護人が一



金工科 古い乳母車を利用して和室用の車椅子を作った

人もいない太陽の家で、日常の洗濯から作業のあと片付けまで、だれの手も借りずにきびきびとやっている。それは、少し前まで看護婦や家族のものに甘えていた姿ではなかった。

たしかに、みんなが燃えていた。徒手空拳で自分たちの工場をつくろうという情熱が、みんなの心をふくらませていた。何もないからこそ充実していた。

もし、立派な施設をつくってから発足したらどうだったろうか、と私は考えた。こうしたよろこびはなかったかもしれない。そう思うと、この短かい時間はひどく貴重なものであった。年が明けてまもなく、法人認可の見通しが立った。それとともに補助金や借入れ金のメドもはっきりした。水上さんは連絡その他の活動のための東京事務所を開いてくれた。私たちは第一期建設工事の入札等、具体的活動に入った。

また、日本自転車振興会の競輪収益金交付の申請、指定寄付金の認可申請手続きもすすめた。

自転車振興会の競輪収益金というのは、いうまでもなくギャンブルの上がり金である。私は競輪場へは一度も行ったことがないから、その配分を受けようとするのは多少気がとがめないでもないが、金が出るところとしては一番の大手である。パラリンピックのときは国の事業という名分であったから、陳情も楽だったが、こんどは違う。

「また、どうしても行ってもらわないといけません」

と、多忙な水上さんを陳情に引つ張りだすことが、しばらく続いた。

大蔵省に対する指定寄付金の認可申請も、やはり陳情である。指定でない場合、寄付をしてくれる人に税金がかかるということは納得しにくいことだったが、税法がそうなっていた。寄付金が大口であればあるほど、税金も大きい。となると、善意で寄付をしてくれる人に迷惑をかけることになるし、必然的に大口寄付金が期待できにくい。

「政治献金は無税で、社会福祉事業への寄付金が所得控除の対象にならないのはおかしいではないか」

という私たちの主張は間違っているとは思えなかったが、その答えが、

「指定寄付金に認定されればいいではないか」だった。

その認可が、やはり容易なものではない。

作家と医師、芸術家と国家公務員、感覚派と計算派、ウェットとドライ、謙虚さと強引さ、枯

淡の禪僧と生ぐさ荒法師……背の高さが違うように、水上さんと私は対照的だ。二人が連れ立って陳情に歩けば、見る人によっては奇妙な弥次喜多と見えたかもしれない。だが、そのアンパランスの妙がかえって効果的だったとも思える。

もちろん、私も無我夢中である。病院の手術の合い間を縫って上京する。執筆中の水上さんを連れ出す。トンボ返りで別府へ帰る。そういうことだから、水上さんにとっては大変な迷惑だった。

「中村台風がまたやってくる」と、おそれていた様子であった。

「台風はオーバーでしょう。せめて、つむじ風ぐらいにしておいてください」

と、私はいったが、たしかに陳情に歩くということは、繊細な神経を逆なでするようなものである。陳情なれしないものにとっては苦行である。だが、それに耐える風情が、また一種格別な味をかもし出していたかもしれない。

数回か数十回かの書類の書き直し、陳情の繰り返しの末に、それらの認可申請も一段落する。いよいよ、社会福祉法人・太陽の家が誕生する。

昭和四十一年一月二十五日 社会福祉事業振興会より二〇〇〇万円の借入れ決定

二月三日 補助金（国から二〇〇〇万円、県から一〇〇〇万円）交付決定

二月十四日 社会福祉法人の認可

法人認可とともに別府整肢園と正式に分離し、小野田セメントへ土地建物の代金（二五〇〇万円）を支払い、名実ともに独立した。

別府善意工場を計画してから九ヵ月、別府リハビリテーション・センターの設立発起人会から五ヵ月、太陽の家を開所して四ヵ月であった。

草の根の投資者

“No charity, but a chance!”

チャリティということばは太陽の家にふさわしくない。単なるお恵みはお断りする。だが、現実にお金は必要である。そこで、but a chance（働く機会を与えてほしい）。そのためのお金が、さしあたり五〇〇〇万円必要だった。

東京事務所ができてまもなく、私は東京の理解者、協力者の方たちに募金方法についてのアドバイスをお願いした。

水上勉さんのほかに、あゆみの箱から秋山ちえ子さんと伴淳三郎氏、日赤青少年課長の橋本祐子さん、日本タッパウェア社長のJ・W・ダート氏が集まってくれた。

橋本さんは日赤の語学奉仕団の責任者として、パラリンピックのさい活躍され、善意工場、計画の廃品回収にも協力してもらった。若い人をまとめる点でもすばらしく魅力的な人である。

ダート氏はポリオの障害で車椅子に乗っているだけに、障害者問題に理解があった。太陽の家が発足して、いの一番の大口寄付（八〇〇万円）と、車椅子発注の約束もしてくれていた。

秋山さんと伴氏は、あゆみの箱運動の中心者である。恒例のチャリティ・ショーでは日本武道館を満員にしていた。

募金は、できれば避けるべきであることは、いうまでもない。だが、国の補助金はあまりにも少ない。社会福祉事業振興会や年金福祉事業団からの金は、当然、利息をつけて返さなければならぬ。食うため（運営費）ではなく、働くため（建設費）に五〇〇〇万円は必要だった。ただ、何が何でもお金が集まればよいとは、私も考えていなかった。太陽の家の方針を理解し、援助しようという。投資者がほしかった。募金を通じて、広く身障問題が社会に定着し、同時に太陽の家の建設がそれによって進むという形が望ましいと思われた。たとえば、オーナー・ドライバーに協力的ステッカーを買ってもらうような方法は、交通事故の激増時代に適合するのではないかということである。

だが、募金のための組織をつくれれば経費もかかる。

「あゆみの箱と一緒にやればいい」

と、伴氏はいったが、水上さんは、

「太陽の家は募金団体になってはいけない」

と、潔癖な姿勢をくずさなかった。

「苦しくともコツコツ積み上げていきたいですね。身障者が懸命に頑張っている。その姿に接して、心から援助したいという気持ちになるとき、寄付という行為が生まれるのでね。その志をありがたく頂く。こちらから請求するような形はとりたくないですね」

「しかし、それではお金は集まらんです」

「集まらないかもしれないが、集まるかもしれないですよ。集まらないとしても、いいことをしているのだから寄付をもらって当然だというような受け取り方をされることだけは避けるべきでしょう」

「善意の寄付に対してはそうでしょう。しかし、一步すすめて、税金を食っていたものが税金を払うようになるための投資と考えれば、募金行為は堂々で行なっていくと思います」

「そういう考え方が正しいことはわかる。だが、一般にはなかなか通用しないんじゃないでしょうか。その考え方が社会に定着するまでには、まだ時間がかかりますよ」

私は建設資金が欲しい。水上さんは、お金のために太陽の家の姿勢が誤解されるようなことがあってはならないと心配する。結局、募金組織をつくることは見送りとなり、希望者だけに募金箱を配布して、協力してもらう形に落ち着いた。

私が考えるような募金方法は、たしかに日本では社会的慣習になっていない。これを社会に浸

透させるには、相当の時間とエネルギーを費やす覚悟が必要だった。目的は募金ではなく、太陽の家の建設である。

すでに、私たちの運動に共感する人たちからかなりの寄付金が集まりつつあった。

料亭・般若苑はんやえんの経営者、畔上はながしてるみさんは三〇〇万円と東京事務所の運営費として毎月の援助を申し込んでこられた。匿名のご老人が一〇〇万円を。「還暦祝いの費用と思っていましたが……」と三〇万円を送ってこられたご夫婦。「孫の誕生祝いのかわりに……」というおじいさん、「交通事故で亡くなった娘の香典かうでんです」というご両親。あるペン習字・書道の機関誌は、全国の会員に呼びかけて一〇〇万円を。「給料ごとに一〇〇〇円ずつ送らせてもらいます」と川崎や千葉のOL。町内会、職場、学校で集められたお金も送られてきた。東京・神田の古本屋さんは百科事典類と段ボール数箱のインスタントラーメンを送ってくれた。

一円のお金もありがたい。だが、なかには気持ちだけで十分という場合もある。

「恥ずかしいことですが、生活が楽でないのでほんの少ししか送れません」というような手紙に添えられたお金を受け取るときは、感謝より申し訳なさのほうが先に立つ。国の施策の不備に腹が立つ。そして、お金を送ってくれる大部分の人がつましい生活をしている人たちであることに、あらためて人間性というものについて考えさせられる。

静岡県伊東市の老婦人からは、「もはや社会の役に立たない体です。せめて社会への恩返しと思ひ……」と、三五〇万円送られてきた。入院しているというので、お礼がてら見舞った私は、

婦人の話に困惑した。

「こんなからだに注射しても何の役に立ちませんよ。年寄りが生きていても楽しいことはありません。一日長生きすれば、それだけお金もかかります。社会の厄介者やっかいです。私はほんとうに安楽死させてほしいと思います。若ければ、体が不自由でも何かしら役立つことができずから、同じお金をかけるならそういう人のために使ったほうがいいと思って送りました。あのお金は、私が自由にしていいお金ですからご心配いりません。孫が大学に入るときのためにと取っておいたのですが、大学なんぞつまりませんよ。行きたけりゃ、健康なんだから働いて行けばいいんです。私は、人生の最後になって、わずかでも社会に恩返しできたような気になれてうれいんです。安心して死ねるように思います」

このお婆さんが、のちに家族の手で精神病院に移され、医療保護扱いで亡くなられたことを聞き、私は暗然とした。

たとえご本人の意志であったにせよ、医療保護を受けることになるような病人から寄付をもらってよいものだろうか。お婆さんは、太陽の家へ寄付したために医療保護を受けるようなことになったのだろう。その間の事情はわからないが、私が訪ねたとき、お婆さんは国立病院の眺めのよい個室にいた。寄付してくれた三五〇万円が全財産だったとは考えにくいですが、家族が精神病院へ移したということは、寄付が大きなトラブルを招いたのではないだろうか。

このような例は稀まれれなものかもしれない。しかし稀まれれにせよ、ひとつの善意がひとつの不幸に

つながる可能性があるということは悲しいことであった。

さまざまな協力者

募金は決して大々的に進められたわけではなかった。だが、太陽の家の建設に協力しようという動きは、いろいろな形であらわれた。

東京に本拠を置き、全国的にも知られているある舞踊団からの協力申込みもその一つだった。

まず舞踊団の事務局長氏が東京事務所に対して、

「太陽の家を建設する趣旨に賛同して、キャンペーンを兼ねたチャリティ公演を全国規模で行ない、純益を太陽の家へ寄付する。当初の運営資金は舞踊団が負担する」

と、申し入れてきた。また、舞踊団を主宰する舞踊家夫妻が、水上勉さんを訪問、

「自分たちができることをぜひやらせてほしい」と、涙ながらに懇願したという。

この種の活動は、成功すれば社会的アピールも大きい反面、下手をするとスキャンダルの種となりかねない。当然、十分な注意が必要だと考えられた。水上さんは東京在任理事としての責任感からも、くどいほどに念を押されたようであった。

「とにかく太陽の家を第一に考えてやっていたかどうかということ。決して無理なことは考えないこと。地道に活動を伸ばすこと。絶対に誤解を招くような運営をしないこと」などを条件に活動するということで、理事会にはかることになったのだが、その段階で舞踊団事務局長氏は早くも活動を始めていた。

「Sデパートに話をつけましたよ。デパートも乗り気で、このさい大々的にやろうということになりました」

と、得意然と語る。その企画とは、

「一億円チャリテイ・バーゲン・セール！ 有名人の色紙をかき集めて、一定額以上の買物をしたお客にくばる。これは当りますよ」

この話を聞いて、私たちは啞然とした。水上さんは、

「太陽の家を商売のダシに使うつもりか」

と、激怒した。もつとも、これは調べてみるとデパート側も、

「そういう方が一度お見えになったことはありませんが……」

と、いうていどで、功名をあせった舞踊団事務局長氏の暴走とわかった。

「太陽の家はお金を欲しい。だが、どんなことをしてもというのではない。チャリテイということとは自活とは相反するものだから、とくにいけない。今後このような企画を考えるようなら、協力はお断わりしたい」

と、水上さんがさとし、舞踊団側は陳謝した。そして、あらためて舞踊公演のプログラムが組まれ、東京都内で三回の公演のあと、順次地方公演をするということと、その準備も進行する。ところが興行は水ものというように、むずかしいものらしい。都内三回の公演によって得た純益は、微々たるものであった。

運営事務費、会場費から仕込み、団員の手当て、ポスター、パンフレット、入場券等の製作費、交通費などを合計すると、なかなか儲かるというところまでいかないようであった。それに、切符売りがたいへんである。このために、東京事務所の職員がかかりきりになる始末である。当然、疑問が生まれてきた。

「当初の運営費は、舞踊団が負担するという約束ではなかったか。こういうことでは、太陽の家が逆に舞踊団の公演を助ける形になる」

と、東京事務所の職員が舞踊団に運営の改善を申し入れた。一方、舞踊団内部でも紛争が起こった。それは主に労働過重になるということ、事務局長氏の独断専行に対する反発のようであった。

結局、この試みは舞踊家夫妻がふたたび涙ながらに水上さんを訪れ、陳謝して、幕となった。事務局長氏は責任をとって団を去ったようだが、聞くところによれば、彼は経営的に沈滞していた団を盛り上げるためにひと芝居打とうとしたらしかった。

そして、水上さんは、

「あの舞踊家が涙を流しながら協力を申し出てきたときは、打たれましたからね。まったく、こういうことはむずかしい」

と、述懐した。しかし、実害がなかったのは、やはり水上山さんのおかげだった。

こうした活動をもとに、国民的啓蒙運動へ発展させたいという願いがあったからこそ、協力申し入れを受けたのだが、こちらが受身であった以上、成功を期待することは甘かったというべきだろう。

ほかに、形の違う協力申し入れがあった。

ある県の福祉団体の役員という名刺をもった人物が東京事務所を訪れ、第二太陽の家^①を建ててはどうかという話を持ち込んできた。静岡県N町の町有林一〇万坪を「太陽の家建設のために」払い下げることが町議会が決議する、それを自分が受けて五万坪を売却し、その利潤で残りの五万坪に施設を建てて寄付するというものだった。

太陽の家は将来、複数になることを考えて英語名を“Japan Sun Industries”としてある。全国各ブロックに太陽の家があることが理想である。とくに静岡県と聞けばノドから手が出る。氣候温暖で温泉がでることは別府と似ていて、身障者の治療訓練に適切ならば、産業地理的には東京・名古屋に近く、別府をはるかにしのぐ。

不動産屋が持ち込んだ話なら乗る気にはなれない。だが、一応はもってもらいたい感じであった。

その団体役員さんは、町議会の議決書の写しを持って別府までやって来た。こうなると、私も欲が出る。先のこととはともかくとして、別府の建設費の助けになるものが欲しい。

「まゆつば眉唾かもね」

「うまい話には気をつけなきゃ……」

と、いいながら、水上さんと私は伊豆半島の中央部、天城山の麓へ車を飛ばした。その団体役員さんは現地で落ち合い、町役場へ案内するということだった。しかし、彼は現地でチラと姿を見せたきり、

「町有林に栗の苗木を植えている町民の集会があるので、そっちへ出てください。私は役場へちょっと連絡に……」

と、いつて消えてしまった。

案内された農家には、一〇人ほどが集まって話をしていたが、町議会の議決などは聞いていないという。まったくお粗末なことであった。

こうした話はいろいろあった。同じ伊豆半島の東海岸の温泉町に建てられたトラックスな病院付きの老人マンションも、施設内に太陽の家を建てたいという申し入れで、はるばる見に行つたものの一つである。しかし、同様に「うまそうな話」は結局みのらなかった。

このような、恥ちをあえてさらすのは、寄付金というものが一般に純粹な善意と理解によるものがいかに少なく、何らかの反対給付を期待するものがいかに多いかを述べたからである。

こうして、私たちは募金の対象を法人にしほることにした。法人、とくに大企業こそ社会に恩返しすべきだし、まとまったものが入る可能性があると考えたのである。

だが、自動車産業など公害関連企業を含めて大企業ほど冷淡だった。当時も「企業イメージをアップさせる」ことはしきりにいわれていたが、私たちはどこへ行ってもまるで相手にしてもらえなかった。経済団体、業種別の上部団体、個々の企業のいずれもが、よくて「聞きおく」という態度だった。

「とてもそれだけの余裕がありません。来年度の寄金計画に組み込めるかどうか検討はしてみますが……」

「お宅に出すと、ほかの施設にも出さなければなりません。そうなると大変なことでしてね……」

というような、すつきりしない返事を聞きながら、私たちは低くつぶやいたものだった。

「政治献金なら際限なく出すくせに……。どこかの施設に一度でも出したことがあるのだろうか……。それでもしつこく通いつめてやろう……」

そして、ある弱電メーカーから家庭用中波ラジオを一台、ある自動車メーカーからはテスト車として五万キロも走りこんだ小型乗用車を一台もらった。

日本のアピリティーズを

三月、私はニューヨーク郊外のロングアイランドにあるアピリティーズ社を訪問した。

世界で最も代表的な身障者企業を實際にこの目で見て、太陽の家の具体的設計の参考にしようと思つたのである。

アピリティーズ(能力)社は、一九五二年にヘンリー・ビスカーディ氏ら四人の仲間で設立された。ビスカーディ氏は足のかわりに二本の短い切り株のようなものをつけたまま生まれ、成人しても身長は一メートル弱。仲間四人の手足は合計して、足が一本、腕が五本だった。彼らは三〇〇万円弱の借金で、まず空きガレージを借りて仕事を始める。それが一〇年ほどで従業員(全員身障者)四八〇名、年商一〇億円以上の企業に成長していた。

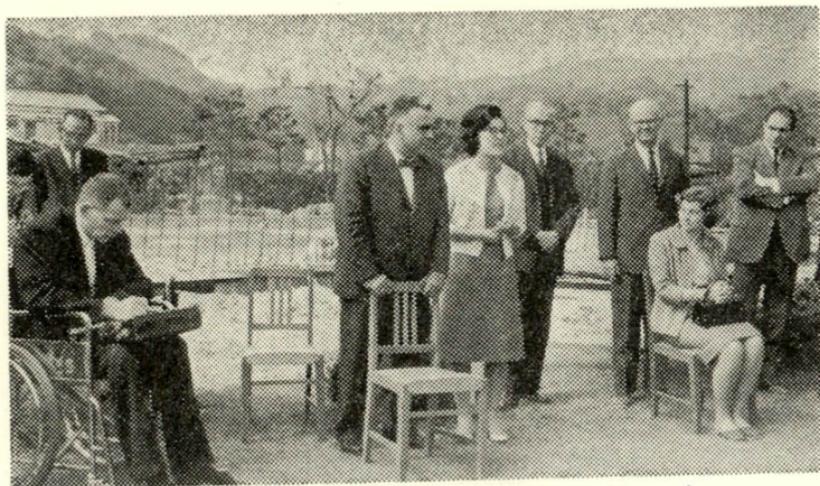
その間、創業二年目で、自分たちが生んだ利益を身障者に投資するための財団をつくる。このヒューマンリソース(人的資源)財団はアピリティーズ社の収益によって、身障者の教育・訓練事業をしていた。連邦政府は、これに対して「非営利法人」として免税の特典を与えた。民間企業でありながら、公益事業的性格をもつという、アメリカでも最初のケースである。

アピリティーズ社については、すでにいろいろ紹介されているので、くわしくは述べない。ただ、当時の規模を知るために、私が帰国直後に書いたレポートの要点を、つぎに再録しておく。

——財団は、アピリティーズ社、人的機能開発センター、肢体不自由児施設の三部門からなっている。アピリティーズ社は四万平方フィートの平屋建の工場で、主に電気器具の製作を行なっている。従業員は神経系疾患一一〇人、四肢軀幹の変形一二人、循環系疾患五三人、感染性疾患二〇人、視聴覚言語障害四〇人など、かなり重度の者がその身体条件にあうようにセットされた職場で働いている。工場内はすべての点で障害者のために設計上の配慮がされ、機能訓練室やプール、どんな障害者でも使用できるボウリング場、ピンポン場、撞球台、バスケットボール場まで完備している。給料は平均一時間二ドル。まったくの能率給である。仕事が終われば、プールで泳ぐもの、機能訓練をするもの、ゲームを楽しむものなどさまざまで、その後、特殊運転装置の車で帰宅する。宿舎はなく、それぞれ各家庭からの通勤である。欠勤率は百労働日で一・一日。米国の一般平均のちょうど三分の一で、労働意欲が高いことがわかる。操短もやり、働く気のないものは減にする。ドライな工場である。

八年間の実績は、生産額三七億円、支払給与二〇億円、所得税三億六〇〇万円、保険・研究・広報費が一四億四〇〇万円。これを社会に返した額としてみると、予想される失業手当（一〇億八〇〇万円）をふくめて、八五億八〇〇万円となる。

人的機能開発センターは、ありとあらゆる種類の仕事に不適切な身障者を職業教育し、機械を改良することで能率を改善し、安全管理するためのセンターである。医師・心理学者・



アビリティーズ社のH. ビスカーディ氏（中央、椅子に手をかけている）

技術者の協力によって行なっている。

肢体不自由児施設は、小学校から高校まで八〇名の児童生徒に普通学校と同じ正規の授業を行なっている。『リハビリテーション医学』第

3巻第3号別冊）

このアビリティーズ社見学は、私にとって大きな刺激であり、勉強になった。

太陽の家はどうしても日本のアビリティーズ社にならなければならぬと思った。おたがいが持つ理念と方向性は同じだから、将来、太陽の家がアビリティーズ社の近くまで達することは不可能ではないと思った。

建物の設計、工場レイアウト、個々の障害ていどと作業能率、作業機器の改造から運営全般まで学ぶことは多かった。このアビリティーズ社にくらべると、産声うぶごゑをあげたばかりの太陽の家は比較にならない。しかし、アビリティーズ社が空きガレージから

一〇年でここまできたのなら、太陽の家も一〇年後にはあるていどの規模に育つことができるだろう。残念ながら太陽の家は、一人で四本の手足を持つ医師が始めた点でアピリティーズ社に劣るのだが、その分だけ私は頑張らなければならないと考えた。

とにかく一日も早く帰って、一日も早くアピリティーズ社に追いつかねばならない。ぎりぎりの時間までアピリティーズ社で過ごした私は、空港に着くなり、飛行機に駆け乗った。離陸してしばらくたって、スチュワードスが私にささやいた。

「お客さま、航空券をお持ちでしょうか」

「買うひまがなかったから着払いだ。心配しないでいいよ。飛びおろしたりはせんから」
まわりの乗客がどっと笑った。

ビスカーディ氏は五月、太陽の家へやって来た。まだまだ見てもらうような施設ではないが、「ぜひ日本へきてアドバイスを」とお願いしたのに対して、忠実に約束を守ってくれたのである。

彼はせまい敷地のなかの小さな建物を歩きまわり、微笑をたたえて入所者をはげまし、「これから二つの工場は兄弟になろう」といつてくれた。

太陽の家には、遠来のお客をもてなす応接室もなかった。

仕事も人も……

生まれて半年、太陽の家はまだ這いかけの赤ん坊のようなものだった。

建設資金がなく、仕事がなく、人もいなかった。未熟児を無理に産んだようなものである。どんな子にも本能的生命力があるから、放っておいても育つものは育つ、という見方も世の中にはあるが、産んだほうは気が気でない。意地でも人一倍元気な子に育てあげたいと必死になる。

さいわい、この子は生まれた時期がよかった。日本経済は急カーブを描いて成長していたし、生まれ落ちるやいなやマスコミが異例ともいえるような取り上げ方をしてくれたために、たちまち名が売れて寄付金も予想以上に集まり、補助金の申請や陳情もやりよかった。GNP一本槍から福祉社会重点へ必然的転換を迫られる、その一歩先を進んだことが、国民の潜在的共感を得ることになったともいえるだろう。

振り返ってみれば、そういうことがいえるかもしれない。だが、渦中にあつては、正直のはなし、先のことなど見通せない。一日一日、なりふりかまわず闘うだけである。

昭和四十一年三月五日 第一期工事（宿舎一九二七平方メートル、作業棟五九〇平方メ

（トール）着工

三月二十九日 お年玉つき年賀はがき指定寄付金配分決定（二五〇万円）
四月一日 年金福祉事業団借入金（二八三〇万円）決定

一人でも多くの身障者を迎えるために、宿舍と作業場を増築しなければならない。そして、より質の高い仕事を与えなければならない。

この質の高いという点では見方が分かれる面があるが、この時点では、より多くの身障者がよりよい生活へ向かうことができるだろう仕事という意味である。そこから導き出されるものは、経済成長の波に乗るものであり、ベルトコンベア・ラインである。アピリティーズ社で見た仕事は、そういうものだった。もはや、時計やラジオの修理、洋裁や手芸・編物といった授産科目では食っていけない時代であった。また、そうした職種では、工場になりえない。

工場をつくるということは、一人の職人のウデを殺しても、多数を生かすということである。太陽の家は多数のための場を目ざす施設であるから、多数のものによってできる仕事を導入する必要があった。

だが、現実の太陽の家は這いかけの赤ん坊である。別府市内の業者による洋裁、竹細工、義肢装具などの仕事はしていたものの、あまり期待できる職種ではない。入所生のあるものを市内の木工所へ派遣していたが、彼らの報酬は昼食に駅弁を一個もらうだけだった。



設立当初の洋裁科 みんな一生懸命働いた だがまだまだこれでは「工場」とは
 いかない

私たちはツテを頼り、あるいはじかに、これ
 と思う会社を回り歩いた。もちろん、ほとん
 どの場合がムダ足だったが、かすかな反応をつ
 かむこともあった。

東洋工業の松田恒次社長、安川電機の安川第
 五郎社長、ソニーの井深大社長、早川電機（シャ
 ープ）の早川徳次社長などは、好意的に話を聞
 いてくれた。

松田社長は、おみやげにと小型自動車三台を
 寄付してくれたが、このクレープはずいぶん役に
 立った。早川電機は本社工場内に約三〇名の身
 障者による一部門を持ち、社長自身が大阪府身
 障者雇用促進審議会長であっただけに、最も協
 力的だった。

しかし、現に太陽の家は事務職員ゼロという
 状態であった。

「趣旨はよくわかりました。結構なお考えで

す。ただ、うちのほうとしては安心して仕事を出せるかどうかということ。別府となれば、原材料・部品・製品の輸送コストのことも考えなければなりません。まず、お宅に信頼できる工場マネージャーがいるのかどうか。期日に責任をもって製品を納入できるなら、考えましょう」といわれては、

「ごもっともです」と引き下がらざるをえない。きびしい企業論理の前には、

「お宅の仕事をやりながら実力をつけ、体制を整えていくつもりです」とは、到底いえない。

太陽の家は、工場を目ざすとはいっても、まだ授産所の看板も出していなかった。受け入れるべき入所者は職業経験どころか、訓練も受けていないものがほとんどである。

重い足を引きずりながら、

「私が経営者なら、やはり断わるだろう」と思い、それでも負けるわけにはいかないと、訪問先を町工場へレベルダウンしたが、町工場にはほかへ発注するだけの仕事の量がない。とくに東京や大阪の中小企業が九州の別府へ仕事を出す必然性は、全くないのであった。

仕事は容易に見つからなかったが、四月、若い事務職員が二人やってきた。丸山一郎君と御手洗恵子君。太陽の家が発足して半年にしてはじめての正規の事務職員である。二人とも大学新卒だが、私とは旧知の間柄だった。

御手洗君は、幼いころ私が股関節脱臼こかんせつだつぷきゆうの手術をした。明治学院大社会福祉学科を出て、生家のある別府へもどってきた。私は彼女にしばらくグッドウィル・インダストリーズへ留学してもら

うつもりで交渉を進めていたが、受入れ体制が完全でなかったこともあって、太陽の家に入ってもらった。

丸山君とはパラリンピックで知り合った。彼は慶応大学工学部の学生だったが、日赤語学奉仕団員としてパラリンピックに協力してくれた。その後、自費でグッドウィルを見学に行ったりもしていたので、別府善意工場設立準備のさいは別府へグッドウィルの説明に来てもらったりもした。健常者であり、活発明朗な好青年。学生時代に世界一周がてら各国の福祉施設も見て歩いたという積極性と視野の広さを持ち合わせていた。

彼が、

「ぜひ先生の下で働かせてください」

と、いつてきたとき、私はうれしかったが、

「すぐ来てくれ」とはいえなかった。世間並みの待遇ができないばかりでない。彼の将来に責任を負えるだけの自信もなかったのだ。

「ご両親は賛成なのか。君は長男だったな」

「両親は反対です。別府へ行くぐらいなら、松本に帰ってきて家の手伝いを手伝え、といています」

「親には心配をかけないことだ。太陽の家はまだ海のものとも山のものともわからん。若い君が犠牲になることはない」

しかし、私のことばは常識的なゼスチュアールのようなものであった。すくなくとも拒絶のことばではなかった。彼を欲しかったからである。そして、彼はやって来た。

夏には大阪から西岡潤君がやって来た。彼女は筋ジストロフィーだが、非常に元気だった。

そして、若くて行動力のある伊方博義君が現場に入って来た。太陽の家は生気づいた。何といつても事務責任者の牟田氏は、設立準備のために長崎コロニーから一時借りてきた人だったし、スタッフの畑田医師、河野訓練士は病院が職場であり、私もそうである。

一期、二期の工事がダブって進み、秋には天皇、皇后両陛下、皇太子ご夫妻を迎えるというときだから、若い連中は椅子に座るひまもなかった。丸山君は鼻血を出してぶっ倒れたこともあった。だが彼らはよく頑張ってくれた。

いま、御手洗君と西岡君は事務局に健在。伊方君は事業課長。丸山君はアメリカ留学後、東京都葛飾福祉工場の責任者である。

やっと一年が過ぎた

六月、四月一日にさかのぼって「身障者収容委託施設」に指定された。つまり、授産所として、入所者の食費・事務費が措置費でまかなわれることになった。そのため、日常的経営の負担

感はぐつと軽くなった。

措置費とは、国民の税金だから、これは決してよろこぶべきことではない。太陽の家は税金を食うものが納税する立場にかかわることを目的に設立されたのだから、措置費をもらうことはまるで逆である。措置費が受けられるように運動しながら、私はその痛みに耐えた。完全な矛盾であった。

早速、県の担当官がやって来た。玄関を入るなり、目をむいて声を荒げた。

「なんだ、あれは。ここは授産施設だ。すぐ取りはずしなさい！」

担当官は、「太陽の家に働くものは被護者ではなく労働者であり……」というモットーの入った額を指さしていた。

だが、額は頑張り続け、私も頑張った。ここで額をおろしては、モットーが死んでしまう。それでは太陽の家の存在意義が失われる。この額は、どんなことがあってもおろしてはならなかった。

「措置費は将来かならず返上する」と、私は心に誓った。

その将来のために、一日も早く力をつけることが大切である。

入所希望者は日に日にふえていた。いまや施設の拡充は急を要する状態だった。規模を大きくすることが、仕事を導入する上でも欠かせない条件だった。

道路を越えた向かい側は国立別府病院が管理する国有地で、ほとんど遊んでいるのに私は目を

つけていた。そして、譲渡契約へこぎつけた。

ただ、この払い下げ価格は、数人の土地鑑定人の評価額のうちで最高価が採られた。会計検査院の検査にひっかかるというのが、その理由だった。土地業者などへ払い下げる場合なら最高価でなければならぬだろう。だが、税金である国庫補助金や善意の寄金で買うにもそうだとはい、割り切れないものである。割り切れないが、土地は欲しかった。

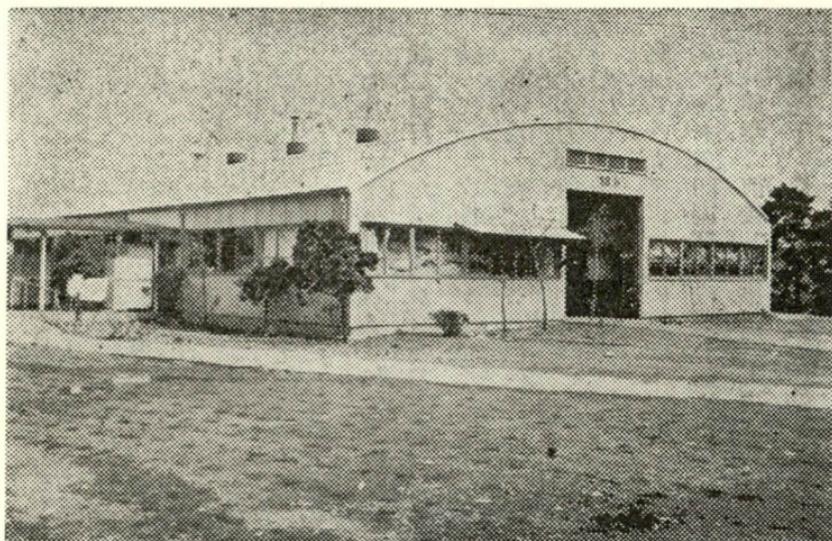
そして、その土地に建てるための資金の手当ては、ふたたび競輪の収益金におぶさることになった。このさい、バクチのテラ銭云々ということはいってはおれないのである。

ただし、こうした補助金は常に必要資金に満たない。二五〇三〇パーセントの自己資金を調達して、はじめて建物が建つのである。この自己資金というのも、「社会福祉法人・身障者収容委託施設」にとってはどこからも出てくるところのないお金である。措置費を流用することはできないし、授産作業で得たものは賃金として支払わなければならない。結局、寄付金に頼らざるを得ない仕組みである。しかも、大口の寄付金に対しては、寄付者に税務署の目が光る。寄付者に迷惑をかけないためには、容易に認可されない「指定寄付金」扱いにしなければならなかった。

しかし、私たちは頑張った。滅茶苦茶ともいえる忙しさだった。

昭和四十一年六月九日 四月一日付で身障者収容委託施設に指定

六月三十日 国有地（七四七五平方メートル）の譲渡契約（一六五〇万円）



第一期工事完成（昭和41年8月31日） カマボコ型の第一工場はちょっとした町工場より立派だった



天皇・皇后両陛下ご来訪（昭和41年10月12日）

七月十一日 第二期工事に対する日本自転車振興会補助金(二五二四万円)

決定

七月二十日 寄付金免税指定認可

八月十五日 第二期工事(作業棟二棟一五五三平方メートル、プール四八

六平方メートル)着工

八月三十一日 第一期工事完成

七月には大分市のパイプ加工業者からパイプ椅子製作の発注を受けた。そして、洋裁部を縫製部に移行した。洋裁が好きで、ミシンを踏むこと、一枚一枚の洋服を仕上げることによるこびを持つていた女性たちが、パイプ椅子の背もたれとシート部分のビニール・レザーを機械的に縫うことになった。そのことは彼女たちを失望させたかもしれない。だが、彼女たちは以前に変わらず熱心に仕事をしてくれた。

そして、金工部は活気づいた。鉄パイプを切断し、折り曲げ、プレスし、溶接し、塗装する。完成したカマボコ型の第一工場は、ちょっとした町工場よりは立派で、活気に溢れていた。エレファックス印刷部も操業を始めた。

一周年に前後して第二期工事、身障者専用の二五メートル温泉プールが完成。秋には天皇、皇后両陛下、皇太子ご夫妻をお迎えした。そのため、ひどい悪路が舗装された。そして、入所者は

一〇〇名を超えた。

昭和四十一年十月十二日 天皇、皇后両陛下ご来訪

十月十八日 第二期工事完成、プール開き

十一月十六日 皇太子、妃殿下ご来訪

昭和四十二年一月二十四日 入所者定員一二四名に増加

一見順調のようであった。が、天皇、皇后両陛下、皇太子ご夫妻をご案内しながらも、私の心は落ち着くことがなかった。

事務をみてくれていた牟田氏が長崎に帰り、事務責任者の椅子は空席になっていたのだ。

「事務局長になってくれる人、所長をやってくれる人は、どこかにいませんか」

と、会う人ごとにたずねていたが、容易に見つかりそうもなかった。

建物ができ、仕事が入っても現場の責任者がいなければどうにもならない。私は、人を探すことが一番むずかしいと思い知り、それでもどうにか一年が過ぎたことに安堵した。

第四章——自分たちの工場

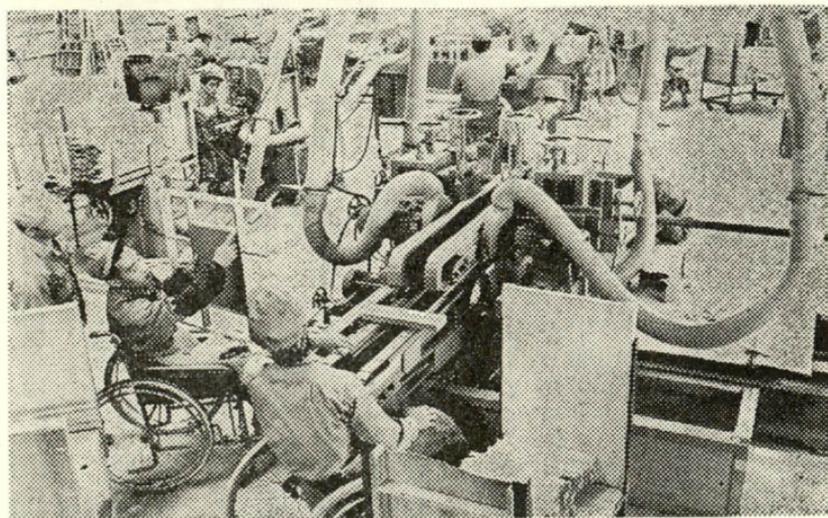
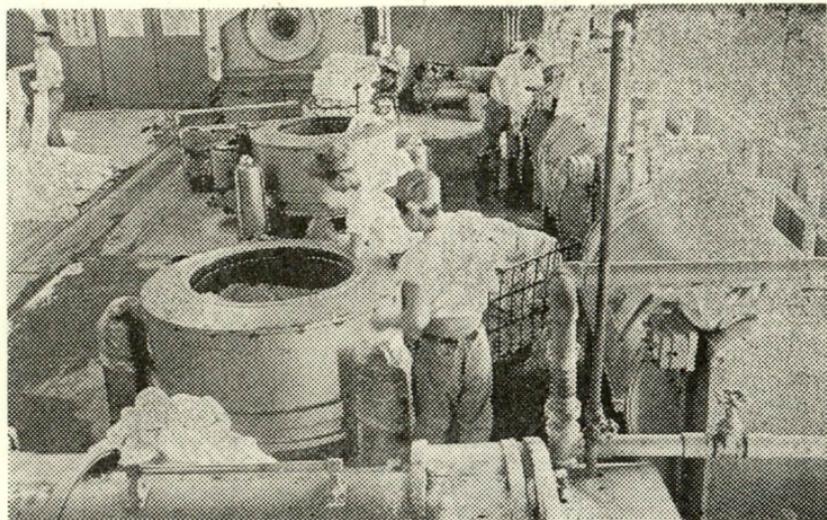
A級製品を市場へ

太陽の家に本格的なモーターの音が響いたのは、二年目の夏である。

第一工場のクリーニング、第二工場のコタツヤグラ部門が同時に始まった。真白いシートがローラーからくり出され、テノナーや高速面取盤から木屑が吹き上げる。

工場開きに駆けつけてくれた水上勉さんや秋山ちえ子さんも、いままでのように入所者に声をかけることができない。太陽の家は、このときから質的に、工場^ノになったのだ。

開所当時、たがいに笑い声をたてながら仕事をしていた彼らは、もはやいない。不自由なからだとはいえ、唇をひきしめ、きびきびと動き回る彼らは、このときから、労働者^ノになったの



第一工場クリーニング（上）第二工場コタツヤグラ（下）が始動 これでやっと本格的な工場らしくなった 親会社はクリーニングが綿久寝具、コタツヤグラが早川電機 しかし、賃金面では決して満足のゆくものではなかった

だ。太陽に麦の穂のマークをつけた帽子をかぶり、作業服に身を固めた彼らは、一様に誇らしげにみえた。働いてお金を得るといふよろこびと緊張感があふれるようだった。

クリーニングは、京都に本社のある綿久寝具。コタツヤグラは大阪に本社のある早川電機の協力工場である。

いうまでもなく、授産施設へ本格的な仕事を持ち込むことはきわめてむずかしい。ほとんどの企業は二の足を踏む。しかも、別府という立地条件は概してマイナスであった。それを私たちは「とにかく一度、彼らの働き具合を見てほしい」と、説得し続けた。

一人でも多くの入所者を迎えるために、施設づくりは進んでいる。だが、肝心の仕事がなければどうなるだろう。私たちは必死だった。

ふたたび肝臓が悪化した私は、入院中の九大病院を脱け出しては、企業まわりをした。足がよろけ、目の前が真暗になり、これはもうあかん、と観念したこともしばしばだったが、さいわい体力と意地があった。太陽の家と心中する、と心をきめると、気は楽になった。休日も返上して働いている入所者たちに対しても、私が倒れては申し訳がなかった。

強引すぎると非難されながらも説得した甲斐があったのだろうか。

「それではとにかく一度現地を見てから」ということばが出てくる。そして、太陽の家に一歩踏み込むと、例外なく認識をあらためて帰った。

入所者のまじめな仕事ぶりと熱気に圧倒され、仕事を出しても大丈夫だという計算が十分に成

り立つのである。

一例として、早川電機導入の場合をみてみよう。

昭和四十一年秋、太陽の家評議員の松本平逸氏（当時、大分マツダ総務部長）が大阪在住の協力者佐藤氏と早川本社を訪問。続いて、私が正式に協力依頼した。前述したように早川徳次社長は非常に理解があった。

十二月、早川社長より基本的協力を約束する文書をもらった。

四十二年一月、具体的交渉が始まった。太陽の家は、工場・機械・作業員を提供。早川は一人一日最低五〇〇円を保証するという条件になる。このとき、太陽の家は機械を買うメドがなかった。

二月、早川電機の電化事業部より製造計画を提示される。一見して非常にきびしいものだったが、受入れる。続いて機械購入準備。

五月、機械搬入と準備完了し、工場開きを行なう。機械代金は未払い。

七月、本格的操業に入る。作業員二六名、日産七〇台。月末、初出荷する。

十二月、作業員三五名、日産一二〇台。

品質は試作の段階で、A2級の折紙をつけられた。生産台数はその後順調に伸び、四十四年には四五名で三二〇台、四十八年には七〇名で八五〇台に達した。

また、機械代金は、四十三年七月に日本自転車振興会より一二〇〇万円の補助をもらって支払

った。木工機械設備費は一六二五万円だった。

材料ラワンが製品となり、梱包を終えるまで一人の健常者の手も借りず、市場に出ていくのである。もちろん、企業からの要求はきびしい。

「もっと賃金アップを」というこちらの考えには、

「まず生産性を上げろ、低能率のものは切れ」という答えが返ってくる。

協力工場という名だが、実際は下請けである。工程の変更、機種の切りかえは企業側からの通告に従うだけであり、そこから予想できない事態に直面する不安感、突発的変更による混乱などが起こりうることは覚悟しなければならぬ。作業内容の変更や、それに伴う配置転換は、重度障害者にとっては大きな問題である。生産性を高めること、より高賃金を得ることは、理論的には決してむずかしいことではない。低能率のものを退所させ、能力のあるものだけで仕事をすればいいのである。だが、それはできない。

太陽の家は企業レベルの工場を目ざしても、企業経営はできない。授産施設だからというのではなく、「仕事に障害者はない」からである。この矛盾を解決するために、私たちは業種を選び、企業と折衝し、作業内容と入所者の適性を検討し、機械設備を改造し、配置転換をくり返し、より理解のある企業を求める努力を続けることになる。

綿久寝具は病院基準寝具の大手で、太陽の家に工場を持つことによって中・南九州の病院へ販路を広げることができた。四十四、五年当時は一日四〇〇〇枚ていどのシート、包布のクリーニ

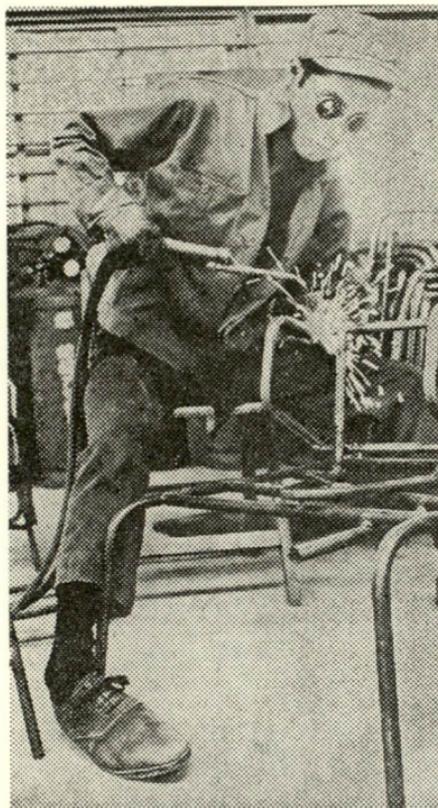
ング作業を行なったが、後に沖縄進出のために閉鎖される。その理由をただすと、

「企業メリットの問題です」

と、一蹴いっしゅうされた。あとで、

「太陽の家に搾取さくしゆされたと歎なげいていた」

というような話も聞いたが、事実として太陽の家が一般企業を搾取したとすれば、神さまはおよろこびになるだろうと私は思った。とかく、弱いものいじめをするのが世の習いであり、身障者は格別に弱者だからである。



金工部パイプ椅子 自主生産・販売を敢行、
活況を呈したが、のちに販売ミスから廃止

スから廃止したが、販売ミ
した。物を作ることは
できて、売ることは
まだ無理だった。私は
傷が大きくなるのを恐
れ、続行の意見をおさ
えて廃止したが、その
ため、この仕事に意欲
を燃やしていた行動力

ある指導員が去り、入所者もかなり動揺したことがあった。当然、私に対する批判はきびしかった。

「でたらめな経営だ」

「医者には無理なことだ」

「実験台にされる身障者がかわいそうだ」

批判はいくらされてもよい。だが、批判する人が新しい仕事を持ってきてくれるわけではないから、おとなしく聞いているわけにはいかない。奔走した結果、ミノルタカメラの部品を作っていた関西エバーブラックを誘致することができた。その誘致条件は、つぎのようなものだった。

〈覚書〉(大略)

- 一、関西エバーは機械備品を太陽の家に無償で設備し、種々の便宜を与える。
- 二、作業人員の人选、男女別等、編成の一切は太陽の家が授産指導の立場でおこなう。
- 三、作業に必要な工具、材料、備品、機械等は、エバーが無償で貸与する。
- 四、作業者の職業的指導はエバーが無償でおこなう。エバーの社員、指導員の食費その他の給与はエバーが支払う。

- 五、太陽の家入所者に対してエバーは、操業開始日より三ヵ月間は平均日給四〇〇円、その後三ヵ月間は平均日給五〇〇円、その後二ヵ月で平均日給六〇〇円を保証し、年平均五、六セント以上の昇給と年二回のボーナス支給を約束する。

六、エバーは、直接作業に必要な電気、水道、授産指導員を含む管理費を太陽の家に毎月寄付する。

七、エバーは将来、太陽の家に利益をもたらすために工具の一部または全部を寄付する。現金の寄付についても努力する。

八、エバーは、太陽の家人所者が授産期限終了とともに社会復帰する場合、その受入れについても努力する。

こうした条件についてもまた批判があつたかもしれない。私たちはただ必死だった。四十四年ごろの生産規模は、入所者一〇名でレンズキャップ日産一五〇〇個、圧板一九〇〇枚であった。

そして、関西エバーと同時に、メジャー・メーカーの京都度器を導入した。スチール巻尺を四名で日産六〇〇〇個というのが、そのころの規模で、本社にもないベルトコンベア・システムが自慢だった。また、電子式エレファックス印刷も始まっていた。

春のきざしが……

——新たな二つの部門が、心ある方々の限りない力によって増設された。そして、新しい

仲間も続々と入所してきた。

まさに活動する太陽である。

太陽の家は単なる施設ではないし、また肉体のハンディの苦痛を逃避させる場所でもない。侵された肉体のハンディとその心を克服し、一個の人間として、一人の社会人としての独立を勝ちとるための、いわば戦いの場所なのである。われわれは働く身障者としてのパイオニアである。

一つの完成した製品が社会のなかで認められるかどうか。それは、われわれ身障者が社会のなかで認められるか否かにつながる重大な問題なのである。ひとり、ひとりが立派な製品をつくりたいものである。それが、多くの仲間に生きる力を与え、また、われわれにこの力を与えてくれた人々に対して報いることなのだ。(太陽の家・木ノ芽会機関誌『むぎ』第2号、菊池忠正)

——産声を上げたばかりの太陽の家に、私は夢と希望を託して入所した。

ிரらい、この太陽の家のあらゆる面において、めまぐるしい変転が重ねられた。入所生が続々とふえてくる。それにもなつて事務職員が増加する。新しい企業を導入し、それにまつわる幾つかの障害を乗り越えたと思うと、他の部門で大きなミスを出す。つぎつぎに事務職員が移動される。また新しい企業が入る。一つの部門が閉鎖になる。入所生と職員の退所が目立つ。そしていままた、新しい企業導入の話がある。

肝心の運営方針が、こうした過渡期から生ずる弊害のためにはっきり示されず、なおかつ実行できる余裕がなかったとも想像されるのである。

しかし、このめまぐるしい歴史のなかにも、この太陽の家の基礎となる外形、設備の建設は、着実かつ敢然として貫かれてきたようである。もう太陽の家の冬は去ったのだ。そしていま訪れんとする季節の春とともに、われわれの未来にも暖かな春のきざしが見えてきたのである。(『むぎ』第4号、沼田展弘)

とかく弱音を吐きそうになる私を支えてくれたのは、苦楽をともにしてきた入所者たちだった。混乱の渦のなかでも彼らはひたむきに仕事に取り組んだ。授産施設・太陽の家に失敗があつてはならないことはいうまでもない。だが、失敗を恐れていては太陽の家は前進しない。私はアピリテイズ社の入口にかかげられたビスカーディ氏のことばを思い出していた。

「——私たちは、計算された危険ならよるこんで飛びこんでいきたい、夢を描き、建設のよろこびにひたれるなら、たとえ成功しても、失敗しても。私たちは、保障されて無為むゐ徒食とじくするくらいなら人生への挑戦をえらぶであらう。姿勢を正し、誇らかに、何物も恐れない。これが私たちの財産なのだ。自分の力で考え、行動し、自分で創造したものによるこびを感じ、勇気をもって世間に向かってこう宣言しよう。これが、私のやったことだ」と

入所者は頑張っていたが、労働の報酬は微々たるものだった。

——給料日である。きのう事務から、私ほどの仕事の能率では福祉からの食費が出ていな

いから赤字だ、とのことを聞いていたので、何となくもらいにいきづらく、食事を先にする。

お膳の上には、早々にもらってきた〇〇さんの給料の明細書がこれ見よとばかり、無造作におかれている。見ると、なんと一万なにがしの支給額が書かれていた。それに幾分勇気づけられたような形で、ああはいわれたけれど、とひそかに胸算用しつもらいにいった。

しかし、持ち帰り、袋の口を開けてみてがっかり。二十五日間満勤で支給額二千七百円、差引支給額マイナス二千二百六十円。多額な赤字である。予期はしていたものの、打撃は大きかった。計算してみると、一日の収入がわずか百八円で、その日の食費にも満たないのだから、赤字は当然のことである。汗水たらして、力の限り働いてもなおかつ赤字。これでは働いている意味がないではないか、と思うと自分の無力が情なく涙がこぼれた。

自分が世の中の芥あぐたのような存在で、生きる価値のない人間のように思われ、悲しかった。やっとの思いでつかんだ生きることのよろこびもむなしく、ふたたび人生の路頭に迷ってしまった。(『むぎ』第2号、匿名)

これは極端な例である。昭和四十四年ごろには日給最低額が二〇〇円、それに生産手当(月額最高三〇〇〇円)、精勤手当(月額最高二〇〇〇円)がついて、月給の最低額は七二五〇円。食費(六〇〇〇円)の措置費補助がない場合も、赤字になることはなくなった。だが、能力いっばいに働いた賃金としてはあまりにも低い。

太陽の家の給与体系は、能率給中心である。これは生産性を高めるための手段だが、とくに手先の機能が悪いものに較差かくさを生じる。だから機械設備などの改造によって能力較差を埋めることが必要になるのだが、それでも全体の賃金ベースは一般企業とは比較にならない。たとえば、一般企業と同ていど、あるいはそれ以上の品質と能率をあげてもである。

仮に、世間なみの賃金を払うということになれば、協力工場はいっせいに手を引くということになるに違いない。好景気に湧いた時代において、そうだった。春はまだなかなか速いようであつた。

しかし、ともかく木工部シャープ、クリーニング部綿久、金工部エバーが発足した。印刷、縫製、竹工、義肢と四十二年暮には一応の作業科目が並んだ。そして、第三期、第四期工事に着手することになる。

昭和四十二年六月二十九日 日本自転車振興会より第三期工事への補助金（二七〇九万

円）決定

七月二十日 第三期工事（世帯用、女子单身用宿舍など、鉄筋三階建一三

三二平方メートル）、第四期工事（機能強化センター体育館六

四二平方メートル）の工事開始（第三期工事は四十三年一月三

十一日、第四期工事は四十二年十二月十五日完成）

四十二年春には、入所者同士のカップルが四組生まれていた。ロマンスはもっと多かつたらう。家族アパートは緊急に必要だった。

そこで、新しい宿舎に2LK三室、1LK五室を設けた。一、二階はスロープでつなぎ、歩行自由な単身女性には三階に住むという設計である。この設計は九大工学部青木研究室にお願ひしたが、授産施設で世帯用アパートはこれが最初であった。

また、機能強化センターは文芸春秋新社社長だった佐佐木茂索氏が遺贈された一二〇〇万円を当てた。佐佐木氏は生前、太陽の家の話を水上勉さんから聞き、遺産の寄付を遺言して亡くなられたのだった。

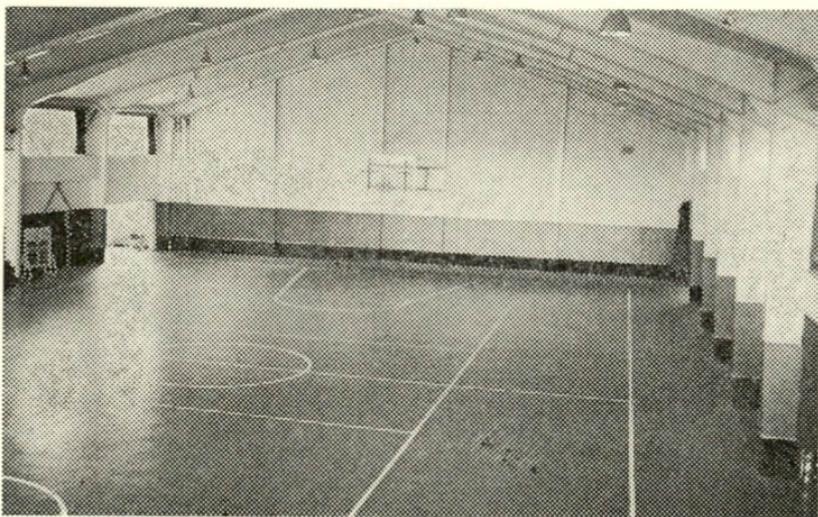
身障者にスポーツがいかに大事かは、あらためていうまでもないが、太陽の家には四十一年十月につくったプール以外、これといった体育施設がなかった。卓球やバスケットができる室内体育場が欲しかったから、遺贈されると聞いたとき、私は迷うことなく体育館をと思った。

これは「佐佐木記念体育館」と呼ばれ、太陽の家のスポーツを育てていくことになる。このステージには宮崎マツダから綴帳どんやうが贈られ、そのデザインは画家の朝倉摂氏が無料で描いてくれた。

また、三階建宿舎の一部に、身体障害者労働研究室を置き、入所者の機能訓練と日常生活動作の研究を行なうこととした。



身障者のための設備を備えたプール（昭和41年10月18日完成）



佐佐木記念体育館 文芸春秋新社社長だった佐佐木茂索氏の遺贈

責任追及の公文書

太陽の家はだれが見ても比較的短期間に発展したようであった。たしかに満二年を経過した時点で、一応の基礎は固まったということができた。

そのため、連絡、募金、広報、調査、印刷物作製、製品販売、問い合わせ相談に対する応答などの業務を行なっていた東京事務所は閉鎖することになる。

昭和四十一年一月、水上さんの提案で開設し、女子職員一名と水上さん派遣の補助員一名という構成の割には大きな力があつたが、運営費の約六割を水上さんにおぶさり続けることは心苦しく、初期の募金業務も一段落したことから、一応解散となつた。運営費の全額を太陽の家が負担するだけの全裕がなかつたのである。

東京事務所の決算（四十一年一月～四十二年十月）

総経費（人件費を含む） 約四二三万円（うち本部支出分は約一六九万円）

寄付・募金総額 約二二五〇万円

基礎はたしかにできたようだった。だが内容はまだ問題が多かった。事務責任者も発足二年を経てなお人を得ることができなかったのである。

発足当初、面倒をみてくれた牟田氏はすでに長崎に帰り、初代所長として迎えた地元のA氏はパイプ椅子販売の失敗から退いた。事務局長として大阪から招いたH氏は、エレファックス印刷機を持ち込み、早川電機、関西エバーの導入など企業まわりも積極的だったが、所内での意見衝突から去って行く。

こうした混乱が入所者にも動揺を与えたことは当然であり、その責任のすべては私にあった。県は黙ってはいなかった。それまでも県は、事務責任者を派遣するといいつけていたし、私はそれを無視し続けてきた。県は監督上の立場から、放置できないと考えていた。だが、私は太陽の家を役所のヒモつきにだけはしたくなかった。たとえ授産所として措置費をもらっていても、株式会社へのレールを踏みはずしたくなかった。

たしかに太陽の家は混乱していた。パイプ椅子の自主生産・販売の失敗があり、高安理事長は高齢のため引退を希望し、常務理事の私が理事長代行という形だった。事務責任者はくるくる変わっていた。県としては見すごすことができなかつたろう。

私は牟田氏の関係のコロニーから人を得たいと考え、その折衝も進んでいたが思うようにならず、ついに県推薦のB氏を受け入れざるを得なかつた。だが、このB氏は結局なじむことがなく、後に仕事を持って飛び出すことになる。

事務局は、四十三年に水迫幸平氏（現理事）を迎えて安定するが、私の責任は解消するものになかった。

四十三年三月、県厚生部長からつぎのような公文書が届いた。

「中村理事は国家公務員法第一〇一条の職務専念の義務の規定にてい触するので、理事長となることはもとより、常務理事であることについても適当でなく、特にこのことについては厚生省からも指摘されているのでご留意願いたい。なお、本件は事務局から略式の事務連絡として処理することは適当でなく、今後は責任者の正式報告とするようご配慮願いたい」

つまり、国立別府病院勤務の医師の身分で太陽の家に関係することは許せない、というものである。

太陽の家が発足して二年半、私は常務理事として運営に当たっていた。県も厚生省も、このことは知りすぎるほど知っている。県厚生部長は太陽の家理事でもある。私は二度にわたって、兼業許可願いを出していた。それに対する返事はなく、一方的な公文書である。

「太陽の家をやめるか、国立病院をやめるか」——県は明らかに、私が太陽の家から退くことを期待していた。事務局を去った某氏の画策だという声も耳に入った。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。県の担当課長と私とは、険悪な関係にあったことはたしかだった。授産施設らしからぬ運営が、お役人の気に入るはずがなかった。個人的には太陽の家の理念を理解し、活動を評価しているとしても、お役人は建前をふりかざす。

太陽の家から一円の報酬も得ていない以上、兼業、とはいえないと、胸を張っても、公文書をつきつけられれば無視はできない。公務員だからである。

私は開業医になるつもりはなかった。子どものころは、理工系の研究者になりたかったのだが、家が病院であり、戦時中でもあったので医師になった。国立病院に勤めたのは研究もできるだろうと考えたからだ。だからグットマン博士の教えも受けた。そして、太陽の家をつくることになった。太陽の家は発展させたい。しかも、基礎はできたといっても事務局長すら安定していない時期である。希望をもって懸命に働いている入所者を失望させることはできない。だが、私の本業を捨てるわけにはいかない。

思い悩んだあげく、私は水上さんに相談した。水上さんはきっぱり私の迷いを断ち切った。

「やめちゃ困る。太陽の家がほんとうの身障者の工場になるまで、あなたはやめるわけにはいかない」

それはそうだった。私は遊びのつもりで始めたのではなかった。太陽の家を始めるときと同じように、引き止めるものが多かったが、私は国立病院をやめた。さっぱりした気持ちだった。ついでに畑田医師にも病院をやめてもらった。そして太陽の家理事長は私、畑田君が常務理事になった。

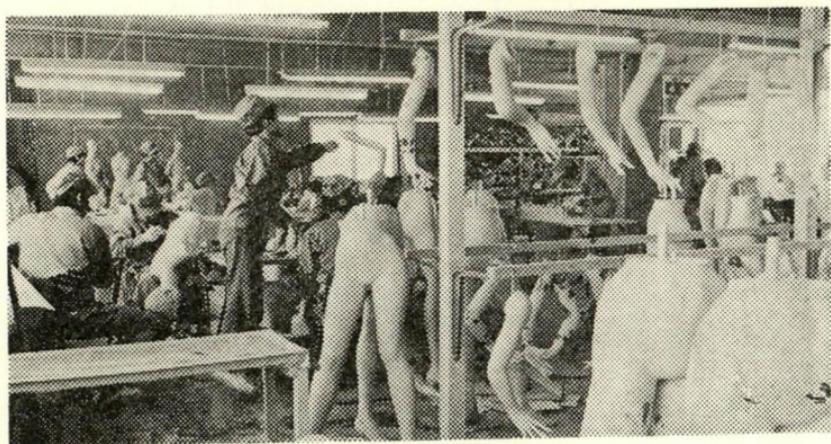
「これですっきりしましたね。太陽の家一筋ということできると、励ましてくれる人も多かったです。」

だが、「生活は……」と心配してくれた人がいたかどうかは記憶にない。私は、やむなく自分の病院を建て、畑田医師や一緒に国立病院をやめた河野訓練士には、太陽の家と中村病院という私と同じ二筋道を歩いてもらうことになった。私は医師であり続けたかったし、太陽の家から報酬を得る気にはなれなかった。また、太陽の家には将来秀れた人材が育ち、私は無用になるはずだからである。

変転する協力企業

早川電機、綿久寝具、関西エバーブラック、京都度器に加えて、従来からの竹工、義肢、印刷と昭和四十三年に七科がそろったが、私たちはさらに新しい仕事を探した。急激な経済状況の変化によって最も大きな打撃を受けるのは下請けであり、なかでも授産施設は最も弱い。それに対応するには、まず業種の幅を広げる必要があった。また、多業種、多職種であることは、さまざまな障害を持つ入所者により適切な作業を与え、より生産性を高めることができる。

昭和四十四年はじめ、かねて身障者労働研究室に協力してくれていた東大生産技術研究所の森政弘教授がプラスチック成型の話を持ってきてくれた。当時、プラスチックは時代の花形であり、成型工に対する産業界の需要は高いものがあったから、当然、有望と考えられた。



第2プラスチック科 順調に伸びたマネキン人形製作も石油ショックであえなく閉鎖

東洋綿花の協力で、静岡県清水市の川口鉄工所から射出量五オンスの射出成型機一台と付属器具一式が寄贈され、奈良県香芝町の関屋化学が製品を一括購入するということ、車椅子入所者が清水市へ技術研修に出かけ、機械は重障者にも扱えるように改造された。

これらの模様は、NHKテレビ『あすをひらく』（四十四年三月八日放映）でも紹介されたので、多くの注目を集めた。大分県はもとより東九州で最初のプラスチック産業だったのである。

はじめは二センチ径の湯桶ゆけを、ついで菊鉢きくぼちを四人の作業員が二交代で十六時間稼働、日産三〇〇〇個を生産。ついで六人が三交代で二十四時間稼働、日産五〇〇〇個を生産することになる。

この一日フル生産は大きな論議を生んだ。身障者に夜間作業をさせるとは何事か、という批判である。しかし、プラスチック成型は二十四時間稼働ではじめて食べていける産業であった。身障者が自活するには、

こうした壁を打ち破っていかねばならない。身障者の特殊性を振りかざして社会復帰することはできないと私は考えた。機械による大量生産という作業形態も、機械を障害者に合わせて改造すれば十分可能であることを、このとき証明できた。

しかし、同時に日用雑貨の製造では大きな発展が望めないこともわかった。事実、この仕事はたちまち限界点に達する。工賃が安い上に技術的向上も先が見えるものだった。九州に販路を広げたいという関屋化学の意図も、販売力の点から行きづまり、やがて太陽の家から撤退する。

また、四十五年夏操業の第2プラスチック（京屋工芸）は、マネキン一体二万円のコストが太陽の家では一万六〇〇〇円ということとで順調に伸びたが、石油ショックの波にあえなく閉鎖する。

世間並みどころかはるかに低い賃金で懸命に働いて、ある日突然の閉鎖である。こうしたことは、何度経験してもショックである。だから、そうしたときのダメージを少なくするために、常につきの業種を探しまわらなければならぬ。だが、東京のW音機のように完全に話が煮つまつてから駄目になる場合もある。この会社は、「工場にトイレは不要」と、工場レイアウトからトイレを消した。

企業にとってはトイレ面積も有効に使いたいということは理解できる。しかし、作業員に「他のトイレを使えばいいだろう」という態度は、身障者の生理をまったく無視するものであり、誘致しても好結果は生まれない。

四十六年春操業の医療機器科（川澄化学）のように大メーカーに完敗する例もある。川澄は注射針メーカーとしては名が通っていた。当時、注射針一本のコストが一〇〇円だったが、太陽の家で生産すると七〇円になった。ところが某社が三分の一のコストでなぐり込みをかけてきた。川澄は大量生産システムを置くか撤退するか岐路に立たされ、結局全面閉鎖に追い込まれた。そして、京百度器は、先に述べたB氏が従業員八〇名のうち障害ていどが軽く能率の高いものを引き抜く形で、独立していった。

この意図が明らかになったとき、私たちはすぐに行動に移った。企業が引き揚げるのはやむを得ないとしても、入所者がうまい話に乗せられて去っていくのを座視することはできないし、残されたものを遊ばせてはおけないのである。さいわい、同じメジャー・メーカーの田島製作所が東京から乗り込んでくることになった。

はじめに話を持っていったとき、日産一万六〇〇〇個というのを、「冗談でしょう、月産でしょう」

と笑った田島の責任者も、事実を確認すると驚きをかくなかった。

交渉はまとまった。機械が運び込まれた。だが、「同業者だから道義的にも」という田島の意志で、田島が入るといふことは京百度器側にはまったく知られないように気をつけた。

昭和四十五年九月三十日、京百度器が引き揚げる。そしてその夜、同じスペースに新しい機械が据えつけられ、翌十月一日、田島製作所の仕事が始まった。同じ入所者が、マークは違うが同

じメジャーを同じように作った。一日のロスもなかった。

そして、関屋化学が去ったあとの第1プラスチックは、三台の成型機で四種類のメジャー・ケースをつくり、東京の本社工場へも出荷することになる。

六階建本館が完成

昭和四十四年当時、太陽の家は約二万平方メートルの敷地に建物約七〇〇〇平方メートル、入所者一四三名、事業収支予算八七〇〇万円の規模に達した。借金は六八三〇万円（社会福祉事業振興会四〇〇〇万円、年金事業団二八三〇万円）あったが、その返済見込みも立ち、まず安定軌道に乗ったと考えられた。

このとき、これ以上の施設拡張はおさえ、内部の充実に全力を傾けるか、さらに将来の発展を考えて施設全体の規模を拡大するかという問題が出てきた。

太陽の家が、株式会社を旨ざす以上、より大きな規模でなければならず、拡大とともに内部も充実されるというのが私の考えだったが、「拡張はもういいではないか」という声も多かった。たしかに太陽の家は、当時の日本の施設のなかでは群を抜いていた。しかし、日本を代表する施設ではあっても、世界的レベルの施設とはいえなかった。

たとえば、コペンハーゲンのコレクティブ・ハウスは一三階建ビルで、車椅子使用可能な住居が七一〇戸と作業所、レストラン、宴会場、洗濯室、娯楽室、自動ドアつきガレージがあり、テレホン・キーパー、レストラン・キーパー、ハウス・キーパーが買物、料理など日常生活を助け、隣接して整形外科病院があり、五〇〇〇円の家賃に補助があるというものである。こうした身障者の保護工場と住居が一体となった総合環境が、私の頭に強いイメージとして植えつけられていた。

「日本の現状からはかけ離れた夢想だ」

「大部分の施設はガラスが破れ、雨洩りがしても簡単に修繕できないような状態ではないか」という反発があることも予想できたが、私は太陽の家が先頭に立って、日本の身障福祉を発展させなければならぬと考えていた。全体のレベルを上げるためには、先頭を走るものがスピードを落とすわけにいかない。

さいわい、隣接する国有地が遊んでいた。太陽の家が理想とする本格的な身障者の工場を建てるには、この土地を確保しておく必要があった。従来の授産部門を一挙に取り除くことはできないし、作業を休んで建てかえることもむずかしい。また、土地値上がりの傾向がいよいよはつきりし始めたころでもあった。周辺の民有地が値上がりすれば、国有地の払下げ価格も上がるだろう。現に国立別府病院と太陽の家を除いては、小学校と貸別荘ぐらいでこれといった建物がなく、蓮田が広がっていたこのあたりも民家がふえ始め、市営住宅団地もできた。うっかりすると

国有地がほかへ払下げられることもありうる状態だった。

ふたたび関係機関まわりが始まった。

「まだ何かを建てるのですか」

「いや、これが最後です。これが建たないと太陽の家は完成しないのです」

困惑気味の顔が多いなかで、

「すばらしい計画だ。ぜひ実現させたい」

と答えてくれたのは園田直氏。

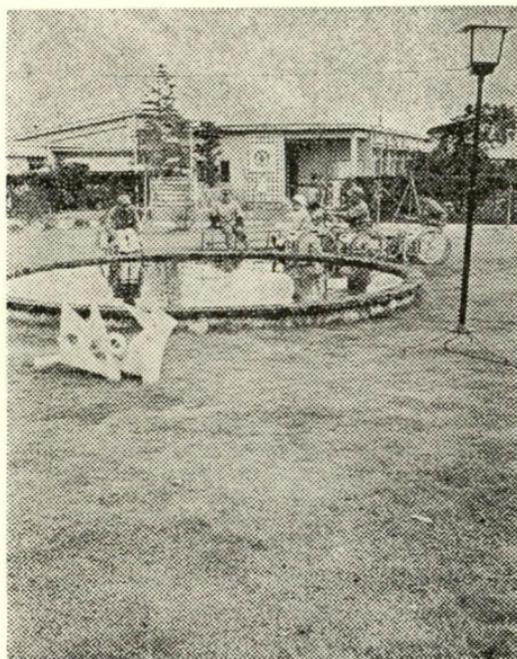
厚生大臣在任中、福祉行政に積極的姿勢を示しただけに理解が早かった。

六階建、八〇〇〇平方メートルの設計図には、事務室、宿舎、保護工場、身障者労働研究所、コンピュータ室、診療室、保育園、レストラン、出張郵便局・銀行、憩どろの家、娯楽室などがつめ込まれていた。

一見して、多くの人が持った印象は、ぜいたく、ということだったかもしれない。従来の施設の概念からすればそうだろう。

しかし、日本は自他ともに認める、経済大国に成長していたのである。施設だけがいつまでも小国並みというのはおかしいではないか。また、施設が世間に遠慮するという根拠もない。身障者が堂々と権利を主張するためにも、これぐらいのものは欲しいと私は考えた。

コンピュータは、労働研究、工場管理、データ分析にあってよいものだし、保育園は共稼ぎ夫



噴水前広場でくつろぐ入所者

婦のために必要である。レストラン、郵便局などは太陽の家を一つの地域社会とすれば欠かせない。憩の家というのは、家族や見学者の宿泊施設である。とくに身障者にとって観光都市別府もまた、他の都市同様に不便な土地である。ホテル・旅館の数は多いが、気楽に泊れるところは少ない。一般にサービス業は身障者を歓迎しないが、歓迎しようとしても車椅子使用者などのための設備改造が負担になる。いきおい、身障者は家や施設に閉じ込めがちになる。太陽の家が別府という観光地にある以上、宿泊施設をつくることはぜひ必要なことであつた。これは保護工場

と並んで、発足当初のプランの一つでもある。

これらのうち、コンピュータ室を除く全部が、実現することになる。コンピュータについては、IBM本社のワトソン会長も協力を約束してくれたが、ソフトウェアに問題があるということで実現しなかった。

土地は四十四年春、特例を認められて三割減額の一平方メートル四二〇〇円で購入が決定。社会福祉事業

振興会から二〇〇〇万円借りることもできた。ただし、国庫へ支払う金額は約二七八六万円だから、一〇〇〇万円ちか自己資金が必要だった。

建物については、さらに多額の資金が必要になる。将来六階建に増築する含みで、当初四階建としても、見積りは二億円にのぼった。資金の期待は、まず返済する必要のない自転車振興会である。だが、いかに競輪とはいえ、一億円以上の補助金を出したことはなかった。

理事のあいだにも、

「一足とびの飛躍は危険だ」という声があった。厚生省も難色を示した。

元来、厚生省は太陽の家を全面的に支持してはいなかった。はっきりいえば、設立当初から太陽の家は厚生省にとって、異端児だった。社会福祉法人・授産施設となっても、梓にはまらないため、はね上がりには頭を痛めていたに違いない。極端に大きなミスがないかぎりは黙認しておこう、一つのテストケースとして勝手にやらせてみよう、ということだったろう。保護工場問題にしても、本格的に取り組むべき段階だと思おうといながら、具体化させようという気配はみられなかった。また、東京の日本傷痍^{とよ}軍人会館、札幌の北海道リハビリという二つの身障者施設が経営上の問題を起こした時期でもあった。役所としては慎重にならざるを得なかっただろう。結局、「理想論だ」ということばしか出てこなかった。

保護工場の内容は理解できても、制度として存在しないのだから、役所には手のつけようがない。厚生省に属するのか労働省に属するのかもはっきりしないから、国から補助金を出すことも

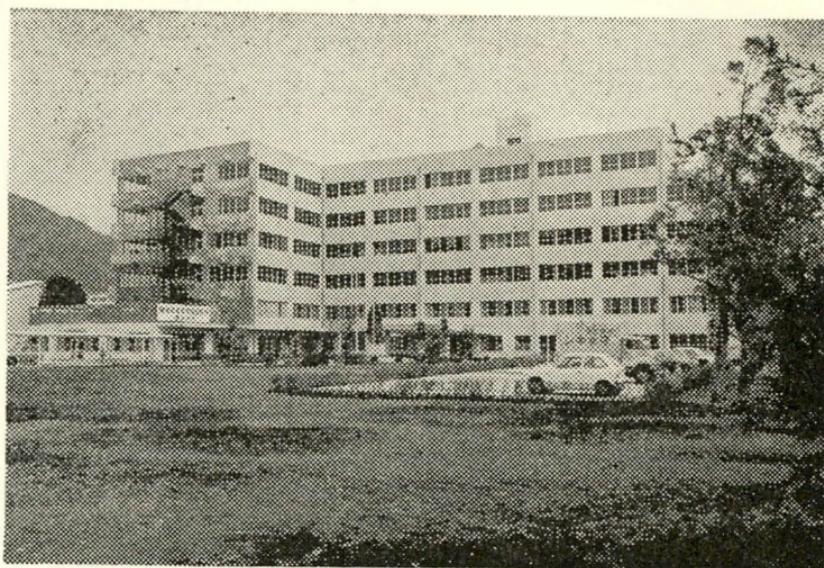
できない。法律以前に実体をつくろうとするものに対しては、国は関知しない。――

「やりたければ自分の責任で勝手にどうぞ」ということになるのかもしれない。私は、そうした扱いは馴らされたから、あまり腹が立たない。問題は競輪がお金を出してくれるかどうかである。

いかに多額の収益を上げている競輪とはいえ、福祉関係への補助の枠は限られているし、各施設への配分の均衡もある。いままでも太陽の家は他の施設にくらべるとはるかに多額の補助を受けてきた。ここでまた無理を通すことは到底できないことだった。

そこで、まず三階建（工費約一億一二〇〇万円、日自振補助金約九〇〇〇万円）で申請。補助金五九〇〇万円が内定。やむをえず計画を二階建（工費約八六八〇万円）に変更し、昭和四十五年夏着工した。ただし、基礎は将来六階建への増築に耐えられる工事にするという条件付きである。計画は六階建から二階建へ大きく後退したが、私の考えは変わらなかった。やるべきときに一気にやるというのが、私の主義である。建物をつくるというのはお金があればできることだから、補助金が駄目なら借金すればいい。返済はどうにかなるものである。多額な借金を恐れていては、大きなものではない。国が面倒をみてくれないのだから借金も当然である。

こうした私の考え方に危惧の念をあらわした人は多い。危ぶむのは常識である。施設運営に冒険は避けるべきだというのも常識である。しかし、だれかがどこかで常識を破らなければ前進はない。失敗した場合の覚悟はできていた。



六階建本館完成（昭和46年4月18日）

「工事は二階ではない。四階だ」

と私は指示した。社会福祉事業振興会から五〇〇万円を借り、計画変更の手続きをとった。だが、六階建の当初の計画は、すでに私の頭のなかに完成した姿となって焼き付いていた。四階までできて、六階ができないことはないのだ。

一度足場をはずしてしまうと永久に四階建のままになるような気もした。あらためて足場を組むのは、費用的にも損である。私はふたたび指示しなおした。

「六階までやってしまえ」

走りまわったあげく、あゆみの箱から三五〇万円を都合してもらおう約束をとりつけた。二度目の計画変更申請を出した。

さすがに厚生省も黙視できなくなったようだった。

「いったいどうなっているのだ。そんなやり方で責任がもてるのか」

といつてきた。私も切り口上でことばを返した。

「私は生命をかけてやっている。さいわい親からもらった財産もあるから、いよいよの場合には私が払う」

係官は私を持っている土地を検分し、^{てんまつ}願末書を出すようにといった。こうなっては、どんなことがあっても六階建を完成させなければならない。無理を承知で頭を突っ込み、無理でなくするのが私の唯一つの趣味なのだ。八〇〇〇万円の借金について私は妻と共同保証した。妻はひとことも口をはさまなかった。

念願の建物は、三階から上はコンクリート打ちっ放しのまま完成した。それらの部分は、やがて協力工場が入り、各団体からの助成金も得て整備される。そして、屋上高く太陽の家の旗がひるがえった。

昭和四十四年四月十九日 隣接国有地（六六三三平方メートル）を取得

昭和四十六年四月十八日 六階建本館（八〇四八平方メートル）完成

四月二十九日 天皇陛下より御下賜金をたまわる

六月一日 重度身体障害者収容授産施設の指定を受ける

七月 グッドウィル・インダストリーズのアジア・リハビリテーション

ンターに指定される

この本館には、清水基金による空調設備がされ、万博パビリオンの動く歩道が、富士グループから贈られた。

いよいよ福祉工場へ

白亜の六階建は完成した。海ぞいの国道一〇号線、国鉄日豊本線から見えていた国立病院は、六階建のかけにかくれてしまった。だが福祉工場の計画はなかなか進まない。国がその姿勢を持たないのだからむずかしいといえはそれまでだが、太陽の家は、自活できる保護工場になることを設立理念とし、職員・入所者が一丸となって努力してきたのだから、簡単に引っ込むことはできない。

昭和四十一年から四十六年まで社会復帰したものは五一名だったが、その平均月収は二万五〇〇〇円（四十六年）という低さである。授産施設では約二万円を超えると措置費が切られるから、月給二万円以下のものが多いが、住居と食事は保証される。施設を出れば、うまく就職できても二万五〇〇〇円で生活のすべてをまかなわなくてはならない。これでは到底きびしい社会へ

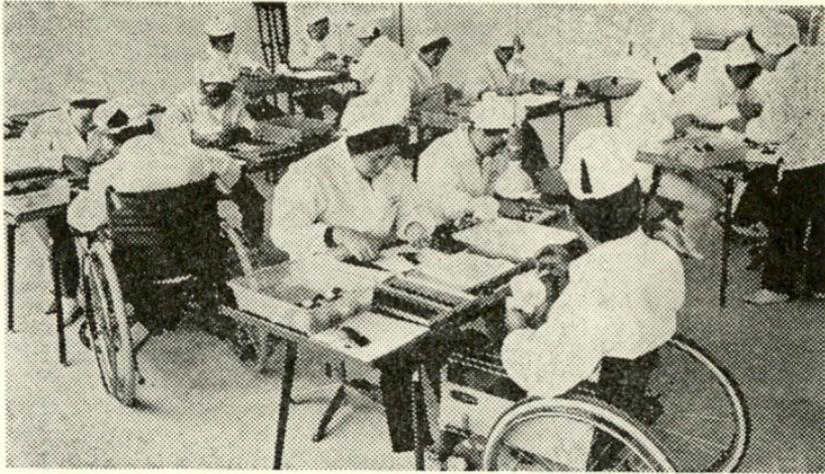
復帰する気にはなれない。それを承知で、あえて社会復帰しようと思っても、とくに重度障害者を受け入れる企業はない。障害者の雇用を義務づける法律はあるが、中央官庁・地方自治体からして完全に守っているところはほとんどない。

太陽の家が保護工場をつくり、入所者がそこで働くという形で社会復帰することが、最小にして最大の要求だったのだ。

会社まわりがまた始まった。太陽の家が独自の製品をつくり出す力を持たない以上、何らかの仕事を導入しなければならぬ。しかも、授産とは違い、自活するのだから、相当の収益が期待できる業種でなければならぬ。そこから出てくる提携条件は、近代産業であること、景気に左右されにくく付加価値の高い業種であること、身障者に適応する仕事であること、経営基盤がしっかりしていて福祉工場に理解があることなどで、目標を弱電関係にしぼった。

松下幸之助氏と接触するため、水上さんと京都のお寺を訪ねて、偉いお坊さんの話を聞いたこともあった。日立や東芝にも何度か足を運んだ。だが、なかなか具体化しない。そのうちに六階建本館が完成した。三階から上を遊ばせておくわけにはいかないから、まず労働研究所を發展させた機能開発センターを置き、金工部・田島や第2プラスチック、医療機器科などを旧作業棟から移した。ところが、あれほど腰が重かった厚生省が、福祉工場設置のための予算措置をしたのである。太陽の家のほかに、静岡と広島に新設するとうものだった。

六階建の建設は強引すぎると批判されたが、それによって福祉工場がともに陽の目をみるこ



医療機器科 六階建本館の機能開発センターに旧作業棟より移転させた

とになった。これは決してヒョウタンからコマではなく、社会の進歩の必然といえるだろう。私たちの要求に首を縦に振らなかった厚生省も、保護工場の必要性は痛感していたのである。

それはともかく、にわかのことには私たちも少々あわてた。遅くとも秋までに提携企業をきめ、建設にかからないと予算が流れてしまうのである。

昭和四十六年度厚生省予算としては、国が約四〇〇〇万円、県が約二〇〇〇万円の計六〇九九万円。せっかく、これだけの予算がついた以上は、苦勞して建てた六階建を使う必要はない。敷地に余裕があるから、新しく建設すればいいということになった。問題は、やはり提携企業である。

だが、折からドル・シヨックの嵐が吹きまわっていた。産業界は慎重な構えで、表情も渋かった。

昭和四十六年九月なかば、私は渡辺明士事業部長と出京し、走りまわっていた。昼間、自民党の橋本

登美三郎氏に、

「かならず提携を承知してくれるところを紹介してほしい」と頼み込み、

「それでは、まず行ってみなさい」と、立石電機の立石一真社長への紹介状をもらった。

「やれやれ、疲れたな。立石電機は大丈夫だろうか」

「さあ、どうでしょうか。とにかく汗を流して、食事をしないことには。朝昼抜きで歩いたんで

すからね」

「メシぐらいは、話がきまればいつでもゆっくり食えるよ」

「そういいながら銀座東急ホテルに入ってシャワーを浴びた。ところが、渡辺君は浴室から出てくるなり、

「ちよつと気分が悪いので」

と、ベッドに横になるやいなや、胸を波打たせてあえぎ始めた。顔は蒼白で、手足は冷たくなっている。脈をとる間にぐったりして、脈搏はほとんどない。急性心不全である。すぐフロントへ連絡したが、契約している病院はない、救急病院にもすぐは手配がむずかしい、という。

「カゼか下痢止めの薬ならありますが」というノンキな答え方だ。一流ホテルがそんなことですむのか、と怒鳴る余裕もない。いったいどうしたものか。瞬間、がんセンターに古い友人が勤めていることを私は思い出した。電話をすると、運よく宿直であった。

「薬と注射器を頼む」

叫んで私はホテルを飛び出した。ハダシのまま昭和通りの車の隙間を縫^{すま}って走った。走りながら、「彼を死なせるわけにいかん」と思った。彼は保護工場の計画案づくりに徹夜を続けていた。私が倒れるならともかく、彼を死なせることはできない。そういうわけにはいかんと考えながら、私の頭には渡辺明士事業部長の葬儀の様子と、東急院太陽明士居士、という戒名が勝手に浮かんできた。それを打ち消しながら走った。

さいわい、彼は注射で回復した。一過性脳虚血症だった。翌朝、彼を別府へ送り、私は秋山ちえ子さんに同道してもらって、立石社長に会った。

「身障者だからといって特別扱いしてもらう必要はありません。かならず満足される仕事をしてみせます」

「では、地元合弁^{ごうべん}の下請けと同じ条件でやっていただきますよう」

電動義肢の研究で医学博士の学位もとっている立石社長は理解が早かった。念願の福祉工場はこうしていよいよ始まる。

みんなが株主になるのだ

ふたたび工場の建設が始まった。六階建本館が完成して六ヵ月後である。だが、これこそ本物

の福祉工場なのである。鉄筋三階建、延べ二〇五一平方メートルの一階が工場、二階は单身用宿舎、三階は世帯用宿舎。

太陽の家が工場の整備、運営、従業員の健康管理、給食、福利厚生を受け持ち、新しく設立される会社が機械、材料を持ち込み、生産指導、販売にあたる。この新会社は工場の生産活動に必要な費用を委託契約にもとづいて太陽の家に支払い、太陽の家はその収入で従業員の賃金や工場運営に必要な経費をまかなうという仕組みである。

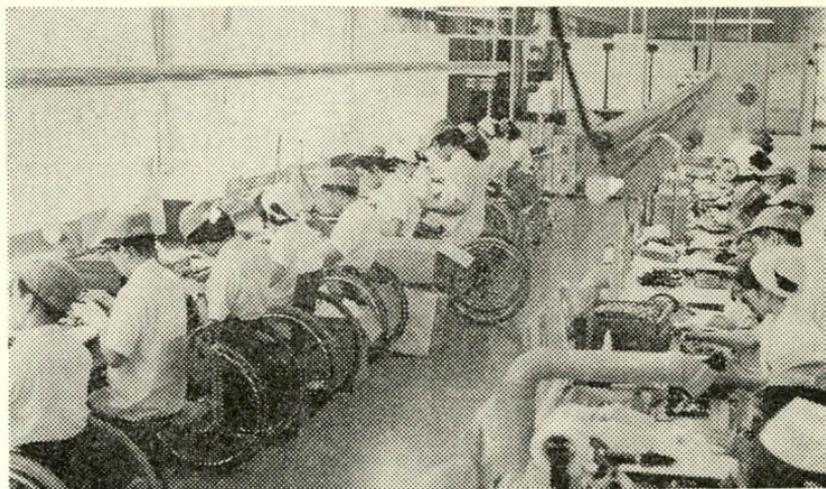
新会社の社名は、オムロン太陽電機株式会社。オムロンは立石電機のブランドである。代表取締役は立石社長。資本金五〇〇万円は、立石電機側が六〇パーセント、太陽の家と新従業員が四〇パーセントときまった。

そして新会社の従業員候補を選び、準備訓練が始まる。彼らはまた太陽会という持株会もちかひかいをつくらせて、資本金七〇万円の株主になった。太陽の家側の二〇〇万円は私と畑田常務理事、秋山ちえ子さん、橋本登美三郎氏夫妻にも持ってもらったが、その約三分の一をグループとはいえ彼ら自身で持つことになった。これはたしかに画期的なことだった。身障者が福祉工場に社会復帰するとともに株主になるということは、世界でも例のないことだった。

秋山さんは、

「一〇万円の出資で、はじめて取締役というものになれたわ」

と、大よろこびだったが、入所者のよろこびはもっと大きかったようだった。



オムロン太陽電機株式会社（昭和47年2月設立） 60数名の障害者は税金の消費者から納税者の立場に画期的な転換をとげた

そして、工場長には脊損一級の吉松時義君が選ばれた。

立石社長は著書のなかでつぎのように述べている。

「——私はこの創業式で、重身障害者を前にしてあいさつをせねばならぬ立場にあったので気が重かった。気の毒な境遇の人たちを、まともに正視できるかどうか心配でもあった。しかし、壇上上がってあいさつを始めると、そんなことはものの五分もたたぬうちにすっかり忘れてしまった。というのは、さあやるぞ！ といわんばかりの意欲のみなごった顔がいっぱい、工場が実に明るかったからである。フレンチ・ブルーの作業服にオムロンのマークを胸につけた二十八歳の吉松工場長が車いすで前に出て、りりしいあいさつをしてくれたのを聞いて私は胸が熱くなる思いであった」『私の履歴書・創

る、育てる』

別府善意工場の計画を立ててから満八年、ようやく、身障者の工場はスタートした。

仕事はまずマグネット・リレーの組み立て。従業員約五〇名で、昭和四十七年度目標は月産八〇〇万円、四十八年度月産目標を一四〇〇万円とした。

立石社長は、他の協力工場の例からみて、一、二年は赤字と考えていたようだが、実際に操業してみると、四ヵ月目に黒字になった。もちろん、立石電機側からの条件は、他の協力工場と同じである。しかも、納品の不良率は、断然少なかった。これは太陽の家のこれまでの仕事からしても当然のことだったが、立石社長はさすがに驚いたようだった。

その後、不況の影響もあって業績はまだ安定しているとはいえないが、昭和五十年春から電卓の一貫生産に転換。技術的向上とともに充実度は間違いなく高まっている。

オムロン太陽電機株式会社

昭和四十七年二月四日設立。四月一日操業。福祉工場従業員六九名（五十年九月現在）。

業績

〈昭和四十七年四月―四十八年三月〉売上高一億三〇〇〇万円。税引後利益五〇〇万円。株主配当一〇パーセント。

〈昭和四十八年四月―四十九年三月〉売上高二億二九五〇万円。税引後利益六四八万円。株

主配当二〇パーセント。

〈昭和四十九年四月―五十年三月〉売上高六億二五四五万円。税引後利益三一七万円。株主配当一五パーセント。

生産規模 電子式卓上計算機（パーツから完成品まで一貫組立）月産五万台。

この工場に足を踏み入れると、私は十年前アピリティーズ社を訪れたときの感動を思い出す。そして、いまようやく当時のアピリティーズに追いつけたのではないかと思う。さらに、数年後、福祉工場の全従業員が株主になるとき、アピリティーズを追い越すことができるのだと思う。ともあれ、六十数名の障害者はいま措置費を返上した。法人事業税をはじめ、まだ少数とはいえ従業員は所得税を納めるようになった。税金の消費者から納税者の立場にかわったのである。

第五章——人生はここから出発する

もう一人ではない

「何でもいいんです。どこに寝ても、どんな仕事でもいいから、ここに置いて働かせてください」

聞きとりにくいことばとともに、ふるえるからだが出して廊下を這う。

四日前に北海道の稚内市を出て、ようやくたどりついたのだという彼は、重度の脳性麻痺。狂人のように床にからだを打ちつけ、のたうちながら訴える。

「もう帰れない。ぼくはどんな仕事でもする」

山陽新幹線には車椅子専用の客室がある。また、昭和五十年七月には、東京駅新幹線ホームに

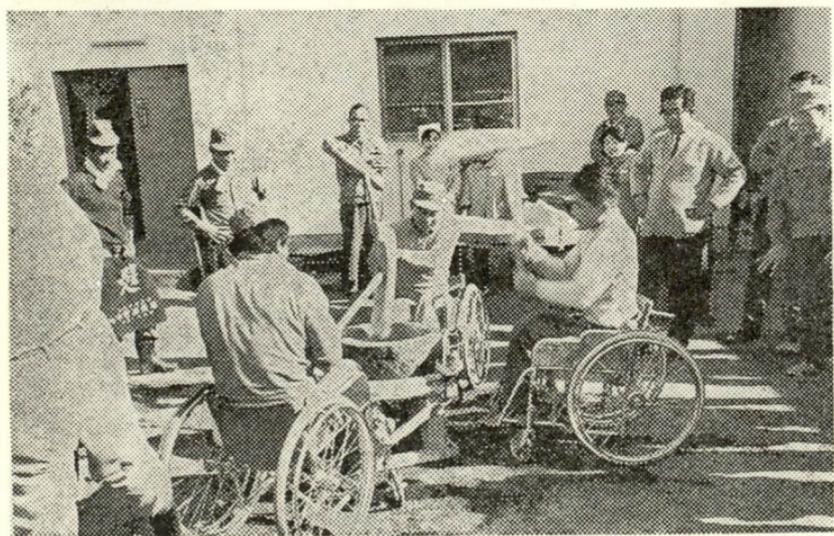
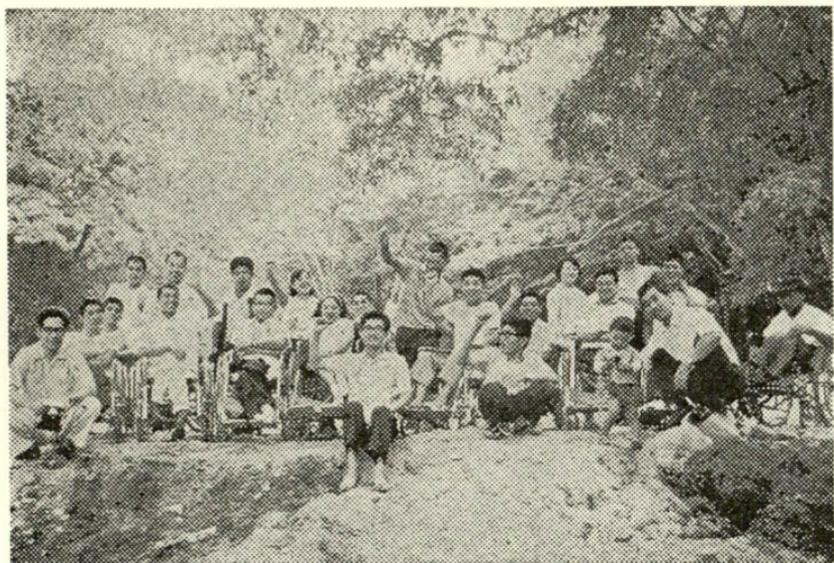
車椅子使用者のためのエレベーターが設けられた。だが、太陽の家設立まもないころの車椅子の一人旅は苦難そのものだった。食堂車にもトイレへも行けず、駅弁も買えず、汽車と船を乗りついでたどりついたのだ。太陽の家に入所するには、居住地の福祉事務所を通して申し込み、書類審査と面接という手続きが必要だが、彼は入所を断わられることをおそれて直接やってきた。近県ならともかく、北海道では追いかえすわけにはいかない。

「家出をしてきた」というのだから、ほんとうなら職員の付き添いをつけて送りかえすべきかもしれないが、こちらにはその余裕もない。何度か実家と福祉事務所と連絡して、彼は太陽の家の入所者の一人となった。

入所希望者は、みなそれぞれの事情を背負っている。生まれてから、あるいは障害者となつてからの長い苦しい日々をかかえ、生きる道を探すことに疲れながらも、なお生きようとしてやってくる。

「ひと思い生命断たんと山に入り……」と歌う過去は、五体満足な健常者の想像を超える。親、兄弟から冷たくあしらわれ、妻に逃げられたものもいる。帰るべき家を持たないものもいる。経済的に恵まれ、周囲に暖かい愛情がありながらも、疎外感に打ちひしがれるものもいる。家庭にいても療養所においても、彼らはみずから生き甲斐を見出すことができない。

北海道の登別の療養所にいた女性は、教会のカンパと全日空の援助を得て入所してきた。また、東京の私の宿泊先を探して、子どもの入所を頼む母親もいる。一般社会で仕事をしていても



もう一人ではないハイキング（上）もちつき（下）

一人前扱いされず、また仕事の能力はあってもよろこびを見出せない場合も、太陽の家に希望を託してやってくる。

——大川にいたところは建具屋にいた。自分は小児マヒと思わず、一生懸命に働いた。でも、自分はやっぱり小児マヒだ。いくら働いても、やっぱり人の見る目は同じだ。小児マヒというだけで、人からおまえは小児マヒだから仕事ができない、小児マヒなんか来なくてもいいといわれてきたが、それを我慢に我慢のすえ、とうとうかんにんぶくろのお(緒)がきれた。自分がかたわ者だ、どうしてみんなはそんなに小児マヒがイヤなのか。自分達ももし、僕の様なかたわ者になった時の事は思わないのか、僕は内心そう思った。でもそう思っても仕方がない。よしここで僕はイヤな所から抜けだそうと考え、建具屋をやめた。僕の人 生は太陽の家で始まるのだ。太陽の家でみっちり仕事を覚え、こんど帰った時は、りっぱな人になって、いままでバカにした人達を僕は仕事で見返してやるんだ。『むぎ』第3号、石橋弘次)

博多の洋裁店に勤めていて、仕事も身につき、周囲からも可愛がられていたのに、なぜか毎日がつらくてたまらなくなったという女性は、太陽の家に入所して明るさをとりもどしたという。

——私はやっぱり淋しかったのです。「いくらお父さん、お母さんでも障害者じゃないから私の気持なんてわからないのよ」と、いままでにそんな言葉を出した事がない私なのに口走ってしまった。押さえていた涙が一度にあふれて頬を流れます。……それから一週間ほど

して入所通知が来しました。私はほんとうにうれしかったのです。父も母もわかってくれたのでしょう。……（太陽の家のシンボルの）麦に負けないように、私たちも障害に負けないで強く明るく生きましよう。そうすれば生きるよろこび、働くよろこびが湧いてくるのではないのでしょうか。私のただ一つの願いは人並に結婚して幸福になりたい、それが私の夢です。

『むぎ』第1号、落石若子

彼らは入所して、まず孤独ではない自分を見出す。自分よりもっと重い障害のものが明るく働いていることに勇気づけられる。そして、自分だってやればできるという意志を持ち始める。その意欲と緊張感が、失われていた力を呼びもどす。

手術や薬剤では止まらなかったケイレンが、仕事につくとピタリと止まる青年がいる。曲がったままで固まった右手が、仕事を始めてから徐々に伸びるようになった青年もいる。科学は決してすべてではない。ときに人間の意志、生命力が科学的データに対して訂正を迫るのだ。

——ある日、契機がおとずれた。それは、太陽の家への入所でした。不安があり、でもファイトがはるかにそれを上まわっていた。働いた……ただ夢中だった。「働くという事」それは、かつての私には想像もできなかったことであり、でも立派にやれた。むしろ健全なときよりもすべてに意欲的になった。仕事は辛い。でも、私は幸せだと思う。それは働けることの幸せと、強く生きている現実とが生み出したものだと思います。私はまだ若い……人生はこれからだ。夢をもとう、夢をつくろう、素敵な夢を育てて行こう。『むぎ』第3号、

河津役子)

自分で生きる契機としたものは強い。考え方もしっかりしているし、生活態度も明るい。それに対して家庭的に恵まれ、過保護の生活をしてきたものは弱い。集団になじめず、ちよつとしたことにも精神的屈折を示す。食事が口に合わないといつて逃げ出すものもある。

また、逆に、あまりにもみじめな生活を送ってきたために自暴自棄になっているものもある。禁止している酒を飲んで暴れ、傷害事件を起こすということもないではない。だが、そうしたのも、毎日の規則正しい生活と、真剣に生きようとしている同僚の感化で、素直な性格にもどつていく。仕事が、その支えになる。

「仕事をさせないぞ。家へ帰すぞ」

と叱ると、ふてくされていたものもたちまちシユンとしてしまうのだ。

三週間の入所オリエンテーションが終わるころ、彼らのさまざまな過去は過去として、新しい生活に立ち向かう意欲がはつきりあらわれてくる。

「みんながやっている。自分にできないことはない」と思いはじめるようになる。寮生活を嫌っていたもの、かたくなな心も、しだいに仲間意識に目ざめる。集団生活のなかの自分の役割を理解し、能動的になっていく。

耐え抜いた力

太陽の家はきびしい、という見方がある。マスコミから「あまり酷ではないか」と叩かれたこともある。たしかに寮生活も作業も厳格な面がある。

寮生活でいえば、起床時間も消灯時間もきまっている。食事時間、入浴時間、外出門限もきまっている。消灯後のテレビ・ラジオの禁止、電熱器・コタツの使用禁止、飲酒の禁止も最近まで続いていた。掃除・洗濯など身のまわりのことはすべて自分で行なっている。廊下や歩行中の喫煙も禁止である。

作業は朝八時二十分から作業場ごとの打ち合わせ会があり、八時半から正午まで。午後は三分の休憩をはさんで五時半までの実働七時間半。

時期によっては残業もある。遅刻三回で賃金カットになり、給与体系は能率給ベースである。日給月給だから、病気で長期欠勤でもすると、手取額はぐんと減る。措置費がついていないものは食費を差し引かれるから、赤字の計算書だけもらうこともある。

設立当初には、はじめての給料が五〇〇円で、うさばらしにホルモン焼を友だちと一回食べに行つて、それで終りという例も多かった。普通人以上に一生懸命働いて、そういうことだから、

「酷だ」という批判も出てくる。

冷暖房設備も長い間なかった。九州とはいえ、冬の寒さは障害者にこたえる。だが、コタツ、電熱器、石油ストーブなどの使用を認めるわけにはいかない。身障施設にいちばん恐いののは火事だからである。電気アンカは認めたが、暖房は、食堂や集会場に限らざるを得なかった。寒くてしようがないから酒でも飲もうかというものもでてくる。酒の酔いにまぎらわせないことは多いのだ。一般社会の恵まれたサラリーマンのように甘えてクダを巻こうというのではない。ただ飲んで、ぐっすり眠りたいと願うのだ。彼らの気持ちは痛いほどわかるが、私たちは見逃しておくわけにいかない。

「お前たちは酒を飲める身分か。お前たちが寝ているところも食べているものも、お前たちが稼いだものじゃない。酒を飲みたければ一日も早く社会復帰するように頑張ってみろ」
怒鳴りつける私も、ほんとうは飲ませてやりたいと思う。

「酒は身分で飲むものか」というような反撃が、なぜないのか。
「オレたちは精一杯働いている。酒を飲んでなぜ悪いのか」と食ってかかってくればいいではないか。その元気もなく、かくれて飲んでいる姿が立つ。

だが、腹が立つのも所詮^{しよせん}、私が健常者であり、管理者であるからだろう。一日も早く社会復帰をしたいの、彼らのほうである。それができないから酒でも飲まなければ気持ちをしずめうがないのである。しかし、そうした弱さこそ、彼らにとって克服すべき最大の問題であることも



ダンスパーティ 私はできるだけ彼らの中に溶け込むよう努めた

間違いない。

私は、集団の統制を乱すものに対して厳格な態度をとり続けた。勝手な行動をするものはずぐに家へ帰させた。自室にテレビを持ち込んでいるものからは、月二〇〇円の電気料を取り立てた。

「きびしすぎる」

「イキがつまりそうだ」という声がきかれ、

「こんなにしぼられるんならオレのほうから出て行ってやる」と退所するものもいた。

男女間の問題にも、私たちは神経をとがらさざるを得なかった。彼らは太陽の家を身障者の楽園と錯覚して、一足とびに過去のマイナス分を充足させようとする。だから、自由であるべき恋愛についても、

「その身分か!」と、苦い言葉を投げつけざるを得ない。

施設の管理者としては、入所者に間違いを起こさせてはならない。そして私は、身障者の弱さを克服するのは身障者自身の力だと考えた。身体障害者は、からだに障害を持つだけではない。周囲に対する甘えや依頼心を克服しないかぎり、身心障害者なのである。からだの障害は他の力で乗り越えることはできるが、心の障害はみずからの力以外に頼るものはない。障害者にとって最大の問題は、心の障害をどう乗り越えるかである。

私は、弱ければ弱いほどきびしい鍛練が必要だと考える。障害者が一般社会に入り、健常者と対等に生きるには、健常者の何倍かの鍛練を経なければならぬと考える。社会復帰ということばは障害者を幻惑させるが、これ以上きびしいものはない。だから私は、

「自分を克服する気のないものは、太陽の家にいる必要はない」という。太陽の家は保護施設ではなく、社会復帰を第一義とするからである。

私は機会あるごとに彼らと話し合うように努めた。多くのものは私の気持ちを理解してくれたが、残念なことはほとんど私の一方的な訓戒くんかいに終わってしまうことだった。それは私の至らなさであり、私の欠陥でもあった。私自身に、じっくり話し合う余裕がないのだった。彼らもまた私を恐れているようだった。不安は私のほうが強かったが、彼ら一人一人の心にまで入っていくことはなかなかできなかった。

これをカバーしてくれたのは畑田常務理事であり、厚生・生活相談担当の木元忠清課長だったが、入所者のなかからもやがてすっかりした意見が出てくることになる。きびしさに耐え抜いた

ものが意外に大きく育っていたのである。それは、六階建本館の完成以上に素晴らしいことであつた。

障害者ではない明るさ

「名前の通り、太陽の家は明るいですね。施設というのはどこか暗いものだというイメージを持っていたんですが、正直いって驚きました」

はじめての訪問者は、ほとんどがこういう。

それに対して私は、

「仕事ぶりを見てください。彼らはもう障害者じゃありません」

と、答える。作業場・工場をひとまわりしてきた訪問者は、

「まったく驚きました。実に素晴らしい」

という。私はさらに、

「彼らの休日の過ごし方を見れば、もっと驚くでしょう。だが、彼らがもはや障害者でないと考える、ごくふつうのことになります……」

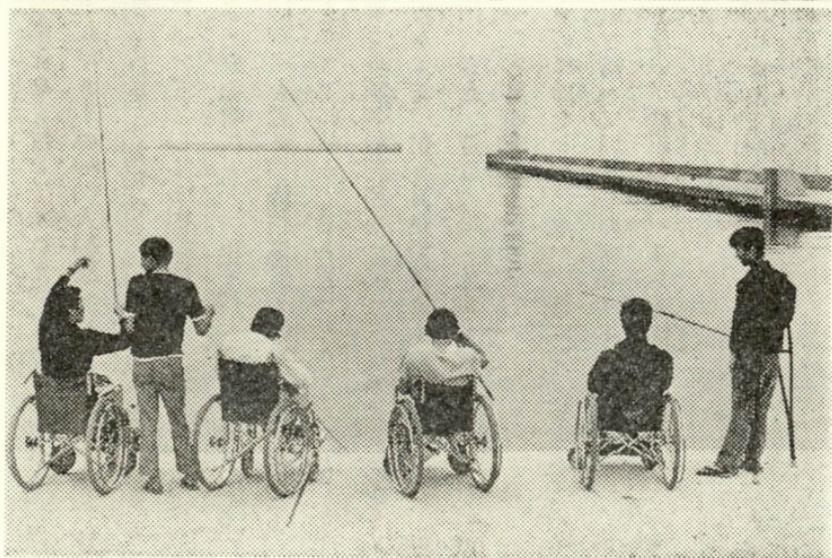
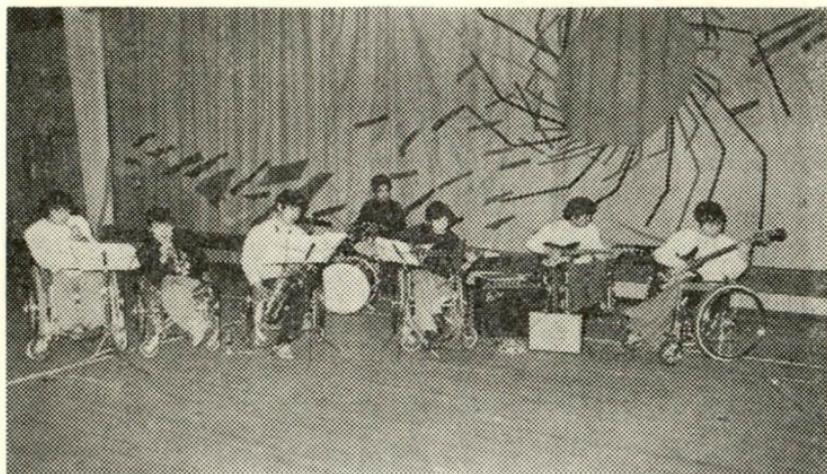
と答える。

設立三周年を過ぎたころの新聞は、つぎのように書いていた。

——それは、ふしぎな光景だった。両足のない人、筋ジストロフィー症や脊髄損傷で下半身マヒの人など、身体障害者福祉法でも一級、二級にあげている重症身障者が、ピアノをひき、身のまわりの掃除から洗たくまでやってのけ、旋盤や木工の職場で、一日七時間半の労働をみっちりやって、ちゃんと給料までかせいでいるのだ。それが、苦役でないことは、この人たちの顔色が物語っていた。車イスをあやつり、脳性マヒ特有のぎこちない体で歩きながら、この人たちは働くことを楽しんでいる。……昼休みの時間、駐車場においた小型のマイカーを、車イスに乗りながら手入れしているこの入所者たちをみると、もはやこの人たちは障害者ではない——という印象さえ受ける。(『朝日新聞』43年12月8日)

——経済的レベルも確実に上がった。夕食が終わると、流行のシャツに着替えて街へ出て行くものがふえた。車椅子でレストランにもボウリング場にも入っていくようになった。機能強化センターではバスケットボールの練習に大声がとび、舞台ではバンドの練習が始まる。集会室では自治会機関誌『むぎ』の編集会議があり、寮からはギターの音が流れ、世帯用宿舎のベランダでは植木に水をやる姿がある。噴水のそばの芝生には風呂あがりのものが涼みながら話しこんでいる。そのそばを、英会話グループのものが部室へ急ぐ。

日曜日は、朝から海釣りに出かけるもの、ドライブに出かけるものも多い。これを新聞記者は、ふしぎな光景と見た。当時は、ふしぎと見るのが常識だった。



車椅子バンド「サニーエコーズ」(上) 釣を楽しむ入所者(下—撮影・和木光二郎氏)
彼らはただ働くだけでなく、それぞれに興味をもっている 太陽の家ではこれらの
光景はごく当り前のことなのだ

バンドは、宮崎マツダの日高市蔵社長が楽器を寄付してくれた。ピアノ、ドラム、ベース、トランペット、サククス、フルート、スチールギターの一〇人編成。八人が車椅子で女性が一人の「サニー・エコーズ」。佐佐木記念体育館の落成式が初舞台だった。のちに若手に引きつがれて、「ヤング・サニーズ」となるが、車椅子のバンドとしては日本最初のものだったろう。

マイカー人口もふえていた。下肢障害者・脊損者にとって車を持つことは夢である。

太陽の家の建設プランに身障者自動車練習所を考え、操縦装置の改良を進めたのも、いずれはアメリカやイギリスのように身障者が車を持てる時代がくると思つたからだ。ところが、別府市の石坂一馬氏が昭和四十二年秋に西日本身障者教習所をつくってくれた。ありがたいことだった。熱心に通つて、たちまち免許取得者がふえ、車を月賦で買うものが相次いだ。彼らの行動半径は一挙に広がり、仕事にも積極性が出てきた。運転技術を生かして一般の会社に就職するもの、のちに福岡市のタクシー運転手になった右足切断者もいる。

だが、彼らの経済力は車を買うだけのものにはなっていない。親に買ってもらえるものはいいが、自力で買うのは大変である。自然、車を持っているものはエリートの派閥をつくることになる。また、事故を起こすおそれがないでもない。駐車スペースも限られている。そうしたことから、車の所有を制限することになった。

「まず貯金しろ。車はいつでも買える。貯金をしてから買うことを考える。遊ぶことより貯金をして、結婚することを考えろ」

預金口座を全員に持たせて、私は貯金を奨励した。ようやく少しは遊ぶこともできるようになり、車の運転も覚えた彼らはよろこびにあふれていた。どうせ一度は死んだと思ったのが、働いて遊べるようになった。この現在を少しでもエンジョイしたい。そういう彼らの気持ちに水をかけるように、私は貯金をすすめた。

毎月の作業手当は事務局保管の通帳に振り込み、払い出しは理由を聞いてからという方法もたった。もちろん、反発を招くことは承知していたが、毎月確実に残高がふえていくことはうれしいものであり、貯蓄を習慣づけることになる。そして、自信をもって将来の生活設計を考えるようになるからである。

結婚　そして子どもが……

昭和四十七年秋、研修センター落成式とともに三組のカップルが生まれた。秋山ちえ子さんと私が仲人になり、加藤厚生省社会局長などの祝福を受けた。一組は脳性麻痺同士、二組は男が脊損、純白のウェディングドレスの花嫁は下肢障害である。そして、翌年には中島盛幸君、洋美さんのカップルに赤ちゃんが生まれた。太陽の家で生まれたはじめての子どもである。私は「陽子」と名付けさせてもらった。

——それは、いままで私の心の奥に眠っていた乙女の情熱を一度に燃えさせたせるようなすばらしい恋の芽生えだった。私の胸はずんだ。いままで味わったことのない幸福感が全身を包んだ。この夢を大事に育てていこう、そしてきっと幸せに結びつけるよう努力したい。

(河津役子)

——ひるやすみあの娘に見とれてみぞに落ち

私は彼女のことを詠んだ詩を口の中でつぶやいてみた。

お前さんの気性の強さにわしゃ惚れた　身体は丈夫でよく働かし　その上気がきくいい女
おれはお前を妻にする。

つぶやき終わると、私の頭は結婚式へと飛躍した。「ようし」これからは二人のために幸せな家庭生活を築こう。そして太陽の家の発展のためにも、みんなと力をあわせて力の限りがんばるぞ!! (工藤元成)

自治会機関誌『むぎ』には、彼らのようこびと感動の告白がある。

昭和四十一年には三組が結婚し、二組が社会復帰した。以後毎年数組が成立して、五十年には六〇組を超え、子どもは八人生まれた。社会復帰後の結婚を含めると八〇組にちかい。

障害別でみると、脊損が男二三、女二、脳性麻痺が男一〇、女一三、ポリオ男三、女一〇、脊椎カリエス男四、女四、切断男三、女四、聾男三、女三、筋ジストロフィー男三、女二、先天性股関節脱臼が女五というぐあいになっている。



結婚一子ども 人並に結婚して幸福になりたいという願いは、いま現実のものになった
60組を超える円満なカップルと8人の健康な子どもが誕生したのだ

141 人生はここから出発する

まず車椅子使用の男が歩行可能の女性を対象に選ぶ傾向があったが、最近では男のエゴは少なくなつた。女性が少ないためもあり、太陽の家のなかでは重度のもの同士でも結婚生活ができることがわかつたからでもあろう。脳性麻痺同士、脊損同士、脊損と脳性麻痺、筋ジストロフィーと脳性麻痺、しかも障害等級が一級同士、一級と二級という重度のものがふえている。また聾は、三組とも聾同士である。そして、これまで別居または離婚のケースはまったくくない。

しかし、問題がなかつたわけではなかつた。設立後数年間に結婚した一〇組のうち三組は、妊娠中絶をした。結婚生活を維持するために夫婦二人の収入がどうしても必要であり、子どもを託児所へ預ける余裕はないからであつた。世帯用宿舎ができる前に結婚したものは、やむを得ず民間アパートを借りた。少しでも多い収入を得ようと社会復帰したものは、いまでも不便な民間アパートに住み、女性は内職をしているものも多い。

一方、太陽の家の作業手当は昭和四十六年を境に、かなりよくなつてゐる。四十二年入所の脊損者の例をとると、四十二年一万二〇〇〇円、四十四年一万五一〇〇円、四十六年四万三九〇〇円（以後ボーナス四ヵ月分）、四十八年六万七〇〇円、五十年七万二三〇〇円と、入所当時にくらべると、ボーナスを含んだ年間収入は八倍ちかくにもなつた。もちろん、これは授産生ではトップクラスの例だが、全体に経済レベルが上がつたことは確かである。そのため四十七年には、四十五年以前の合計数と同じていどの一七組が結婚している。

こうして結婚するものがふえると、また住居が問題になる。世帯用宿舎を建て増す必要に迫ら

太陽の家・結婚状況

昭和	件数	障 害	男	女	計
			41	4	脊 髓 損 傷
42	2	脳 性 マ ヒ	10	13	23
43	5	ポ リ オ	3	10	13
44	5	進 行 性 筋 筋 絞 縮 症	3	2	5
45	2	切 断	3	4	7
46	8	脊 椎 カ リ エ ス	4	4	8
47	17	先 天 性 股 関 節 脱 臼	0	5	5
48	8	聾	3	3	6
49	4	そ の 他	8	12	20
50	6	計	57	55	112
計	61	社会復帰(出所)後の結婚は除く			

れた。また子どもができる以上、無料託児所も開設しなければならなかった。「授産所で措置費をもらっているものが結婚するとは……」という声もはじめは聞かれたが、もはやそうした無理解な批判はなかった。

結婚してはじめて社会的意識に目ざめる点では、健常者より身障者のほうが顕著である。その意味で、私は結婚を原則的に奨励したし、世間の目も暖かいものに変わっていた。彼らは確実に成長していったのである。はじめのころは私に仲人を頼んでおきながら、知らんふりをしているものもいた。挨拶をすることを知らず、またその必要もないと思っているようだった。「ちゃんと頼みにこい、終わったあとにはきちんとお礼にこい」

と、私は叱った。

「ただ、お金はいらん。おれはマンジュウが好きだから、マンジュウでも持ってこい」

それからは、そろそろマンジュウを食べたいと思うころに一箱ずつ届くことになった。

彼らは結婚することによって、世間的な交際や礼儀を身につけるようになった。

り、子どもを育てる楽しみも得るのである。

ただ、子どもの問題は簡単に解決しない。遺伝的危険が予想される場合、けいちよく痙直の激しい脳性麻痺の女性の場合（脳性麻痺児を産む可能性が強い）など医学的に問題があるケースは、本人たちの了解の上で永久避妊とするから、子どもを産むことはあきらめている。

ところが、障害のために子どもはできないと思ひ込んでいる夫婦に子どもができることになり、医学的に問題はなく、経済的にもどうかやっていける見通しがあるのに中絶するということもある。

U君夫婦は二人とも脊損である。だが、思いがけず妊娠した。産科医はとくに問題はないといったが、若い二人には大変なことだった。

私は産むことをすすめた。医学的にも稀れな例だし、中絶させるのにしのびなかった。ただ、子どもを産むことは、立派に育て上げることでなければならぬという話もした。二人は、十日ほど寝ないで考えたが、結局、産まないことにしたといった。

「ほんとうは産みたいです。経済的には労災保険があるから、何とかやっていけると思います。実家で育ててもらふことも考えましたが、やはり、どんなに苦しくても、自分たちの手で育てるべきだと思います。でも、いろいろなことを考えると自信がないのです。子どもが幼稚園や小学校へ行つて、ほかのお母さんたちが着飾つて出かけますね。そんなとき、私たちは車椅子で出かける勇気がありません。子どもがどう思うでしょうか。そういうことを考えると辛くてたまり

ません」

やつれきつた二人の顔を見て、私も何もいうことができなかつた。子どもが学齢に達するころには福祉行政もいくらか進み、世間の障害者を見る目も変わってくるかもしれない。だが、障害をもつ親の心はまた別である。彼らがより強い自信を持つようになる日まで、私たちは待たなければならぬ。

しかし、太陽の家の保育室には、現在零歳児を含めて六人の子どもがいる。六階建本館に開設した無料託児所である。世帯用宿舍も、福祉工場付属のものでき、さらに雇用促進住宅が二棟建設されて一応解決した。

彼らは将来を設計する

「太陽の家が大きく立派になるのはうれしいですが、ぼくはときどきむかしが懐なつかしくなるんです。むかしは人数が少なかつたせいもあるけれど、家族的で心が通い合っていたと思うんです」
あるとき、入所者では最も古株ふるなぶのK君がこういった。私も、ふっとそう思うことがある。

K君は東京パラインピックに出場し、太陽の家設立と同時に入所した。事務職員ゼロの時期、彼が帳簿づけをやってくれた。いちばん最初のメンバーはほとんど社会復帰したが、設立一年以

内に入所したメンバーは残っているものも多い。その彼らがK君と同じような感想を持っている。しかし同時に、生活が向上した現在をよるこんでいることも事実である。よろこびながらも、何か大切なものを失いかけているのではないかという不安が心の片隅にある。だが、そうした反省を持てるだけの余裕ができたことは、やはりうれしいことだ。

これまでの太陽の家は、成長の家でもあった。成長のみを追いかけているという声は決して少なくなかった。事実、振り返ってみるまでもなく、成長につぐ成長であり、戦後日本の一面がそのまま象徴されるようなところがないではない。施設とは名ばかりのころにアメリカ、イギリスの施設を見て、必死に追いつこうとしてきた。そして、ようやくあるていどのレベルに達したのである。

衣食足りて、はじめてGNP至上から福祉優先となる。福祉施設にGNPは無用であり、福祉優先が当然であるという考え方は、関係者の間にも強かった。

「大きくなることよりも、内容の充実を。建物を建てるより、まず質を高めよう」という意見は、理事会でもしばしば出された。だが、質を高めるためには成長が必要なのである。

日本の社会構造、世界の南北問題、福祉重点政策をとったイギリスの国力減退にまで話を広げるまでもないだろう。成長と福祉は、結局、ニワトリとタマゴの関係なのだ。矛盾ではなくバランスの問題であり、社会的福祉はお金と力によって現実のものになる。福祉を理想化し、お金の権力の利用をしりぞける精神主義があるが、そうした幻想的ロマンチズムは一つの自己主張に

はなつても、福祉の充実につながるものにはなり得ないだろう。

——太陽で僕が人間としての充実感を強く味わう時——それは日曜日にあります。七時半ごろ目がさめて、配達された新聞に目を入れながら、八時からのFM放送の、自然とともに、という番組を聞きます。山野にこだまする、あの小鳥や水鳥たちの鳴き声をいながらにして聞いていると、一週間の仕事の疲れや、人間関係のわずらわしさなどが、すっと消えてしまいます。フィナーレは、その時間を一段と満足さすような仕上げです。朝プロです。ゆっくりつかって、人間なんだなあ、生きているんだなあ、と、あたり前のことをさもはじめて認識したように、少し驚きの気持も感じてその時を楽しみます。——そんな単純なことで生命の充実感を味わえる僕という人間がいかに弱くて小さなものであるかということがわかり、赤面します。(『むぎ』第11号、福島文男)

彼らはまさにいま人間を回復しつつある。だから生活向上の意欲は一層はつきりしてきた。

寮についてのアンケート(『太陽新聞』第13号)

- ・現在の寮は住みやすいⅡ三二パーセント、住みにくいⅡ六一パーセント
- ・住みにくい理由Ⅱ拘束しすぎる、規則がきびしい、消灯や点呼が気になる、部屋が狭い……
- ・プライバシーについてⅡ個室が欲しい(絶対多数)
- ・暖房についてⅡ電気コタツの使用を認めてほしい、パネルヒーターが欲しい……

・民間アパートが借りられるとしたら借りたい(女性絶対多数)

・その他子ども扱いはやめて欲しい、当番制(食堂、フロ、電話等)が多すぎる、通勤したい……

生活レベルが向上し、個人的意識が高まる。それだけ太陽の家が発展した証拠であると思いがら、彼らの要求にこたえていく責任の重さも痛感する。

本館・三階建宿舎などはセントラルヒーティングになり、古い寮だけがまだ暖房がないが、問題は暖房だけではない。貯金の強制、酒の禁止も解禁した。酒はそのままたく自由だ。研修センターのスナックにボトルを置いてあるものもあるし、本館六階のレストラン、サンクの窓から別府湾の夜景を眺めながら一杯傾けるものも多い。マイカー人数も五〇名ちかい。そして、入所者・従業員の定期預金額は四五〇〇万円にもなっている。彼らは現在をよりよく生活しながら、将来の確実な設計を考えるようになったのだ。

M君夫婦は、

「とにかく五〇〇万円ためたい」という。

M君は脊損、妻のY子さんはポリオ。昭和四十七年に結婚して、四十九年に男の子が生まれた。二人の作業手当は合計して約一十万円。特別児童手当九八〇〇円がつく。それにM君の労災保険が約五万円。傷害年金一万一三〇〇円というのが収入。支出は、月約五万円。計算上は相当



入所者のマイカー 10年前は全くの夢だったが……

余裕があるが、実際はそれほど楽ではない。Yさんがリウマチの持病で、しばしば長期欠勤するからだ。欠勤の間、Yさんの作業手当はない。そして、治療費・雑費も出ることになる。それにM君はもう五〇歳ちかい。壮年を過ぎてようやくつかんだ幸福である。

「子どものことを考えると、うかうかできない。あと一〇年ぐらいしか働けませんしね。早く貯金をふやして、小さな家でもと思っているんです」と彼はいう。

M君よりはるかに若いものたちも、考え方は同じである。酒は解禁したが、ヤケ酒をおおるようなものも一人もいない。若ものは堅実で、所持持ちはマイホーム型である。

かつてのような無一文の仲間意識は薄れ、個人的生活意識は旺盛おちせいになった。

だから、K君のように古株で独身者は、ときどき淋しくなるらしい。私もまた何となく複雑な感情が湧いてくるのである。だが、家庭的雰囲気をただよわせているカップルや、作業衣を着替えて夕暮れの街をマイカーで

定時制高校に向かう若ものを見ると、やはりこれでいいと思う。彼らは太陽の家に行くつかの不満を持っていても、将来に大きな希望を持っているのだから。

第六章——より深くより広く

機能活用のために

太陽の家の入所者は、一、二、三級の重度障害者が常に七〇パーセントを超えている。とくに多いのは一、二級である。病因別では脳性麻痺がいちばん多く、ついで脊髄損傷、脊髄性小児麻痺。車椅子使用者が全体の約四〇パーセントである。また、太陽の家には設立当初から介護人は一人もいない。どんな重度障害者であろうと、働くために入所したのだから、日常生活はすべて自分の手でやる。そのための環境づくりと労働管理は、先進諸国の施設に学び、九大・青木研究室、日大・木下研究室、東大・生産技術研究所などの協力を得て、可能なかぎり追求してきた。たとえば――、

各居住区、作業棟・工場には原則的にステップがない。道路や建物の高低差はスロープ、エレベーター、動く歩道などで連絡している。例外として、二階建宿舍と三階建宿舍の二階と三階をつなぐ階段があるが、これらの上階には歩行に障害のないものだけが居住している。他のすべての場所は、車椅子、松葉杖で自由に動きまわることができる。

廊下やスロープは、車椅子がすれちがうだけの幅があり、すべらない材質を用いている。スロープには小休止ができるように遊び場があり、廊下などの各コーナーには所内電話器を置いてある。

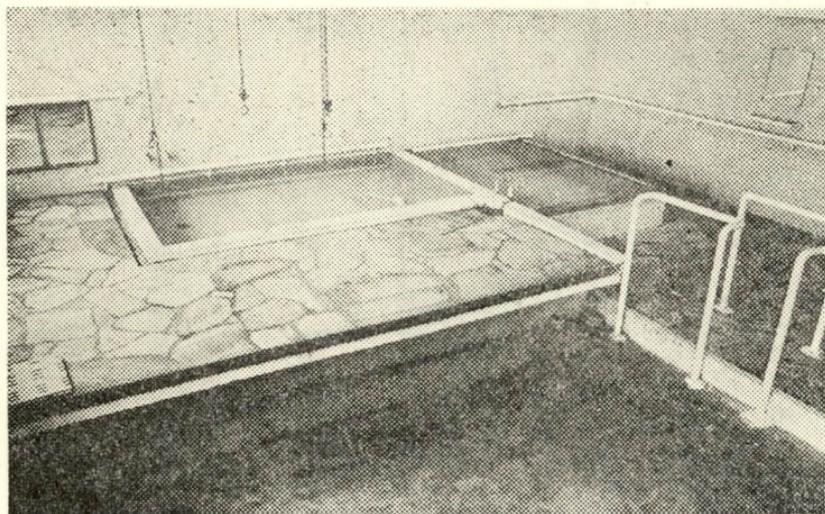
居室は単身用が二人一部屋。ベッドの高さは車椅子のシートレベルに、机は車椅子に乗ったまま膝が入る高さに、棚や洋服ダンスは楽に手のとどく範囲につくっている。電灯はリレー・スイッチで床上で簡単に操作できる。世帯用は1LK、2LK。リビングキッチンと畳の部屋の高差は車椅子のシートレベルに合わせ、トイレ、ベランダはゆったりとスペースをとっている。

洗面所、洗濯場はどんな障害のものにも使いやすいよう、洗面台の下を大きくあけ、棚や鏡を低く取り付け、水道蛇口はテコ式にしている。

便所は手すり、つり環を取り付け、入口と出口は別の一方通行。作業棟の便所は男子用が外回り、女子用が内回りとして組み合わせている。

浴場は車椅子使用者と他の障害者の入口を別にし、それぞれが入浴しやすいようにしている。

洗い場は車椅子のシートレベルと同じ高さで、角の部分を軟質樹質でおおっている。また、脊損



設備が整った温泉浴場

者の褥瘡じょくそう（長期間同じ姿勢をとっている場合に特に圧迫を受ける部分に発生する瘡症）を予防するため、洗い場には鏡を取り付けてある。この鏡でお尻をよく見て、褥瘡の徴候がないかどうかを確かめてからスロープをすべって浴槽に入る。浴槽を出るときは手すり、つり環の助けを借りる。湯は含重曹塩分泉。リュウマチ性疾患、運動器障害、創傷、火傷、皮膚病、婦人病に効き、飲めば胃腸病、糖尿病にもよい。

作業棟・工場の設計、レイアウトは安全性と能率性を考え、採光・通風をよくし、床面を平坦にし、機械を機能的に配置している。木屑が出る木工機械には収塵機のダクトを直接取り付けている。また、本館作業場、福祉工場は空調設備が整っている。

機械工具は作業員の障害に合わせて改造、最も使いやすい状態で使用している。

金工部で使っていた三五トンプレスは足踏みスイッチだったが、脊損・下肢損傷者が操作できるように両手スイッチにかえた。操作ボタンは両脇につけられ、双方を同時に押さなければ作動しないため安全である。

木工部では、ボール盤やプレッサーの上下に動くレバーや、足踏みペダルを水平に動く手で操作するレバーにかえた。金工部のメジャー組立工程でも、巻取機械の操作を肘で行なうようにした。

第1プラスチック科では、五オンス射出成形機のスイッチ盤を自由に移動できるようにした。また四肢麻痺者でも機械を操作できる呼吸式自動工作機も開発した。これは呼吸の圧力でスイッチを開閉し制御回路を操作するもので、第一号機は七動作が可能だった。

日常生活用具、衣類、車椅子、自動車などの改良も進められた。とくに、日常生活用具の改良されたものは自助具として、後に展示室を東京に置くことになるが、その代表的なものは、指関節の動きのよくないもの、握力の弱いものでも使用できるように、スプーンやフォークのにぎり太くし、指のきざみをつけ、あるいは手首に装着するようにし、腕が上がらないものには柄を曲げ、あるいは穴あきのゴルフ練習ボールに鉛筆を差し込んで使う、などである。

衣類はボタンのかわりにフラスナー、ベルクロ（はり合わせ式フラスナー）を使う。松葉杖使用者用としては、外転しやすいように腋の下を広くし、皮パッドを当てる。義足など補装具をつける場合は着脱しやすいようにズボンの内側にフラスナーをつける。コルセットを用いる女性の

ワンピースは前開きにする。

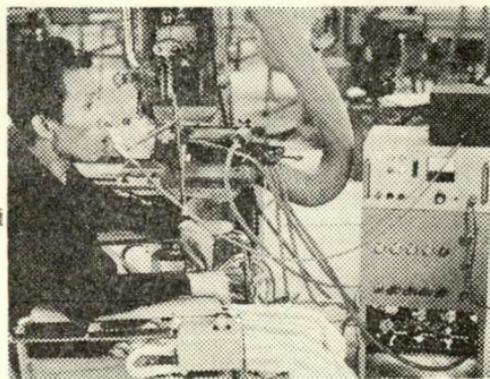
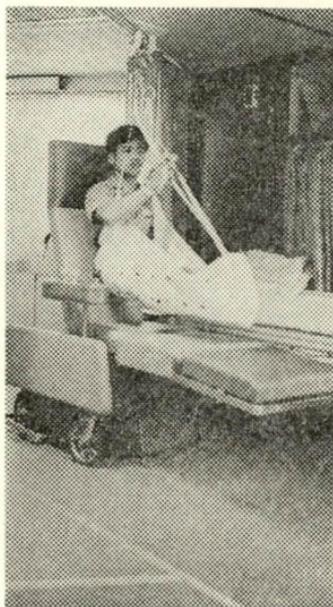
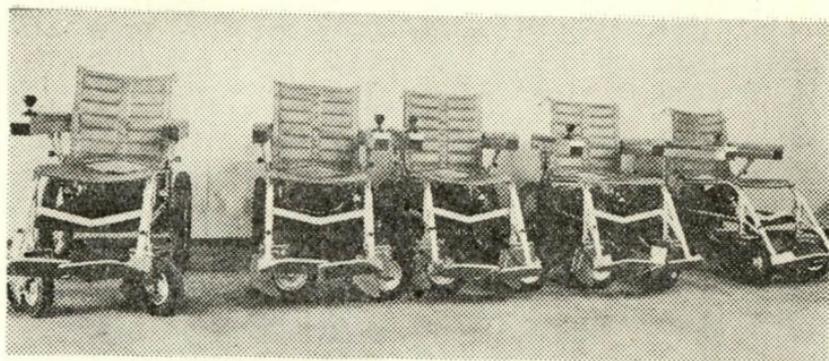
また、股関節、膝関節ひざの障害者用に、不自由な足を伸ばしたまま座れる椅子を考えた。車椅子は和室用のものを作った。これらはごく初期の作品である。後には電動車椅子の研究が主体になった。

自動車は、ノークラッチ、パー式アクセル兼ブレーキ、片手ハンドルのためのハンドルノブがすでに実用化されているが、さらに乗り降りを容易にする回転式シート、各部の呼吸式操作などを研究。長距離ドライブテストも行った。

入所希望者が持っている残存機能はどのていどなのか。どの職種に向くのか。彼らが安全に能率的に働くには機械をどう改良し、どうレイアウトすればいいのか。過労と合併症をおこさないためにはどうすればいいのか。日常生活を楽しく行なえるようにするにはどんな配慮が必要か。

こうしたことを科学的に検討することは「別府善意工場設立趣意書」にも書いたように、当初から考えていたことだった。また、この研究は障害者が働くためには欠かせないことであり、日本ではまったく未開拓といつてよい状態だっただけに、絶対にやらねばならないことだった。

はじめに「身体障害者労働研究所」の看板を出したのは昭和四十三年。お年玉年賀はがきのプールと、佐佐木記念体育館が完成して、三階建宿舎の一隅に研究のための小さなスペースを持った。野尻義孝室長が一人で頑張った。チームとしては私と畑田君、河野君でそれなりの研究成果



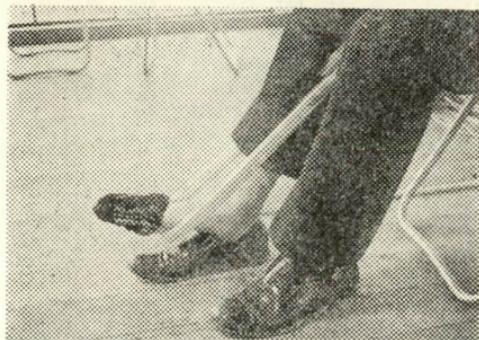
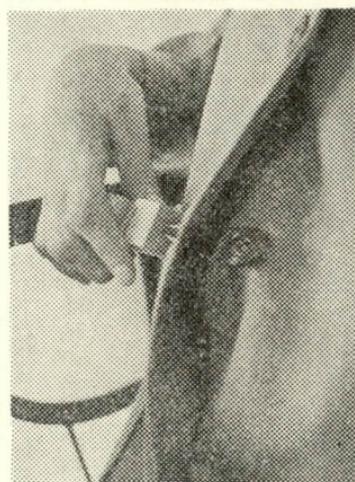
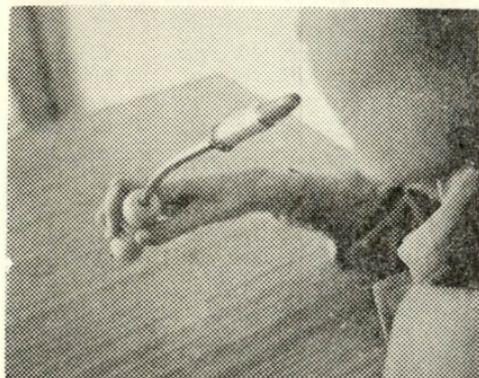
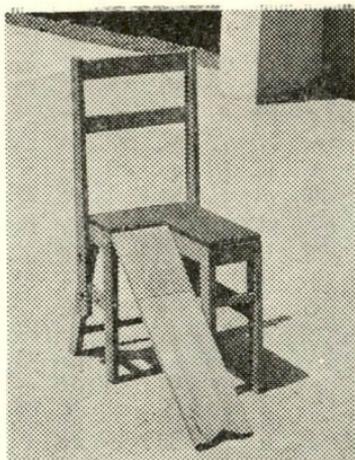
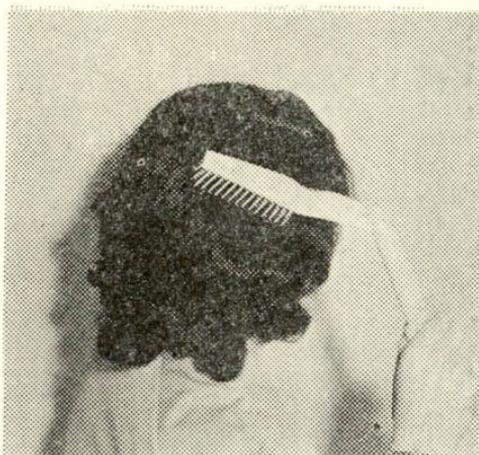
生活上、作業用に改良された機具類

電動式車椅子（上）

肘スイッチ（右中）

呼吸式自動工作機（右下）

リフトつき車椅子（左）



開発・改良された自助具類

長柄つきブラシ (左上)

長柄つき口紅 (左中)

靴下はき (左下)

特殊椅子 (右上)

ボタンかけ (右下)

をあげつつあったが、外からの目は決して暖かいものではなかった。

「施設で遊びをやっている」というような噂が私の耳にも入ってきた。

たしかに、授産所^{ウチノカ}という従来の枠にはまった身障者対策からみれば、労働研究所をつくるということなどは施設運営の道からはずれるものだったろう。

そういうものほっと他のどこかがやるべきことなのだ。しかし、どこもやらない場合はどうなるのだろう。身障者の雇用を促進すべき厚生省、労働省が国立研究所を建設するのがほんとうだといっても、当局にその構想のかけらもない場合、おとなしくただ待っていればよいのだろうか。

太陽の家が開所した当時、《日本人的機能活用センター》という小さな標札が門に打ちつけられていたのを記憶している人は少ないかもしれない。日本人の機能活用ではなく、日本の人的機能活用という意味だが、感じが固すぎるといふこともあり、水上勉さんに命名してもらった「太陽の家」が正式名称になったのだが、機能開発^{ウチノカ}ということは私の当初からの大きな目的だったのである。

当時、私の意図を理解し、積極的な協力の姿勢を示してくれた人は少なかったが、その一人が労働大臣官房長などをしていた岡部実夫氏だった。

岡部氏は私をはじめてストークマンデビルへ出かけたときの大使館書記官で、いろいろと面倒をみてくれた関係である。

脊損者の褥瘡とセックス

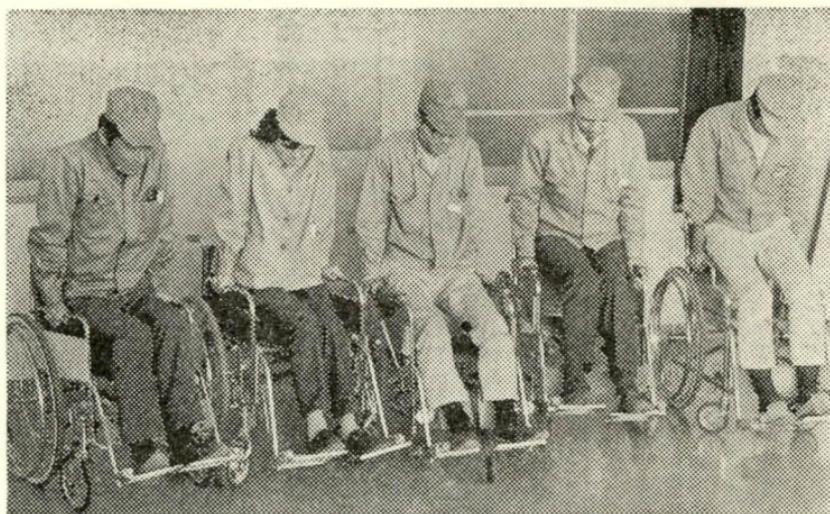
労働研究所は入所者の生活労働能力、体格計測、体力（筋力、筋持久力）測定、手の到達範囲測定、疲労と生産能率の研究、褥瘡^{じよくそう}予防の研究、生化学・心理学的研究、新しい補助器具、設備工作機械の操作システム、車椅子の改良開発、脳性麻痺者の就労実態調査などを行ない、昭和四十六年秋に「身体障害者機能開発センター」となつてからは一層充実した研究を進めている。

まず、入所希望者に対しては、からだの機能をくわしく調べる。

タオルをしぼれるか、紐を結べるか、ネクタイを結べるか、ボタンをかけられるか、箸を使えるか、パンにバターがぬれるか、歯をみがいたり髪を洗ったりできるか、あぐらをかけるか、寝返りをうてるか、車椅子の場合、自分で排便できるか、車椅子で坂道を登れるかなどを検査し、その結果をもとに生活や労働のカルテをつくる。

プラスチックの組立式機関車を使って行なうメカニック・トレイン・テストもある。分解し組立てる時間を測定するものである。

こうして、どの職種に合うかが決定され、必要な場合は特別な補助具や補助装置を作り、日常生活がスムーズにできるように指導する。



ブッシュアップ休憩 褥瘡防止のため2時間に1度尻を持ち上げさせる

機能テストの他に心理調査も行なう。

一般に身障者は長期の病院生活や生活の不安などのために、心理的に屈折していることが多い。とくに一度も集団生活をしたことがなく、働いたこともなかったものは、神経症の状態にあることが多い。そうした入所者には心理的指導をする。

また、入所者についてもしばしば調査する。身体・心理・神経感覚の疲労については作業前と作業後にチェックして、その結果にもとづいて配置転換、工作機械の改良などを考えるのである。フリッカー値の測定、血液と尿の検査、レスピロメーターによる呼吸数、肺活量、最大換気量、酸素消費量の測定、テレメーターや心電計、脈搏計による心拍数の測定、血圧の計圧なども行なう。

車椅子使用の脊髄損傷者は下半身の知覚がないため、同じ姿勢を長時間続けると床ずれを起しやす。お尻の部分に起こることが多いが、この

褥瘡は知覚がないため進行が早く、骨にまで達して命とりになることがある。

また、同じ姿勢をとり続けることは、尿路感染症や尿道結石を起こしやすく、下半身の柔軟性を失わせる。褥瘡や合併症を起こすと長期に入院することになるので、障害者自身が気をつけなければならぬが、ついうっかりしていて、気がついたときは症状が進んでいることが多い。

「みんな、尻を見せろ！」

と、私が怒鳴っても間に合わない。

褥瘡や合併症を防ぐには、足が完全に萎えたものも、松葉杖などでときどき立つことが必要だが、車椅子の生活に慣れるとそれが面倒になる。そこで、意識的にときどき尻を持ち上げることが必要になる。

車椅子のシートを透明プラスチック板にして、床に鏡をおき、皮膚の貧血状態や圧力のかかる部分を連続的に観察し、電子体温計で皮膚温度を測る。こうして二時間に一度尻を持ち上げると褥瘡が予防できることがわかった。そこで、車椅子使用者には尻を持ち上げる、ブッシュアップ休憩^{ブッシュアップ}を作業スケジュールに組入れた。その結果、褥瘡による欠勤者はほとんどなくなった。

下半身麻痺者には収尿器の使用と、結婚予定者にはセックスの指導もする。

これまで脊損者は性行為が不能と考えられてきたが、かならずしもそうではない。

刺激を与えるある部分——私は、ピストルの引金^{トリガー}と呼んでいる——を発見すれば、数分間の行為は可能なことが少なくない。その部分は、仙骨^{サッコク}や足の裏など、個人差があるが、一度発見す

ればその部分を刺激することで反射神経が能力を与えてくれる。

また注射によっても一時的に可能になる。もちろん、遺伝上の問題がある場合は、逆にコントロール方法の指導なり、手術をすることになる。

こうした場合、理事長の私や常務理事の畑田君が医師であることは、非常に都合がいい。日常の健康管理は医務室で行なっているが、診療・治療の態勢はいつでもとれるからである。

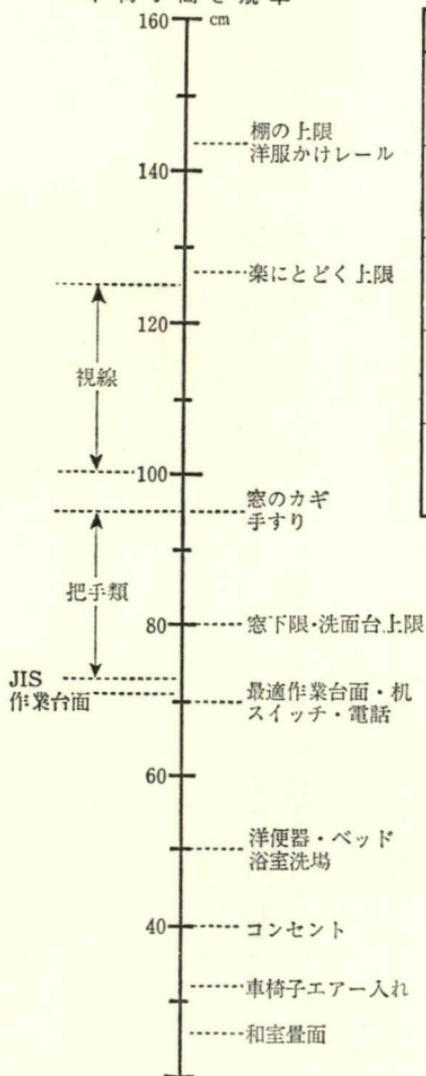
また、太陽の家には、テトラ・エース^gという小さな建物があるが、これは四肢麻痺者のためのモデルハウスである。

完全に四肢が麻痺した重障者が、人手をわずらわさずに日常生活ができるかどうか。大変むずかしいことだが、科学の力であるといどは可能なのではないかと考えてみた。東大生産技術研究所の森教授、池辺陽教授が中心になってつくったが、完璧かんぺきなものとはいえない。近代科学の粹を集めるとなると、費用が膨大なものになるからである。

テトラ・エースは、あゆみの箱から三七六万円の研究費をもらったが、総工費は約二〇〇〇万円。ナショナル住宅建材などの協力で完成した。

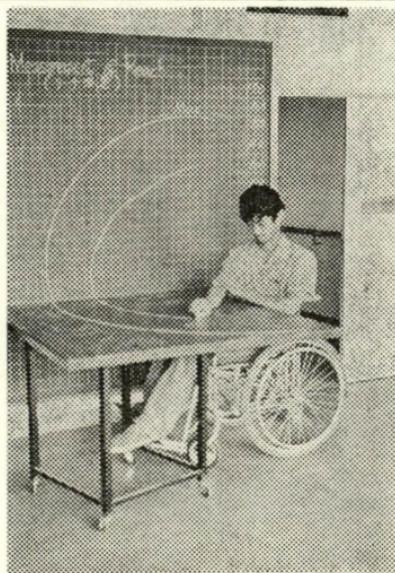
機能開発センターの研究に対して、これまで自転車振興会（二五五二万円）、三菱財団（二四五〇万円）、日本船舶振興会（六〇〇万円）、中央競馬会（二五〇万円）、大分県（年間二〇〇万円）、労働省（八〇万円）、日本肢体不自由児協会（二〇万円）などの補助金を得ている。今後、研究はより深く広く進むことになるだろう。

車椅子高さ規準



病因別到達範囲の平均値 (cm)

病 因		水 平	前 方	側 方
進行性 筋 ジストロフィー	最大	72	84	67
	最適	43	67	30
カリエス	最大	76	80	70
	最適	48	58	34
脊 髄 損 傷	最大	77	87	75
	最適	35	69	40
脊 髄 性 小児 麻痺	最大	74	81	68
	最適	51	64	40
脳 性 小児 麻痺	最大	73	82	66
	最適	49	65	39



手の到達範囲測定

機能強化でファイターに

障害者が残された機能を最大限に發揮するために、いろいろな検査・研究・開発をするのが「機能開発センター」だが、同時に残された機能を強め、失った機能を回復するための訓練をするのが「機能強化センター」である。

まず、昭和四十一年十月に、オリンピック女子水泳選手高橋栄子さんを迎えてプール開きをした。この二五メートル四コースの温水プールは、幅が五コース分ある。プールの縁から底まで手すり付きのステップとスロープがついているからである。

また四十三年二月にできた佐佐木記念体育館では、リハビリテーション訓練、卓球、バスケットボールなどができる。このセンターは五十年六月の第一回フェスピックの会場になり大改装をした。

私は一九六二年の第十一回国際ストックマンデビル大会以来、多くの日本選手とともに身障スポーツに参加してきたが、四十一年九月には別府で車椅子スポーツ大会を開いた。

第一期工事が完成したばかりの太陽の家に、約一〇〇名の脊損青年が全国から集まった。満足なスポーツ施設もない九州の一施設にこれだけの選手が集まったことは驚くべきことだったが、

東京パラリンピック成功のあとでもあり、身障スポーツの組織づくりと一般社会の理解が進みつつあったことも事実だった。

しかし、選手のはほとんどは依然として病院・療養所に毎日をすごしているものに限られていた。私は、彼らに太陽の家の働く姿を見てもらい、労働意欲を刺激したいと思った。また、同時に太陽の家の入所者がスポーツに関心を持つようになることを期待した。

入所者のあるものは生まれてから一度もスポーツといえるものの経験がなく、経験のあるものもそうした生活をまったくあきらめきっていたのである。

東京パラリンピックの前年、オーストリアのリンツで行なわれた第一回国際身体障害者競技大会に、私は別府から高崎謙一君など五名で参加したが、高崎君は太陽の家の設立と同時に入所、木工科の主任になった。右上腕切断者だが、足の指にノミをはさんで立派な木工作品をつくった。その彼が、癌におかされたのは別府で車椅子スポーツ大会を開いたころだったが、彼は病院のベッドで、

「もう目が見えない」と訴えながら、

「先生、身障者だとバカにされていたのに……ほんとうによかった」といつて死んでいった。

生まれてはじめてヨーロッパへ旅をしたこともうれしかったにちがいない。外国の障害者と競技をして銀メダルをとったこともうれしかったろう。太陽の家の設立に参加したことも、死出の

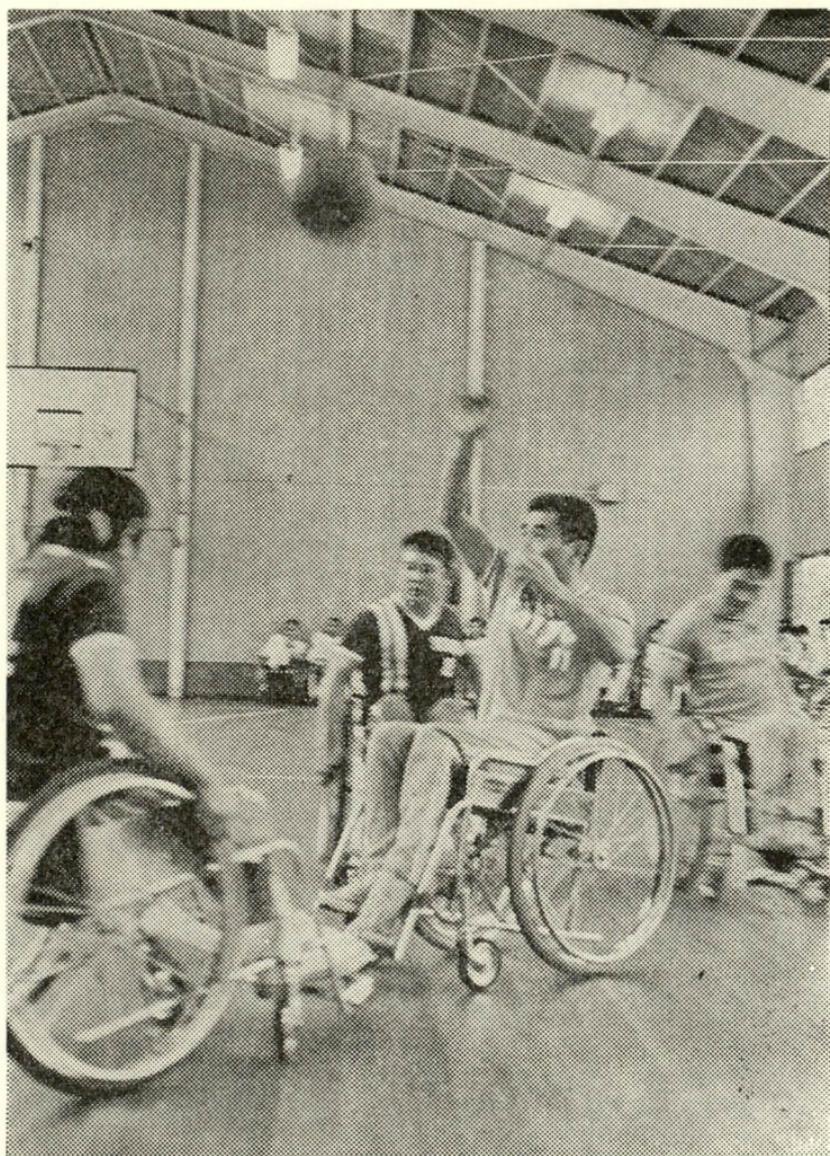
土産みやげになったかもしれない。多分、彼は生きるよろこびを取りもどして死んでいったことだろう。死の床からの彼のことばは、

「身障者はスポーツによって生きかえる」ということだった。

一九六九年七月、ウィーンの世界身障者競技大会と、ロンドンの第十八回ストックマンデビル大会に、日本代表選手六名のうちの二名が太陽の家から出場した。江藤秀信君と森崎一晴君で、江藤君は日本体育大学に在学中、鉄棒の練習中に手が放れ、落下して脊損になったという経歴をもっている。

二人は金メダル二個、銀製花瓶二個を土産に帰ってきたが、何より大きい収穫は、生きる自信だったろう。

——最後のスラロームは、ぼくの最大の力を出し慎重にやり、四四秒のタイムでウィーンについて一位になれ、ぼくは日ごろの練習した実力で一位を取り、こんなにうれしいことはなかった。自分自身の力とみなさんの暖いご声援のおかげと思ひ、うれしくて涙がこぼれるほどジンとしました。メダルをかけてもらうときは、最高の国際大会で優勝したこのよろこびをすぐ家族や太陽の家のみなさんに知らせてやりたい気持ちでした。森崎君は水泳で三位に入賞し、この日はほんとうに活躍し、正直にこれでやっと太陽の家に帰れると思ひ安心しました。(『むぎ』第7号、江藤秀信)



全国車椅子バスケットボール大会

——閉会式はエリザベス女王が特殊種目優勝チームに楯を贈り、われわれ日本選手の試合を見学のものち帰られた。その後レセブションが夜中の三時ごろまで続き、寝ることもできなかったが、連日、全然といってよいほど障害者であることを感じなかった。われわれはスポーツにおいて精神を充実、大いに楽しみ、意気込みと勇気と人間成長というものを強く感じたわけです。(『むぎ』同号、森崎一晴)

一九七二年のミュンヘン・オリンピックではハイデルベルクでパラリンピックが開かれ、私と田中慶博君、梅田幾世君が太陽の家から出場。国体と同時に行なわれる身障者スポーツ大会、全国車椅子バスケットボール大会にも毎年参加している。

昭和四十九年春、中国スポーツ視察団が太陽の家を訪れたが、おそらく身障者スポーツに関心があつたことだったろう。

しかし、

「ピンポンやバレーボールも結構ですが、身障者スポーツの交流をしたいですね」

と私がいったのに対して、はっきりしたことが返ってこなかったのは残念だった。

だが、私たちのスポーツへの情熱は太陽の家を発展させ、また第一回フェスピックの開催への道を切り開くことになった。

国際交流と情報提供

グッドウィル・インダストリーズ副社長のトラベソン氏を迎えたとき、太陽の家は生まれたままの状態だった。アピリテイーズ社のビスカーディ氏が来たときは、第一期工事を始めていた。第三期、第四期工事が完成した直後に韓国聖世再活院の南認均院長が一〇名の身障児を連れて訪れた。そして昭和四十六年夏、私はグッドウィルのインターナショナル代表者会議に招かれ、太陽の家がアジア・リハビリテーションセンターに指定された。

現在、グッドウィルの、G旗は、太陽の家の、太陽と麦旗に並んで、六階建本館屋上にひるがえっている。

また、昭和四十八年に私は、身障者の国際的機関リハビリテーション・インターナショナル（TSRD）の諮問委員会ICTA（本部はストックホルム）の委員に任命された。

このICTAは現在、身障者技術援助委員会として独立し、主に自助具の研究開発をしているが、太陽の家の機能開発のための努力が国際的にも認められつつあったといえるだろう。

太陽の家を訪れる見学者は非常に多くなった。一時は団体旅行バスが連日のように乗りつけ、別府観光の目玉になる気配すらあった。

もちろん、身障者は高崎山のサルではない。おもしろ半分で見られることは歓迎できないが、一人でも多くの人に理解を深めてもらうきっかけになることは、望ましいことに違いない。

だが、そのために職員は案内に忙殺され、本来の仕事が手につかないことも多くなる。やむをえず、廊下に矢印と番号を書き込み、パンフレット片手に自由に見てもらい、映画を観てもらおうという方法をとった。

そして、施設、地方自治体、企業、研究機関などからの訪問者はますます多くなった。

トラベソン氏やビスカーディ氏が訪れたころは、応接室はおろか、満足な椅子さえもなかったが、福祉工場も発足した以上は、社会に対する啓蒙的役割をあらためて自覚しなければならなくなった。

元来、太陽の家定款には第二種社会福祉事業として、「宿泊所、憩の家の設置経営」を定めている。アメリカへ留学した丸山一郎君が、むこうの施設を見学に行って、

「日本のベープ（別府）にも立派な施設があるよ」

といわれたというが、当然、外国からの見学者がふえることも予想できた。

昭和四十七年九月十五日 研修センター完成（七三四平方メートル、日本船舶振興会か

ら二八五六万円の補助金による）



国際交流 韓国の子どもたちが研修にきた

旧小野田セメント保養所——満足な事務机もなく、雨が洩り、床がギシギシ鳴り、その床をせつせとみがいた旧管理棟が姿を消した。木造モルタルの古ぼけた建物は、私たちが感傷の気分をひたる間もなく簡単に取りこわされた。

新しい研修センターは、和室三、洋室二の宿泊施設と研究会議室、娯楽室、図書室、喫茶室とロビーがある。

喫茶室、いいいゝは民間業者に委託。道路に面しているの
で、地域の住民にも利用してもらえようように考えた。

そしてこの研修センターは、つぎつぎに外国からのお客、研
習生を迎えることになる。

フランスのP・ローピン、台湾の姚卓英夫人、韓国の全福点
女史、オーストラリアのセンターインダストリー理事長N・
マックレオド氏、アメリカのC・プライアンとドーマン博士、
フィリピンのE・ララ、R・レッダ、G・パドリゴン、西ドイ
ツのK・ワイセンク博士、ニュージーランドのジェフアーンソ
ン博士、オーストラリアのA・サミュエル博士、タイのナプタニ
ヤ博士、上智大学のJ・ベジノ教授などである。

また、韓国聖世再活院から五人の研修生も預かった。アジア

のリハビリテーションセンターとして、近隣諸国にできるだけのサービスをする義務があると思うからである。フィリピンなど東南アジアの国からは、

「ぜひ太陽の家をわが国にもつくってほしい」という要望も出てきた。

もちろん、まだそういう段階にはない。だが、身障者の機能開発や生産能力などについてのアドバイスを、研習生の受入れはできると答えられるようになった。

太陽の家の映画プリント（英語版）も、ニューヨークのメディカルセンターなど多くの関係機関へ出ていくようになった。

そのためかどうか、アラバマ州のウォーレス知事から「名譽中佐に任ずる」という辞令が私あてに送られてきたりした。ウォーレス氏は大統領選挙のさい狙撃されて脊損者になり、車椅子生活を送るようになったためだろう。

いずれにしても太陽の家をよりよく運営していくだけでなく、身障者と関係者全体に対して、できるだけのサービスをすることが必要なのである。

そして、そのための事務所を東京に開くことになった。

昭和四十九年五月二十九日 サン・インフォメーション・センター（東京都新宿区番衆

町）を開設

井深大さん、秋山ちえ子さん、東京都養育院付属病院の荻島秀男リハビリテーション部長、東京コロニーの調一興氏のほか、ボランティアの人たちが協力してくれることになった。

「日本にもICTAが欲しいわね」

と、秋山さんがいったのがきっかけである。

厚生省も理解してくれて、印刷費、海外の自助具購入費として年間五〇〇万円の補助が出るようになった。リハビリテーション機器メーカーも、製品展示という形で協力してくれた。

現在、事務所はICTA日本支部として、身障者に必要な自助具の研究・開発・展示・指導、ニュース発行、専門相談などを行っている。

小さなセンターだが、ここに展示してある自助具を新聞が紹介してから訪問者も多くなった。やはり無理をしながらも働きかけていくことが必要なのだろう。

それにしても身障者にとって適切な情報が、あまりにも少なすぎるのである。

第七章——そしていま主体性を

これでフルコースだ

福祉工場の業績は予想以上だった。太陽の家を設立したのは、自活できる、福祉工場をつくることが目標だったのだから、その意味では私は満足すべきかもしれない。

しかし、福祉工場部門へ移ったのは入所者の約三割。授産部門は比較的生産性の低いものが多くなるという結果にもなった。

新しく始まった仕事もあるが、一方では引き揚げていく企業もあった。また、入所者の障害・能力に適した職種は常に開拓する必要がある。石油ショックや不況によって企業自体がダウンする場合、授産施設はまさに弱者である。

木工部にサンアップ荒尾作業所と伏野唐木作業所を導入したのは、昭和四十六年暮れだった。サンアップは神棚の製作。唐木は紫檀や黒檀、花梨などの高級家具である。いずれも景気の動きには左右されにくい。派手ではないが堅実な仕事である。

サンアップは一四名で日産約四〇台。唐木は三一名で日産約五〇台と、一応の線まで伸びた。

また、四十九年暮れには市内の釜我つげ工芸が入った。つげの櫛や、ブローチ、ペンダントなどの細工物である。

福祉工場・オムロン太陽電機のすべての部品をつくる応用資材科も、四十七年秋に発足した。単線のハンダづけ、トランジスターにチューブを通すなどの仕事を約二〇名が受け持っている。

ソニーのラジオづくりも四十九年夏に始まった。これは、ようやくモノになってきたところである。そして特産科O・S・Kも始まった。大分県特産のシイタケを包装する。

これらの製品は、各地のマーケットから消費者の手に渡っているはずである。たとえば東京のデパート、スーパーを歩いてみるなら、電気製品売場にはシャープの電気ゴタツ、オムロンの電卓、ソニーのラジオがある。家具売場には、一台数十万円の唐木家具、サンアップ神棚がある。日曜大工の売場には、田島のメジャーがある。アクセサリー売場には、つげのブローチがある。そして食料品売場には、O・S・K印のシイタケが並んでいるはずだ。

また、四十八年秋に園芸科が発足した。

この年はみかんが豊作で大暴落したため、みかん農家の転業が多かった。そうした話の一つが持ち込まれた。農業用地だから住宅地として切り売りできない。そのため、地価は割安である。

「これはぜひ買いたいですね。みかんづくりは私が指導しますよ」

と、宮野茂博事務局長は乗気をみせた。彼は宮崎高等農林（宮崎大学）出身である。

私もぜひ買おうと思った。オランダのアルンヘムにある身障者の町ヘットドルプを訪ねると、地域の子どもが道を案内してくれる。

この町は一般の町とまったく同じであり、広大な林のなかに住宅が点在している。住宅にはハウスナンバーが打ってあり、電話帳にも記載されている。重度障害者も電動車椅子で会社に出かけ、市場で買物をしている。当然といえば当然だが、太陽の家をつくるのに気違い扱いされていたころの私には、現実の世界とは思えなかった。しかし、太陽の家の基礎ができていま、この当然すぎるほど当然の計画に挑戦すべきなのである。さもなければ、私は責任を果たすことができないと思った。

さいわい、財政的には多少のゆとりがあった。そして、幾度かの交渉のすえ、別府湾を見下ろす緑の山の一部が手に入った。

昭和四十八年八月 杵築市塩屋崎の一・八二ヘクタールを取得。

昭和四十九年三月 同所一・四六ヘクタールを追加取得（合計価格、三四〇〇万円）



みかん畑 別府湾を見おろす緑の山を入手 農林学校出の宮野事務局長の指導でみかんが実をむすんだ

手入れがよくないため粒は小さいが、黄色いみかんはたわわに実っていた。まず、入所者の食卓に出すことができた。従来の流れ作業に適さない重度の脳性麻痺者を中心に、季節労働者を導入するなど合理化をはかれば、やがては市場なりジュース工場へ出荷することもできるだろう。全従業員が交替で収穫をするのも、気分転換になるかもしれない。さらに先のことを考えれば、福祉工場の従業員の定年後の職場にもなる。一部を住宅地として彼らに分譲することも可能だろう。また、もっと先のことをいえば、太陽の家の共同墓地をつくってもいい。これはつまり最終コースで、フルコースだ。

一方、五十年夏には沖繩海洋博へ、アクアポリスのエスカレーター用の電動車椅子二〇台を送った。電動車椅子についてはかねてから研究を進めていたが、五十年六月はじめ、準備段階としての試作が始まった。七月には、通産省の産業技術審議会が、

「これまで遅れていた電動車椅子などの開発に取り組む」と発表した。これは通産省委託研究の福祉機械モデル工場としての第一号製品である。

金工部・田島が四十九年にJIS工場に認定され、木工部の杉尾良一君がアピリンピック（全国障害者技能競技大会）に入賞するなど、太陽の家の生産技術度は専門家の評価も高い。

福祉工場設立時に熊本コロニーから飯川勉君を迎えて、事務局長以下の体制が整ったことも安定度を増した。そして、何よりも入所者、従業員が真剣である。福祉工場には別府商工会議所か

ら「加入してはどうか」ともいわれている。従来も、施設とはいえ四十一年以来別府でいちばん大きな、工場、なのだ。といって、すべてが満足できるものでないことはいうまでもない。

入所者・従業員の生活レベルの向上、より付加価値の高い仕事の開発・導入など、これからがいよいよ本番である。

外へ向かって伸びよう

四十八年十二月の『太陽新聞』（第5号）は、「ことしの十大ニュース」を載せた。それを紹介すると――、

1 成人意見発表 一月十五日、別府市の成人を代表して、オムロン太陽電機の御前照夫君が、国際観光会館で行なわれた成人式で、若人の誓いを力強くのべた。

2 新しい自治会・むぎの会 結成 福祉工場発足とともに旧自治会、木ノ芽会、の有力メンバーが大量に退会したため、運営が問題になっていたが、授産生、福祉工場従業員、事務局職員全部による新しい、むぎの会、が結成された。

3 『太陽新聞』発刊 むぎの会広報分科会が中心になり、各職場記者をもうけて『太陽新聞』を発行する。

4 作業員制度発足、社保加入する 四月一日から作業員制度が発足。授産生にも社会保険が適用されるようになった。これは労働基準法にもとづいて運用されるわけで、授産施設としては画期的なことである。

5 各種目で好成績、第十三回県体 六月三十日、七月一日両日に太陽の家選手は陸上、卓球、水泳、バスケットで全力を発揮した。金メダル一九個、銀メダル三個、銅メダル二個。また十月には千葉国体にバスケットチームが出場したが、昨年優勝の長野チームに敗れた。

6 ますます発展を、福祉都市運動 七月、別府市は国の身体障害者福祉モデル都市に指定された。太陽の家ではすでに、福祉都市を促進する会が活動しているが、一層活発な運動が期待される。

7 センターインダストリーズより来訪 九月、オーストラリアのセンターインダストリーズ理事長、支配人が来訪、「脳性マヒ者の職業更生について」の講演を行なった。「たがいに手を結び、障害者の自立、人間としての幸福をかちとるよう努力していきましょう」というメッセージである。

8 世界的に海外から研修 昨年九月に研修センターが設置されてから、国内だけでなく海外からも多くの研修者が訪れた。

9 新しい園芸科目園芸科が発足 十月、杵築にミカン園が開園した。集會室で販売するほか、重度センター等の施設、関係者にも広く販売されている。来年はより品質のよいものが大量に収

穫でざる見通しである。

10 文化祭好評をおさめる 十一月、むぎの会主催の文化祭が開催された。北岡和夫とムーディ・フログズの演奏、岩戸神楽、バザー、ヤング・サニーズの若々しいリズム、華やかなティー・パーティー、情緒豊かな野点のど、美術展、書道展、華道展など数々の催しが一週間にわたって行なわれ、大成功だった。

これに二、三追加すれば、つぎのようになる。

・一億円募金終了 設立当初の五千万円募金に続いて行なわれていた一億円募金が終わった。今後おそらく募金を行なわれないだろう。

・米国ドーマン氏が来所 脳性マヒ治療法の権威、ドーマン博士が来所。脳性マヒ者に大きな刺激を与えた。

・ハンディキャップべつぶガイド発行 障害者のための別府市案内を福祉都市を促進する会が編集、発行した。

・児童施設へスベリ台を寄贈 むぎの会会員が期末手当より拠金。市内児童施設栄光園へスベリ台を贈った。

こうしてみると、施設の拡大から人間性の拡張へ流れが変わっていることが、はっきりわかる。しかも、入所者、従業員が主体性を持って活動を始めたことがよくわかる。『太陽新聞』のコラム子は、つぎのように書いている。

——日本人はエコノミックアニマルにとどまらず、もつと心情的に豊かな国民性を持たなければいけないだろう。同じことは障害者にもいえる。自分の殻に閉じ込める時代から脱皮し、外に向かつて伸びなければならぬ時がすでに目の前に来ている。重度だから発言できないと思う人がいるかもしれないが、そんな人は健常者であっても発言できないであろう。要は自分が人間としての自覚を持っているか否かである。太陽の家はたしかに成長したし、これからも大いに伸びるだろうが、それはいまままで上からのお膳立てに箸を入れさせてもらったに他ならない。太陽の家がほんとうに充実するためには全会員相互の盛り上がりが必要である。そのためには、われわれ自身も大いに学び、大いに討論の場に参加するようでありたい。太陽の家にも車椅子の課長がいてもおかしくはない。そういう時代が早く来ることを願うのは大勢の意見であろう。(『太陽新聞』第3号)

彼らを書いたこうした文章を読むと、現実に太陽の家は誇りをもって成長を続けていると思わざるを得ない。

「もう大丈夫だ」とも思う。

「一日も早く私たちを解放してほしい。君たちのなかから課長、部長、事務局長が出て、理事長を肩がわりしてもらいたい。私をお役ご免にしてくれるようではなくては、ほんとうの太陽の家にはならない」

ということは、機会あるごとに話していたが、ようやく彼ら自身がその気になってきたようだ

った。

そして脊損の吉永栄治君は現場から試験を受け、事務局員になり広報室長になった。

運動を街へ――

障害者を英語では、ハンディキャプト、というが、不利な条件を背負った人、といういい方には社会的な暖かみを感じられる。身心障害者も、老人も、妊婦も同じハンディキャプトであり、障害者だけを別扱いすることはない。いちばんの弱者に対して差別をすることは到底許されないという考え方である。こうした人間性が、日本人にとかく欠けているのはどういう理由からなのか。単に貧しかったからというだけではなく、社会的文化レベルの問題なのだろう。

大阪万博のさい、私は大阪国際空港に車椅子が使用できるトイレをつくるべきだと関係方面に働きかけたが、交渉は難航した。昭和四十五年のことである。それが、四十八年夏には仙台、高崎、京都、下関、北九州、別府が身体障害者福祉モデル都市に指定された。その背景には各地の障害者自身の活動があった。仙台、郡山、京都、東京、別府など、障害者とボランティアの活動が地方自治体を突き上げ、国の施策の一つとなった。

太陽の家でいえば、地域でいちばん早くスロープをつけたのは近く一杯飲み屋である。道路

から段差のある入口では、車椅子は入れない。飲み屋のおやじさんは、商売上のことではあったが、福祉都市運動の先覚者でもあった。

別府市は人口二〇万以下であり、九州に二都市の指定は困難だからということでは最初は悲観的だったが、むぎの会福祉都市を促進する会は地域の署名を集め、再三、陳情した。モデル都市に指定されると、国から市に一〇〇〇万円の助成金が出るが、そのぐらいの金で都市の改造が進むわけがない。市が本腰を入れるかどうかが問題である。そして、それを決定するのは、障害者自身の熱意いかんというわけだった。

促進する会のメンバーは東京のグループと連絡をとり合い、丸山君の東京都福祉工場がつくっている消火用ポリ容器を売って運動資金を稼いだりしているようだった。

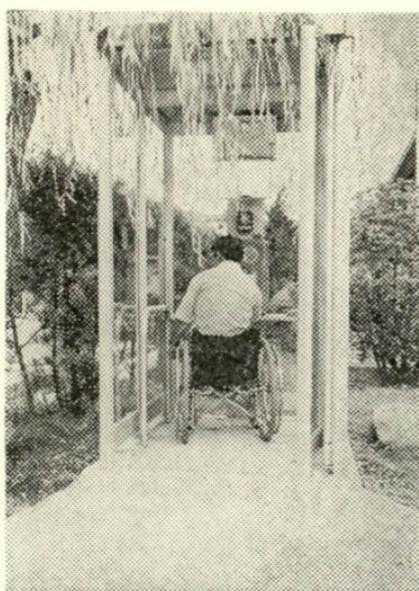
そして運動の効果は早速あらわれた。別府市役所が玄関にスロープをつけたのである。モデル都市指定の予算は国が一〇〇〇万円、県・市が各二〇〇〇万円の計五〇〇〇万円だが、市役所玄関の改造費は三万二〇〇〇円ということだった。予算計上前のことで、市は修理費から出したというが、やる気になればできるということである。

交通機関、公共施設、官公庁、デパート、ドライブイン、レストラン、ホテル、娯楽場など、重度障害者でも利用できる場所はどのくらいあるのか。健常者には何でもない車道と歩道の段差が、車椅子使用者には大きなさまたげになるようなことが無数といってよいほど多い。だが利用できる場所もあるだろう。それを彼らは調査し、車椅子でも行ける別府ガイドブックをつく

った。このガイドブックを逆にみれば、記載されていないところへは重度障害者は行けないということになる。

そして別府では、市役所、出張所、国際観光会館、市民会館、婦人会館などの玄関のスロープ化または自動ドア化、公園の便所の改造、交差点に盲人用点字カラーブロックの埋め込み、振動触知式信号機の新設などが実施されるようになった。

太陽の家の入所者は比較的良好に街へ出るが、こうした運動によってより積極的に出歩くようになったのは、彼らの成長をそのままあらわしているように思えた。



車椅子使用者用公共電話

彼らはまた自分たちで車椅子カバーというものを作った。車椅子は戸外を走ったまま室内に入る。太陽の家ではタイヤを洗って室内に入る習慣をつけるが、街へ出るとそういう設備はない。彼らはバスケットボール全国大会の折、東京の宿舎でタイヤにカバーをつけ、他の選手からも感心されたらしい。都市の改造を要求する反面、障害者が社会生活のルールやマナーを尊重するということはすばらしい。当然のことだが、保護されることに慣れてきた障害者にはこうした基

本的な社会性が欠けていたことも事実である。

むぎの会の会員が期末手当を出し合つて、親のいない児童施設へスベリ台を贈つたことも、うれしいことだった。

「われわれはいままでお金を頂く側だった。いまでは生活も安定し、小遣いもふえた。こんどはわれわれよりもっと恵まれない人に、ほんの少しでも募金して役立ててもらおう」

ということだったらしい。この話を聞いたとき、私は思わず涙が出そうになった。

「よくやった」

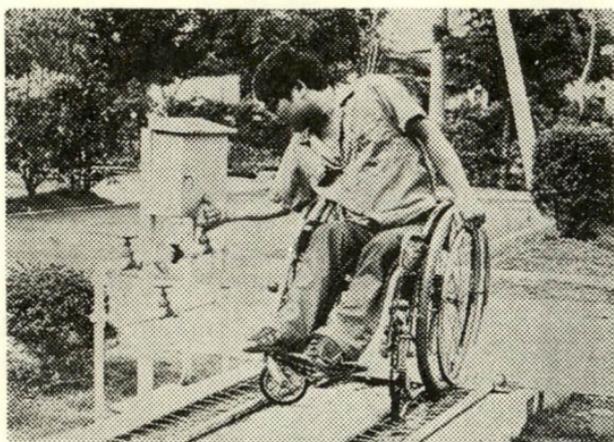
と、みんなの肩を叩いてやりたかった。彼らはもう立派な社会人であると思った。

そして、彼らがわずかでもカンパできる身分になったことに対して、苦しかった時代が夢のように思われた。

同じ屋根の下 同じ湯に

太陽の家を貫通する市道は、車の往来も多い。

かつては、ひと雨降れば泥田のようになり、車椅子や松葉杖は水たまりを避けるにも避けきれず、道路横の蓮田へひっくり返って落ちるものもいた。道が乾いていても、ひどい凸凹道で一般



車椅子車輪自動洗浄機

市民はほとんど歩くことがなかった。まわりに民家もなかったのである。それが完全舗装されたのは、天皇、皇后両陛下がおいでになったときだが、一般市民の通行者もふえた。市営住宅団地ができ、田や畑はほとんど姿を消して民家が建ち並び、スナックや飲食店、スーパーマーケットが点在している。

だから、施設とはいっても街のなかにあるといつてよい。フェンスで囲っているわけではなく、市民と入所者が同じ道路を使っている上に、同じスーパーで買物をし、同じ飲食店で食事をしている。風呂は同じ、太陽湯である。

この温泉は昭和四十六年はじめに掘り当てた。それ以前は低温のものをボイラーで沸かして使っていたから、施設内だけの浴室だった。四十四年に取得した国有地に、むかしは露天の温泉があったということを伝え聞いて、掘ってみることにしたのである。近くの西念寺住職が、

「かならず湯が出るから掘ってみなさい」とすすめてくれた。結局、竜巻地獄の伊藤シズエ氏か

ら鉱泉権を譲渡してもらい、乏しい法人費のなからボーリングにかかったが、これは私たちがいくら努力しても通用する相手ではない。温泉が出るか出ないかは、まったく手の届かぬ地の沙汰である。一種奇妙な、山師にでもなったような気分で見守っていたが、

「出た、出ました」

ということ、駆けつけてみると、みごと五二度の湯が自噴していた。

これは太陽の家だけで使うのはもったいない、地域の人にも使ってもらえば、よい地域交流になるだろうと考えた。太陽の家のある亀川地区は、別府八湯の一つとして、名の通った温泉場だが、近年は海岸べりの湯が枯れ、近くには共同浴場も少ない。当然、内湯のない人たちによるこぼれるはずだった。そして、市から浴場新設の補助金（九〇〇万円）を受けた。いわば銭湯経営である。

浴場は二つに仕切り、道路に近いほうを一般向け、太陽湯とした。入湯料は一〇円。夕方になると、洗い桶をかかえた近所の人たちで賑わう。

この人たちは選挙のときは機能強化センター佐佐木記念体育館で投票し、文化祭があるとフアターの円陣に加わり、研修センターの、いこいで軽食をとる。もちろん、そうであっても太陽の家と障害者を完全に理解してくれているとはいえないだろうが、すくなくとも身近なものになっていることは確かだろう。

福祉工場と太陽湯の隣りには、五階建と三階建の雇用促進住宅二棟が建っている。世帯用宿舎

の拡張にせまられて、労働省に働きかけた結果、一般勤労者用として建てられたものである。雇用促進事業団の建物だが、一階部分は車椅子専用設計してもらった。福祉工場従業員など社会復帰した太陽の家人所者が一階の全部を占め、二階も松葉杖など歩行可能者が一般入居者とまじり合せて使っている。ここでは一般市民と同じ屋根の下に住み、同じ湯に入っているわけである。

障害者に対する社会のあり方も、ここ数年急激といつてよいほどの変化をみせている。たとえば、つぎのような意見である。

——身障者もわれわれと同様、欠点も長所も持ち合わせた一個の人間なのだから、彼らの一般的な欠点（心身の不都合）を補い、彼らの個性的な長所を引き出してやるのがわれわれのとるべき態度なのだ。つまり、彼らを「ただの人」と考えるところからすべては始まるのだ。われわれが彼らに、一般人同様の厳しい態度で臨むことにより、彼らが日ごろ抱きかちな世間への甘え、そしてその裏返しにほかならない卑屈な心などは、消え去るだろう。そして、そのためには、障害者への理解を深めることが必要なのだが、それは制度改革では不十分である。彼らと深く接することにより、われわれは、彼らの本当に困っている点を知り適切な施策の足がかりを作ることができ、また人間の真の価値は内面の貴さによるとい貴重な発見もできるのだ。その時にはもはや、精薄施設を自分の町に建てるなどという住民運動が起きたり、国電にシルバースhirtなるものが設けられたりすることは、なくなるに相違な

い。以上の目的を達成するために、われわれは、大胆な提案を行わねばならない。つまり、障害者を施設からもう一度、われわれの中に戻すことである。自分たちの周りに障害者がいることが日常的になるといふ状態が福祉社会の理想であるならば、これほどその目的にかなった方法はあるまい。『朝日ジャーナル』50年2月14日号「読者から」欄、函館市・学生・17歳・辻一郎)

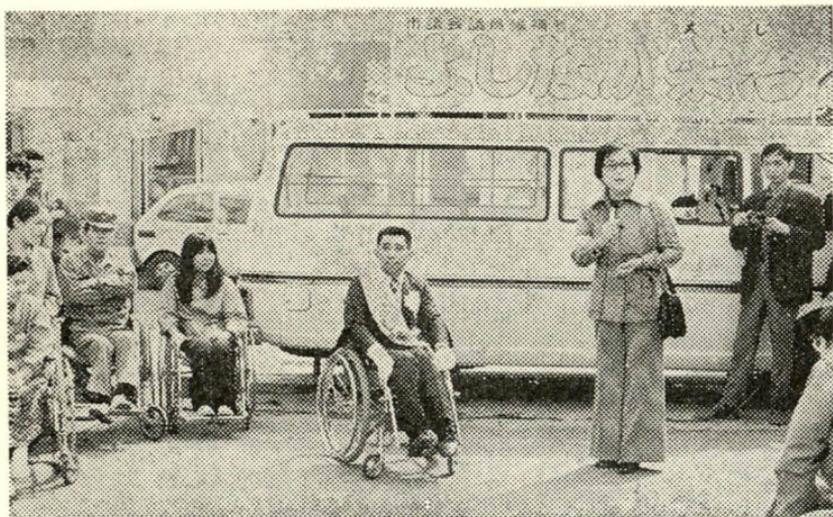
ごく稀れに、こうした意見に接すると、私は思わず快哉かいさいを叫びたくなる。日本という国もまんざら捨てたものでもないと思う。とくに、このように若い人から借りものでない意見を聞くと、前途の明るさが信じられるように思うのである。

しかし、障害者は社会が呼び戻してくれるのを待っているわけにはいかない。彼らは自分たちの力で、ときには強引に社会へ戻っていかなければならないのである。

車椅子議員誕生

昭和五十年四月の統一地方選挙、別府市会議員選挙に、むぎの会会長の吉永栄治君が立候補した。

過去、車椅子に乗った議員といえば、鳩山一郎、石橋湛山の二人の首相がいるが、車椅子で当



市議会議員選挙に出馬した吉永君 秋山ちえ子さんも応援に駆けつけ街頭でマイクを握ってくれた

選した議員はいない。両首相は車椅子で登院しても、障害者として何一つ政治的発言を残さなかった。小児麻痺の子を持つ親として、障害者の福祉向上を叫んで参議院議員に当選した女性タレントも、何ら実績を示していない。やはりほんとうの弱者——ということばは好きではないが——でなければ、弱者の立場に立つことはできない。

「ぜひ出してみろ。当選するしないは別問題だ。いや、出る以上はかならず当選しろ」

と、私はいった。むぎの会はもちろん支持を決議した。

別府市には身体障害者が約四〇〇〇人住んでいる。太陽の家が職員・提携企業社員を含めて四三〇名。市内の関係者にもお願いして、全部でざっと五〇〇〇票。当選ラインは一二〇〇票ぐらいといわれているから、何と

かikerるだろうという見通しである。

彼は立候補を決意した。資金はゼロといってよいが、熱意はありすぎるほどある。太陽の家の現場で鍛え抜き、事務職員になった彼は自治会の中心者でもあり、福祉都市を促進する会の運動を通して地域社会との交流、そして一般社会への奉仕の必要性を強く感じていた。

立候補の届出をすませて、彼は奥さんの実家へはじめて挨拶に行った。結婚は二年前にしていたが、奥さんは家出同様の形だった。健常者の奥さんが脊損者と結婚することを、両親は許そうとしなかった。彼も足を向けにくかった。立候補はちょうどよい機会である。とにかく彼は挨拶だけはすませたと、晴ればれした表情で選挙戦に入った。

私も久しぶりにファイトが湧いた。太陽の家をつくるといいたしたときと同様、私の両親は猛反対をした。

「世の中はそんなに甘くはない」というのである。たしかに別府のような地方都市の選挙はむずかしいのである。

しかし、それだけに一層私のファイトは湧く。父親の病院の宮事務長を責任者に、太陽の家から渡辺事業部長、飯川総務部長、伊方事業課長などを配置した。やむなく私の母親も、目抜き通りに選挙事務所を提供してくれた。

東京から水上勉さんが講演に駆けつけ、秋山ちえ子さんが宣伝カーに乗った。野末陳平氏、宮城まり子さんも街頭に立ってくれた。

現職二人、新人一人、定数三六名。彼は新人で無所属、その上車椅子のハンディである。金も名前も地盤もない。車椅子だからといってオープンカーを使うことは、選挙法で禁じられている。別府は、せまい坂道が多い。付添人が車椅子を押して歩くのでは、マイナス・イメージを与えるだけである。

「市議に立候補した秋山ちえ子です」と、ウグイス君が叫ぶ。

「違いますよ、吉永栄治さんですよ。お願いいたしますよ」と、秋山さんがあわてて訂正する。

看板、ポスター類は全部警察に持ち込んで念を押した。しまいに警察も面倒になったらしく、「もう持ってこなくていい」といったが、こちらは違反だけは絶対に避けるというのが鉄則である。

太陽の家に出入りしている豆腐屋さんがやはり立候補した。

「あそこの豆腐はもう買うな」

「いや、武士の情だ、買ってやれ」

と、これも議論の種である。いかに効率よく車を走らせることができるかということで、伊方君などはコース調べに夜通し走っていた。

車椅子の候補者に街の目は意外に冷たかった。地縁社会に割り込む余地はやはりないのかとも思われた。地元新聞社の予想も投票ラインには遠かった。身障関係の票は伸び悩みとみえた。

「やはりダメか」という悲観的空氣が流れたが、老人票に期待が持てるかもしれないという見方



バンザイ！ 吉永君みごと当選

もあった。彼の車が裏道に入って行くと、留守番をしているらしい年寄りが出てきて激励してくれるというのだ。政治には裏切られ通してきた老人にしてみれば、車椅子の若ものに最後の望みを託そうと考えるのかもしれない。

「社会に恩返しをさせてください」という彼の真面目さが好印象を与えたこ

とは間違いない。

結果は、一八六八票。四八人中一四位。テレビの画面にトップで当確が出た。みんなが抱き合
い、泣いた。マスコミが飛んできた。

「意外でしたね」

といいながら、テレビのライトが輝いた。車椅子ごとの胸上げである。

「ところでダルマはどうしました」

とマスコミがいった。

「そんなもの、当選すると思っちゃいなかったから……」

「やっぱりダルマがなきゃ格好がつかない」

「それじゃ、隣りから借りてこい」

隣りは市長候補の事務所だった。落選のニュースが入ったからダルマは不用である。

「冗談じゃないですよ。そんなこといったら半殺しにされるかもしれない」

結局、だれかが走りまわって、どこかから小さな薄汚れたダルマを見つけてきた。片目を白く塗りつぶして、あらためて黒目を入れ、

「バンザイ！ バンザイ！」

私たちは疲労困憊こんぱいだった。もう選挙はコリゴリだと思った。バッジをつけた彼を見ると、先の苦勞が思いやられて素直にはよろこべないような気もした。だが、この選挙は入所者の団結心を高めてくれた。太陽の家全体が、どこか一段と締まったようにも思われた。全国初の車椅子議員を自分たちの手で誕生させたという誇りと自信がみなぎったのである。

第八章——心は一つに結ばれた

アジアの全障害者の代表を

昭和四十九年、太陽の家の資産は約八億三〇〇〇万円。歳入総額は約四億二〇〇〇万円。生産額は約五億七〇〇〇万円に達した。第二、太陽の家の計画も北九州市に確定の機運が高まった。いよいよ十周年である。この前年暮れの理事会で、私は一つの提案をした。

「十周年記念事業として、障害者国際スポーツ大会を開きたい」

かなり前——それは一九六八年のエルサレム・パラリンピックのときだったが——に、こうした大会に東南アジアからの参加がないのは淋しいという話が出たことがある。それ以来、南太平洋地区を含む大会の開催は、グットマン博士以下関係者の一つの夢だった。そして私は、そうし

た大会を開催するとすれば日本がリーダーシップをとらねばならないと考えていた。また、その大会はストークマンデビルの名にこだわることなく、出場選手を車椅子使用者に限らず全障害者に広げるべきだと考えた。この種の大会では、ストークマンデビルの伝統的競技規則に従うことが当然のように考えられていたため、脊損以外の障害者はとかく影が薄くなりがちなのである。

代表選手として海外へ派遣されるものは、いつも車椅子に乗っている。太陽の家でも、彼らを見送るものは「車椅子はいいなあ」という羨望の気持ちを抱いているはずだった。私は何度かグットマン博士に全障害者の大会にするよう訴えたが、答えはいつも「時期尚早」であった。

だが、一九七二年のハイデルベルク・パレリンピックのとき、
「日本でやってくれないだろうか」

という声があった。そのとき、日本側関係者のほとんどは、

「そうは簡単にできませんよ」

と答えていた。発展途上国が多い東南アジア諸国は、選手派遣の費用を出せるほど豊かではない。加えて、政情が安定しているとはいえない。満足な施設もないような国が、障害者のスポーツ大会など乗ってくるわけがないというのが、ごく一般的常識的な考え方である。

私はオーストラリアを打診した。

「ぜひやってくれ」という返事である。そこで一九七四年春、シンガポールで第一回の予備会議を開いた。オーストラリアとニュージーランドは非常に積極的だった。両国は福祉先進国だから

参加が確定的になった。

それ以前に、中国には、スポーツ視察団が太陽の家へ来たときに毛沢東首席と周恩来首相あての文書を依頼しておいたが、返事はなかった。中国大使館を訪ねると、

「中国では障害者のスポーツはやられていませんから」というだけで、「役員だけでも」という押しも通用しなかった。

実行委員会が発足して、ふたたび北京へ招待状を送り、体協会長の河野参院議長からも大使館に電話をもらったが、参加の返事はとうとう得られない。他の国もナシのツブテのところがある。ネパールは手紙も電報も返

事がなく、電話も通じない。

お金のほうは、国が一五〇〇万円、大分県が一〇〇〇万円、大分市と別府市が各五〇〇万円、日本自転車振興会が二九〇〇万円出してくれることになった。合計六四〇〇万円である。

東京パラリンピックの予算は、選手・役員約三八〇人、十日間の



「発展途上国をフェスビッドに参加させる会」の街頭募金活動

滞在で一億二〇〇万円だった。こんどは約二五〇人で八日間だが、十年間の物価上昇を考えると、台所は非常にきびしい。

そこで、井深大さん、秋山ちえ子さんが中心になって、発展途上国をフェスピックに参加させる会^カをつくった。派遣費が出ない国へ旅費を送ってやろうという会である。井深さんが企業からの寄付金を集め、秋山さんはボランティアの主婦グループと、バザーを催したりしてくれたのだが、最終的に約二五〇〇万円のお金ができた。

私は実行委事務局長として表から参加を呼びかけ、参加させる会事務局長として裏から招くということになった。昼は「旅費はそちら持ち」といい、夜はボランティアとして「旅費は出してあげてもよいから」と、自宅から電話をかけるのである。

ネパールへは、現地で診療所を開いている岩村昇医師などの手をわずらわせて連絡をとってもらった。

バブア・ニューギニアは、

「旅費以外の経済的責任も負うのか」といつてくる。

関係者のなかからは、

「一〇〇人も集まればいいじゃないか」という声も出てくる。

だが、貧しい国が参加してこそ意義がある。一カ国でも一人でも多く参加してほしい。

南ベトナムでは厚生次官に会って「四人参加」の約束をとりつけ、ベトナム航空の大阪支店長

に旅費を預けたが、戦争が終結すると、この支店長は自殺してしまった。ホンコンからも南ベトナムへは連絡がとれなくなった。臨時政府あて招待状を出し直したが、返送されて、結局、ベトナムは不参加となった。

国内選手団の選考はあまり大きい問題がないが、受入れ体制づくりは大変である。大会本部と外国選手宿舎として、大分西鉄グランドホテルを借りきる——一人一日三食五〇〇〇円で八泊九日のサービスだった——ことにしたが、大分でははじめての国際的な催しである。皇太子、妃殿下もおいでになることになった。県も市も総力をあげて準備に突入し、太陽の家機能強化センターの改築工事も始まった。

昭和五十年五月 機能強化センター改築完成（日本自転車振興会からの補助金八八七二

万円）

佐佐木記念体育館には、新しく五〇〇名収容の観覧席と車椅子専用エレベーターが設置され、プールは屋内空調になった。また、研修センター前の市道に視覚障害者用のオルゴール式信号と、車椅子が使用できる公衆電話ボックス、無料サービスの移動電話局も設置された。

そして、一七カ国の選手を迎えに全日空チャーター機がホンコンへ飛んだ。出入国手続きなどの世話をするために、日赤と地元の語学奉仕グループが乗り込んでいた。だが、スリランカ、ビ

ルマ、バキスタンはホンコンに来ていないという連絡が入ってきた。現地の大使館に電報を打ち、厚生大臣に電話する。ぎりぎりまで気が抜けないのである。

大会は成功した

選手団の大部分は五月二十九日に大分入りした。

メデイカル・チェック、歓迎レセプション、採火式がすみ、大会前日の三十一日には皇太子ご夫妻、河野謙三氏など多数の来賓（ちゅうひん）が到着した。グットマン博士は空港から太陽の家へ直行し、ホテルで私に会うなり、

「東洋の奇蹟だ」と叫んだ。

「太陽の家は立派だ。世界のどの国からもモデルにされている。君がはじめて私のところに来たとき、正直いって私はあまり期待はしていなかった。君はよくやった。私のところの最優等生だよ」

抱き合ったまま、小柄な博士は最大級のことばでほめてくれた。多少はオーバーだが、単なる外交辞令とは違う。眼鏡の奥の目は、たしかにうるんでいた。私も博士の手を握り返した。

「大変でしたが、やっとここまでできました。太陽の家もフェスピックもここまでできたのは先生の



グットマン博士と私の家族 フェスピックが開催できたのも博士のおかげだった

おかげです」

「君が十四年前、ストックマンデビルに二人の選手を連れて来たのが、アジアからの最初の参加だった。それがいま、君はアジアの一七カ国の障害者を集める大会をやる。君はわずか半年間私のところにいて、私のすべてを学びとってくれた。私の最良の弟子だ」

「お金がなくて苦勞しましたが大会は成功します」

博士は、

「ありがとう、ほんとうにありがとう」

と、何度もくりかえした。だが、感謝しなければならぬのは私のほうである。博士によって私は開眼させられたのだ。

皇太子ご夫妻の特別機は、フィリピン選手の新しい車椅子も運んできた。彼らはタイヤがボロボロの車椅子に乗っていた。マニラのベルギー人修道女のカンパで日本に発注していたのが、大阪港の貨物船に積まれたままだった。それを別府カトリック教会のスロイテル神父が奔走して、やっと選手たちの手に入ったのである。

そして、最後まで気をもませたバキスタンの選手団が到着して、日本を含む一八カ国九七四人が揃った。太陽の家機能強化センターの突貫工事もどうやら間に合った。各競技場の準備も整った。

本部の西鉄グランドホテルには参加各国旗がひるがえり、親善ムードにあふれた。ただ一つの心配は天候のことだったが、翌六月一日は快晴で明けた。

競技は、開会式終了後の大分市営陸上競技場でフィールド・トラック競技、卓球。大分市営温水プールで水泳。二日と三日は全競技が別府に移って、卓球と水泳が県立青山高校で、ダーチェリー、ウェイトリフティング、フェンシング、アーチェリーが農協共済リハビリテーションで、バスケットが勤労身障者体育館と太陽の家機能強化センターで行なわれた。

片足だけに一〇〇メートル競走、手だけの水泳、車椅子の槍投げやフェンシング。選手たちはよろこびの目を輝かせ、どの会場もたくさんの観衆を釘付けにした。

ビルマのアン・タン君は両足切断者。義足で一〇〇メートルを完走した。タイムは三六秒三。両足義足では稀れな記録だ。彼は内戦のさいゲリラの銃弾で負傷したのだが、それによって両足切断者でも走れることを証明した。

バプア・ニューギニアのノネ・ウイケ君はビールを飲みすぎて両足が麻痺したというが、車椅子ではじめてトラックを走った。

フィジーのシェフェワイア・ザウ君も車椅子で走った。ポリオの彼は、

「できれば日本で仕事を探したい。いい仕事があればガールフレンドもフィジーから呼びたい」と明るい。

ニュージールランドのポール・チャンバース君は脊損。二五メートル自由形を泳ぎ終って、「帰国したら結婚式が待っている」

と笑った。

ネパールのスリヤ・クマリ・グルンちゃんは特別参加。左足と松葉杖で六〇メートルを走った。一三歳の小さな彼女は全身の力を松葉杖にこめて走った。

卓球で優勝した太陽の家の山本誠君は、金メダルを見せながら、

「決勝戦のとき、皇太子ご夫妻が横で見えられてコチコチになった。はずれた球を美智子さまが拾ってくれたんだ。感激だったな」

からだの不自由な子どもたちも、たくさん見に来た。

「ぼくたちと同じようなからだの人が、外国にもいて、みんな元気なことがわかった。開会式のときは一緒に行進したいと思った」

と、彼らも元気づけられたようだった。

そして、グットマン博士は私にいった。

「すばらしい大会だ。あらゆる障害者が集まることは、市民の目を福祉に向けるにも役立つ。この大会がそのことを実際に証明した。今後、身障者スポーツ大会はすべてこの方法になるだろ

う。もちろん、来年のカナダのパラリンピックもね」

頑固な博士がついに折れてくれた。車椅子だけのパラリンピックが、二十四年目で全障害者のものになる。そのことだけでも、フェスピックを開いた意義はあったと、私は思った。

二日目、皇太子ご夫妻が太陽の家へおいでになった。殿下は、少し驚かれたようだった。

「すっかり変わりましたね。もう、ふつうの工場と変わらませんね。こんな工場が全国に広がると思いますね」

ご夫妻がおいでになったのは、設立一周年を迎えたばかりのときだったから、九年前である。私はそれから幾度かお会いして、近況をご報告していたが、それにしてもいろいろなことをよくご存じであった。私は隅から隅まで時間をかけてご覧いただいた。

機能強化センターに入ると、満員の観衆が拍手で迎えた。車椅子のバスケットボールというものをこの目で見ようという人たちで、新設の観覧席はあふれるように埋まっていた。

ちょうど、太陽の家チーム（大分県代表）とフィリピンの試合終了まぎわである。スコアは61対29で勝っている。私は胸をなでおろした。

皇后陛下の面前で、フィリピンに大敗した東京パラリンピックの口惜しさは忘れられない。あのときはたしか、日本代表チームは7対57という大差で負けた。

だが、ご夫妻が席につかれると、とたんに太陽の家チームの動きがぶくなった。固くなったのである。それに対してフィリピンの動きはすばらしい。たちまち連続三ゴール、6点をとられ

た。私はご夫妻にゲームの説明をするのも忘れ、

「太陽ガンバレ！」

と怒鳴った。

車椅子と車椅子が激突する。選手がつんのめって床に投げ出される。ボールをとる。ダッシュする。シュート、入った！



スリヤ・クマリ・グルンちゃん 13歳の彼女はこの大会のマスコットの存在だった

ご夫妻もからだを乗り出されて拍手される。

65対37。勝った。私は思わず両手をあげた。

「バンザイ！」

真向かいの観覧席で、水上勉さんの奥さんと直子ちゃん、それに私の母と妻が手を振った。両親はこの大会に100万円寄付してくれたから、多少の感激を味わうことも、私が数秒間個人的感情を

もつことも許されるだろうと思つた。

皇太子ご夫妻は、両チームの一人一人と握手され、話をかわしていた。そして、その様子をテレビ・カメラとともに追っているハミリカメラがあった。

別府市の土産品店のご主人、高橋賢さんら二人のグループである。高橋さんたちが、フェスピックの記録映画をつくりたいという話を持ってきたのが、この春。

オムロン太陽電機の江藤秀信君が主人公に決定して、仕事をしている姿やチームで練習しているところの撮影を進めていた。カラー二〇分のこの映画は『明日への鼓動』というタイトルで、英語版のプリントは海外でも上映されるはずだった。

このように障害者と一般市民が理解をもつて人間的接触をすること。フェスピックはその一つのきっかけとしても成功した。

第一回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会（略称＝FESPIC Games）

昭和五十年六月一日～三日

日本Ⅱ金メダル二四七、銀メダル一六八、銅メダル一二四。

オーストラリアⅡ金六二、銀四三、銅二八。

ニュージーランドⅡ金二五、銀一四、銅一〇。

インドネシアⅡ金二三、銀一三、銅一二。

ホンコン || 金一九、銀一一、銅一二。

フィリピン || 金七、銀三、銅五。

韓国 || 金六、銀一、銅三。

インド || 金四、銀三、銅四。

フィジー || 金四、銀一、銅二。

ビルマ || 金四、銀一。

タイ || 金三、銀一、銅一。

シンガポール || 金三、銅二。

マレーシア || 金二、銀一、銅二。

スリランカ || 金二、銀二。

ネパール || 金二、銅一。

パキスタン || 金二。

バングラデシュ || 金一、銀一。

パプア・ニューギニア || 銀一。

(競技は国際ストークマンデビル大会の規則および日本身体障害者競技規則に従った)

感激のあとに

バスケットボール決勝戦が終った機能強化センター佐佐木記念体育館に、役員・選手約四〇〇人と大会を支えてくれたボランティア約二〇〇人が集まった。閉会式である。

ファンファーレが鳴り、葛西大会会長が優秀チームにカップを渡した。私は、やはり優秀チームにポケットマネーで買った清正公きよまさの出世兜かぶとを贈った。葛西会長の挨拶のあと、大会旗が降ろされ、次期開催国にきまったオーストラリアのオークションショット団長に手渡された。閉会宣言は私の役割である。

私はとくに宣言文を用意していなかったが、簡単に力強く、英語で話そうとだけ考えていた。「スポーツは大事だ。だが、仕事はもっと大事だ。みんなで協力して、社会復帰の道を目ざそう！」

拳を振り上げ、精一杯の声で私は叫んでいた。

どよめきが起こった。大会は終わった。各国の選手団長が壇上の私たちに押し寄せてきた。それぞれのペナントや民芸品が積み重ねられ、握手と抱擁が続く。そして、自衛隊音楽隊の、螢の光のなかを選手団が退場する。日本選手団とボランティアがそれを人垣で見送る。拍手がこだ

まとなり、

「サヨナラ」

「また会いましょう」

と、一人一人がことばをかわし握手をして、興奮が高まった。そのなかに水上勉さんの奥さんと直子ちゃんもいた。あの内気な直子ちゃんが、懸命に手を伸ばして外国選手の手を握っていた。

まだ外は明るい。選手たちは噴水を囲む芝生の上でユニフォームを交換し、肩を抱き合って写真を撮り、語学奉仕のボランティアをはさんで語り合い、アドレスを交換する。

近所の奥さんやセーラー服の女子中学生も、カメラ片手に仲間入りしている。このとき、国を越え、障害を越えた暖かい友情がいくつ生まれたことだろう。こういうときこそ、時間は永遠に止まってほしいと思う。

だが、裏方の太陽の家の事務局は送別パーティの準備に追われ、私も座る間がなかった。

体育館は、こんどはパーティ会場である。選手団がそれぞれのテーブルにつく。脇屋別府市長の挨拶のあと、井深大会長が乾杯の音頭をとる。そのとき、天井のクスマが割れ、「オーストラリアで会いましょう」の垂れ幕と紙吹雪。ステージの琴の音も聞こえない歓声の渦である。私たちもテーブルの間に入った。

「ドクター！」

「サンキユベリマッチ ドクターナカムラ！」

握手をするたびに、私も押さえがたい興奮に包まれる。

印巴戦争で捕虜になり、両手を失ない、鼻をそがれたというモハマド・アユブさんのむき出しの義手が、私の背中に回される。彼の深く沈んだ感謝のことばが、ついに私に涙を出させた。

そして、隅のテーブルでは直子ちゃんがフィリピンの若ものの皿に料理をとってやっていた。二人はこの大会ですっかり仲よしになったらしい。

ネパールのスリヤちゃんはユカタを着て、ニコニコ笑っている。私の娘の万里子が同じ年頃のスリヤちゃんにとブレゼントしたユカタだ。

舞台は神楽。八岐大蛇やまたのおろちに剣を振りかざすスサノオノミコト。

「ゴウ！」の大合唱が起こる。やっつけてしまえ、というわけだ。

パーティはまったく一つになっていた。

フィリピン選手団が飛び入りでポルカ・バルを踊る。車椅子のダンスだ。

四日は一日城島高原で遊び、彼らは五日にふたたび太陽の家を訪れた。こんどは働いているところを見るためである。福祉工場・オムロン太陽電機の職場は、とくに彼らの興味をさそったらしい。沖縄海洋博の会場へ送るために製作中のエスカレーター用電動車椅子も人気を集めた。そして、一人一人に渡したお土産の袋を開けて、

「こんなすばらしいものを作っているなんて……」

と、絶句するものもいた。

太陽の家のペナントとソニーラジオ、オムロン電卓が一台ずつのプレゼントだが、ラジオと電卓は真正銘、太陽の家の製品である。

インドのバーマ団長などは、

「帰ったら太陽の家を手本に頑張ってみたい」

といってくれた。だが、

「何かほんとうのような気がしない。国へ帰れば障害者はたいてい乞食なのだ」

と、悲しげにいう選手もいた。

開会式の炬火ランナー、スリランカのシリセナ選手は聾ということだったが、メデイカル・チェックで後天性の難聴とわかった。スリランカのもう一人、バングラデシユの一人もそうだった。そこで、検査をした吉村医師の世話で補聴器が寄付された。

補聴器を耳にさし込んだ三人は、

「テレビの音が聞こえる」

と、飛び上がり、肩を叩きあってよろこんだ。そして、シリセナ選手は早速「さくら、さくら」を覚えた。だが、あとは使おうとしなかった。

「これは宝物。家族に見せてから使う」

と、しまい込んでしまった。

大会を開いて、発展途上国の障害者に刺激を与えることはできた。だが、現実問題としてはどうか。オーストラリアは、障害者チームと健常者チームがバスケットのリーグ戦をやっているような先進国である。しかし、パキスタン、ネパール、パプア・ニューギニアなどはスポーツをやるのはじめてという国である。

スリランカのムナシゲ団長は、

「身障者が使える体育施設などほとんどない」

といい、パキスタンのサジダ団長も、

「国内の身障者の数も正確にはつかめていない」

と嘆いた。まさに何年か前の日本の姿であり、決して他人事とは思えない。

私は思い立って、オーストラリアなど九カ国の代表者に集まってもらった。

アジアのすべての障害者のために、情報センターを設け、さまざまな情報を交換するとともにフェスピック・リハビリテーション基金を設け、その一部で太陽の家研修センターへ留学してもらおうという提案である。

すでに東京には、ICTA支部としてのサン・インフォーメーション・センターがあつて情報活動を行なっているし、太陽の家に研修留学生を受入れる体制は整っている。私の提案は一応、現実的なものだった。また、各国の潜在的希望でもあつた。

提案は満場一致で採択され、事務局は最初の二年間を太陽の家が、つぎの二年間はオーストラ

リアがと、フェスピック開催国が順に受持つことになった。

昭和五十年六月五日 フェスピック情報センター発足。(参加国は日本、オーストラリ

ア、ニュージールランド、ホンコン、フィリピン、インドネシア、インド、ビルマ、ネパール、スリランカ)

実りの多い大会は終わった。

六日朝、彼らは全日空チャーター便で帰国の途についた。感動的な別れだった。涙を流しながら私の胸にすがって離れようとしないうちもいた。秋山ちえ子さんやボランティアも泣いていた。

「オーストラリアで会いましょう」

飛行機が飛び立ち、秋山さんが、

「ご苦労さまでした」

といった。まず無事に終わったことは、一段落というものだった。

ご苦労だったのは秋山さんのほうである。準備段階から全力をあげて協力して、このラストシーンにまで立ち会ってくれたのだ。

県や市の職員、身障スポーツ関係者、警察、医療関係の人たち、日赤語学奉仕団などのボラン

ティアの人たちなど、感謝しなければならぬ人はたくさんいる。そうした人たちの力で大会は無事終わったのだ。

「ぐっすり眠りたいですね」

と私もいった。この一週間というもの、毎日三時間ぐらいつしか眠っていなかったからである。

だが、私は空港から家へ直行しない。太陽の家に寄って、お祭り気分を一掃しなければならなかった。空港から別府へ向かう車の窓から杵築のみかん園が見える。私は眠い頭で、やがてこの緑の山にたち並ぶことになるだろう一戸建住宅の設計を考えていた。

ゲール博士からの手紙

——フェスピック・ゲームに参加した各国の選手、チームリーダー、エスコートは永遠に消えがたい印象を抱いて帰国しました。大会は大成であったというだけでなく、たがいの国のリハビリ計画に役立つ重要ないくつかの問題点を示してくれました。

大会の組織は非常にすぐれていました。ホンコンからホンコンに帰るまで、困ることはまったくありませんでした。われわれのインド航空機がホンコン空港に到着した瞬間、貴国の代表、日

本赤十字社がわれわれの降りる手助けをし、税関手続きをし、ホテルへ送ってくれました。そしてまた全日空機に乗せてくれました。

この人たちは、われわれがほんのわずかの不便もないよう、爪先き立ちで走りまわっていました。たくさんの方と旅行しているとき、このようによく準備され、すばらしい助けがされることは感激以上のものです。この人たちは、詳細な情報も渡してくれました。また、飛行機の間では飲物、タバコを含めて可能な限り快適にさせていただきました。

大分空港に着くと、あなたをはじめ、みなさんが迎えにきており、すべてがスムーズに運びました。バンド演奏の歓迎にも驚きましたが、花をくださった生徒さんたちは象徴的な愛そのものでした。

各チームリーダーには個別のジープが用意され、空港からホテルまでの沿道は幾千人かの人たちが国旗とフェスピック旗を打ち振って迎えてくれました。それは、ほんとうの人類愛の姿でした。

ホテルの準備も完全でした。習慣や食事にも万全の方法が講じられていました。毎夜、チームリーダー、キャプテン会議があり、だれかが困ってはいはしないかということまで詳細に検討されました。日本赤十字社、ライオンズ・クラブ、日本福祉協会、小学校や大学などからたくさんの方の贈物をいただいて、選手はびっくりしていました。なかでも、小学生の手作りの花輪や日本人形のプレゼントは、みんなの心を打ちました。

通訳も親切で、友好的で、たくさんの贈物をくださいました。贈物そのものに私たちは感動するのではなく、その人たちの心が私たちを打つのです。この厚情、組織に私たちはどう報いることができるだろうかと考えました。

大会は非常にスムーズに行なわれ、ミスはまったくありませんでした。そして太陽の家への訪問は、深い感銘を与えてくれました。

出発のさいも、空港の係員がホテルまで来て通関事務等をしてくれたのには驚きました。しかも切符はホテルで個人に手渡されました。また、空港ではバンド演奏があり、たいへんカラフルでしたが、悲しさもありました。残り少ない時間にカードを交換し、たがいの住所を書きとめ、最後の贈物を手渡す……。人びとの目にはみな涙がありました。いいあらわせぬほどのモラルが湧き起こっていました。

皇太子ご夫妻が私たちに深いご理解をたまわったことも、申し上げておかねばなりません。数度にわたり、全障害者におことばをたまわり、一人一人にお会いになり、お話ししてください、障害者の気持ちを理解してくださいろうとなさっていただきました。

障害者は、自分たちのための国際的大会があると聞いた瞬間、新しい生命の流れが全身を走り、ふたたび健常者のような生活が送れるのだろうかと思えます。そして、このような大会が実際に行なわれているのを知るとき、ふたたび生きていく望みが生まれてきます。彼らは同情を嫌い、慈悲で生きていくことを望みません。たとえ、大会にはごく一部のものしか参加できなくと

も、全障害者に希望を与えてくれます。それが、リハビリテーションへの積極的アプローチです。

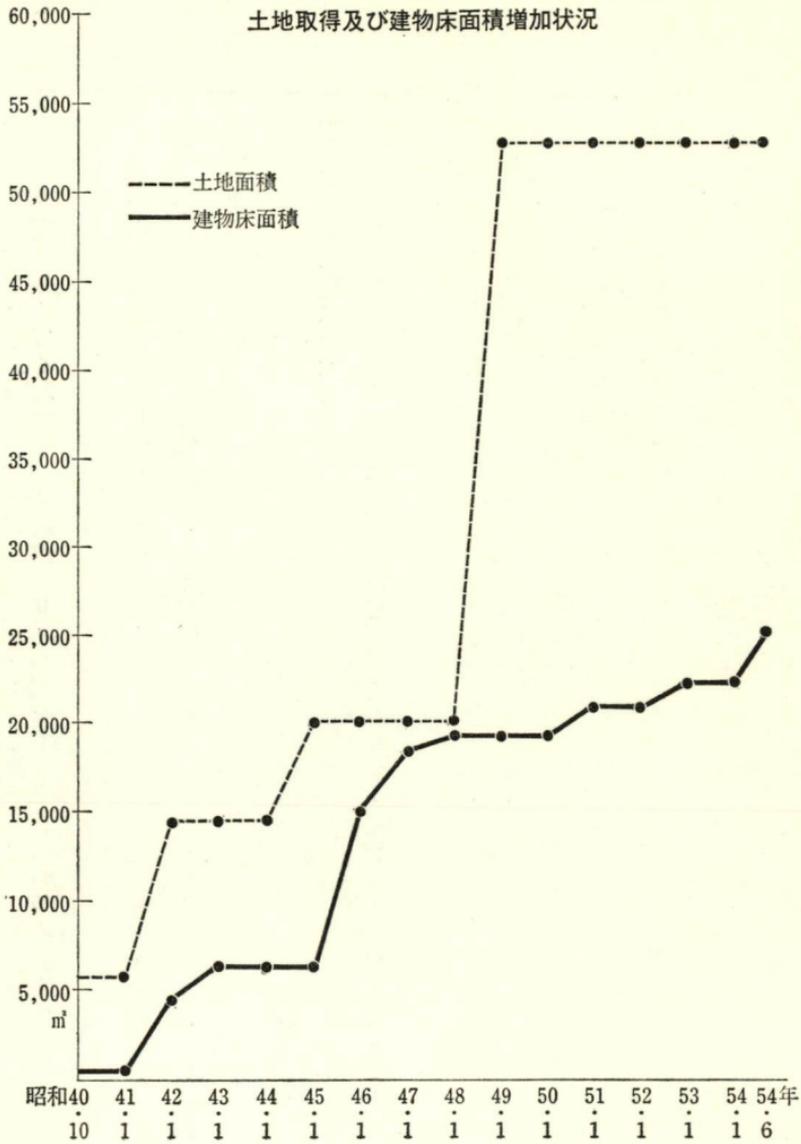
今回はインドから六名参加しましたが、このニュースは火のように拡がり、わが国の数百万の障害者に希望を与えました。そして実際に、多くの障害者がスポーツやレクリエーション活動を始め、また始めようとしています。

敬具

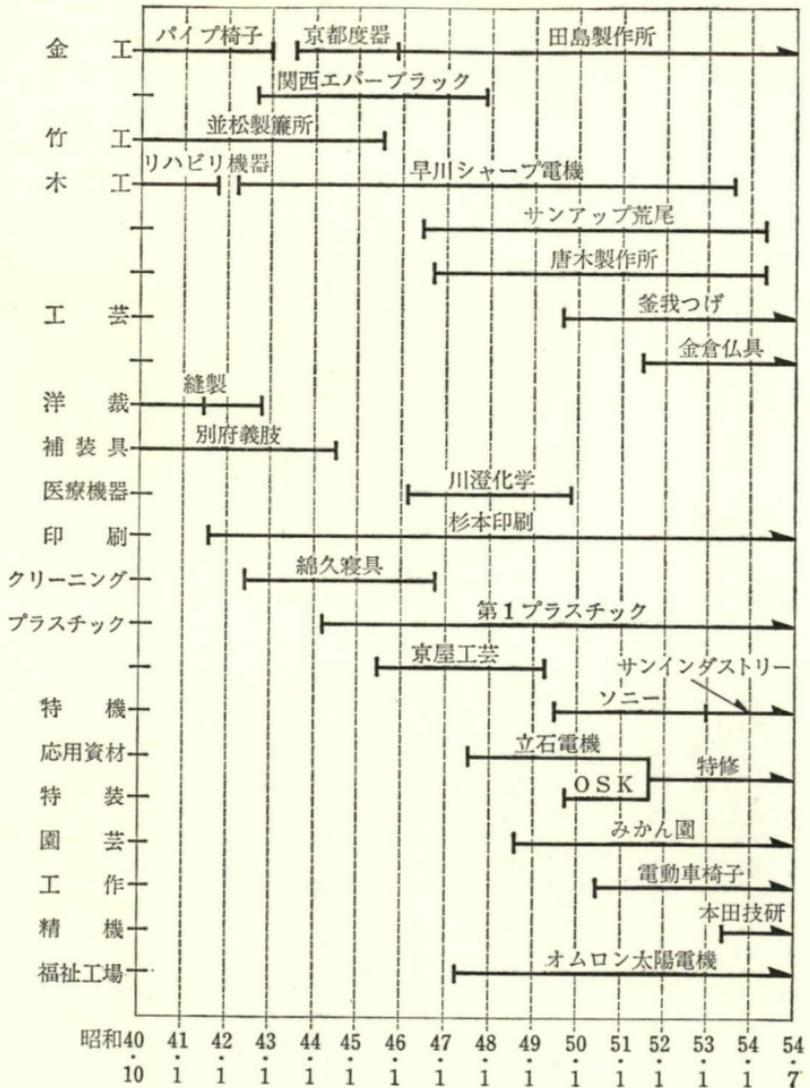
一九七五年六月二十六日

インド ラクノウ医科大学リハビリテーション・センター M・K・ゲール

土地取得及び建物床面積増加状況



太陽の家・授産事業等推移状況図



結び——福祉とは何か

フェスビックの準備が本格的になった四月、私は第九回吉川英治文化賞受賞の報せを受けた。太陽の家をつくったことと、身障者スポーツを推進したというのが、受賞者の一人に選ばれた理由のようであった。

私は以前、日本肢体不自由児協会から高木奨励賞を受けたことがあるが、そのような名誉が私にふさわしいとは思えなかった。

元来、ひとがあまり手を出さないようなことに好んで手を出す反面、晴れがましいこと、形式ばったことは苦手の性分である。金屏風の前のセレモニーやパーティは、ご遠慮申し上げたいところである。

しかし、受賞は私個人であっても、それは同時に太陽の家と身障者スポーツが広く社会に認知されるということと考えれば、やはりありがたいことであった。

そして、私は上京し、受賞者を代表して挨拶までしてしまった。あつかましいことだが、どう

世話をするならいい機会である。多少のPRをさせてもらった。

受賞者の一人、高橋竹山氏が津軽三味線を弾いた。すばらしい音色と圧倒的な迫力に酔うようであった。盲目の竹山氏の演奏は、私にはうかがい知れぬ深さと広がりのある一つの世界を奏者が完全につかみきっているというものだった。その力強い撥さばきに魅了されながら、私は思った。

竹山氏が失明しなかったら、ふつうの視力を持っていたら、はたしてこの芸境に達していただろうか――。

もちろん、失明されたために筆舌に尽くせぬ辛苦を経られたに違いない。福祉も、施設も関係なく、生きてこられたのである。

私は、障害者に対して、保護より機会を、与えるようにと訴えてきた。いたずらな保護は人間をスポイルし、ダメ人間をいっそうダメ人間に決定づけるばかりでない。弱者を保護隔離するという健全者あるいは強者のエゴイズムは、社会を徐々にゆがめていくことにもなるからである。

竹山氏は、おそらくまったく無保護で、みずから機会をつかまれた。力強く、また心をおえぐるようなじよんがらは、氏の人生の軌跡そのものなのだ。

福祉とは何かということが、よくいわれている。豊かな経済力による過保護がそれではないことは、もはや疑う余地がない。それはおそらく、人間がいかに生きがいを得るかということであろう。そして、それを支えるためにこそ経済を必要とする。太陽の家は、障害者に働く機会を、

太陽を、というスローガンをかかっているが、みずからの力で経済的安定を得ることができれば生きがいもまた得ることができらるだろうという意味である。

人間の能力は広大である。医師の診察だけで人間の機能を判定することはできない。障害者も意欲を持って生きる場合、すばらしい能力を発揮する。それは竹山氏ばかりではない。太陽の家で仕事をしているものすべてがそうである。このとき、特定のものだけではなく、すべての障害者が最高の能力を発揮できるようにならねばならない。それを助けるのが、科学である。

私は、生きる哲学は障害者みずからが働くことを通してつかむべきだと思う。そのために私たちは働く場を与え、個々の障害者がより機能を発揮できるように助けるべきだと思う。太陽の家が、機能開発（科学とスポーツ）をベースとするのは、現代社会に適応し得る人間としての基礎づくりのためである。

太陽の家は十年を経て、一応のレベルに達することができた。この間、「メリット追求は反福祉」という批判にもさらされた。だが、私が理想とする完全な、自立、までは、まだ到らない。

また、Japan Sun Industries と英語で複数名にしてあるが、現実には単数である。

全国各地区に太陽の家ができれば、入所者はいつでも家族に会うことができ、就業の機会もふえる。人事移動で転勤することによって社会性も広がる。また、海外にもできて交流すれば、もっとすばらしい。そういうことを考えての複数名だが、前途はきびしい。

かつて、山口県議会が、山口・太陽の家、建設を議決したが、形にならなかった。やはりこう

したものは気違いがいとできない。

しかし、いま、北九州市で進行中の計画は可能性があるように思われる。近いところからでも一つずつ確実にできればよい。もちろん、それは施設ではない。インダストリーズである。

私は障害者自身が一日も早く優秀な人材になってほしいと願う。障害者のデメリットは障害者自身が克服すべきであり、メリットは障害者自身が獲得しなければならない。太陽の家は、それをサポートする一つのベースキャンプなのである。

常識に従えば、障害者の自立を助けるべき施設運営に試行錯誤は許されない。だが、私はあえて実験的冒険を重ねてきた。それにとまらぬ抵抗は、当然予想されるものだった。

従来の福祉感覚からすると、太陽の家のあり方はときに受容しがたい異和感を与えたかもしれない。だが、実際には理解者、協力者のほうが多かった。それらの人たちの力で太陽の家は大きな過誤をおかすことなく発展することができた。

また、入所者、職員の努力によって成長にとまらぬがちなひずみを克服してきた。そして現在、ひとつのモデルとしての役割をはたす存在になったと信ずる。

もちろん、福祉のありようは決して一様ではない。身障者施設においてもさまざまな運営方法があるべきだろう。ただ、単なる保護、健全者社会からの隔離はマイナス効果だけのものであり、福祉の名に値しない。

太陽の家は、設立当初から施設であって施設ではないという自己矛盾をかかえながら、施設あ

らの完全脱皮を目ざしてきた。そして十年にして一応のメドを得た。この間に私が得た一つの結論は、社会の進歩によって福祉が充実されるのではなく、福祉の確立があつて社会が進歩するということである。福祉が政治の便宜的スローガンである間は、ほんとうの福祉はあり得ない。経済成長にプレーキがかかるとたちまち、福祉を切り捨てようというような政治姿勢に、どのような期待をかけることができるだろうか。

福祉とは人間尊重のプログラムであり、社会的プログレスを約束する。それゆえに、私たちはみずから闘い続けなければならない。

一九七四年十月、ポルトガルのリスボンでヨーロッパを中心としたリハビリテーション会議とICTA理事会が開かれた。主なテーマは、重度障害者の社会との融合についてで、たとえ重度障害者でも、施設におかず、社会人として扱うための方策を探るものだった。

結論は、医学的リハビリテーションを極限まで行ない、残存機能を最大限に高めた上で、エレクトロニクスその他のメカニックなど、科学をフルに利用して、一般健常者にちかい能率をあげようというものである。

たとえば、スウェーデンのカール・モンタン氏は、コンピュータ制御による新しい交通体系の話をした。障害者が外出するさいには、呼び出しに応じて小型無公害バスが玄関までやってくるという実験である。

私は、太陽の家機能開発センターで考案した四肢麻痺者用のリフト付電動車椅子（超音波で作動する）の一六ミリフィルムを紹介した。

こうしたものがただちに実用化されるかどうかは別である。科学を基盤にして進める場合、地道な積み上げが必要なのだ。

いわゆる先進諸国の障害者対策をみれば、そのことはおのずと明らかである。

アメリカのグッドウィル・インダストリーズは、一九一五年に始まった。先にもふれたように、家庭の不要品を更生販売する組織である。現在は全米に一四〇以上の工場と、海外支部をもっている。だが、この方式はあまり成功しているとはいえない。人件費がかさみ、再生品が売れないのである。最大のミルウォォーキー工場は、そのためコンピュータを使用して銀行業務の下請けをやるなど、新しい方向に進んでいる。

同じアメリカのアピリティーズ社についても先に述べたが、ここでは主に電気器具の製作を行なって年商約一〇億円をあげている。障害者四八〇名の宿舎はない。すべてオーナードライバー（背骨が曲らず、立ったまま片道七〇キロのハイウェイを運転して通勤するものもいる）である。

イギリスのレンブロイ・リミテッド（国立保護工場）についてもすでにふれたが、ここは現在、全英八五カ所の工場に障害者約七六〇〇人が働いている。ただ、一九四六年創立以来の国の援助額は延べ六〇〇億円超ということだから、経営が順調とは到底いえない。

ここで、オムロン太陽電機^〆の業績を持ち出すのは気がひけるが、保護（福祉）工場はやはり民間委託のほうがよさそうである。

オーストラリアのセンター・インダストリーズは、脳性麻痺者のリハビリでよく知られている。脳性麻痺の乳幼児から青年期までの養育、母子入園者の医学的リハビリから就労までのシステムをもっている。

一九六一年に脳性麻痺者三二名、健常者八〇名でスタートし、現在は障害者二五九名（脳性麻痺者二一七名）、健常者五七六名で電気器具部品、電話交換機の組み立てを行ない、年商約一五億円。常識的には労働にまったく不応の重度脳性麻痺者が働いていることが特長である。その能率は決してよいとはいえないが、収入のバランスはよくとれている。

日本では働いて限度額を越えると措置費が打切られ、働かないほうが得な場合があるが、オーストラリアではそうではない。

スウェーデンには一九六五年創設のフォークス・ソサエティがある。大施設に多くの障害者を社会から隔絶して収容することはやめようと、国内二〇カ所に拠点をつくることを目標に、重症身障者に住宅と仕事を提供している。国をあげて大募金を行ない、一日で九億円を集めたという。

西ドイツのハイデルベルク職業訓練センターは一九五六年に設立され、約一二〇〇人の障害者に近代的職業訓練を行なっている。

コンピュータ操作、電子工学、機械技術、情報処理など付加価値の高い訓練ばかりで、指導員の話すことばはただちに点字に訳される装置、リハビリテーション専門病院、身障スポーツ施設など、目をみはるほどの施設である。この施設を出た障害者の就職率は九六パーセント。

オランダのヘットドルフは、障害者が社会人として自立している点で、最も学ぶべき施設——ふつうの意味の施設から完全に脱却している——である。

一九六二年に大募金運動が行なわれ、七〇年に完成した施設の面積は六五エーカー。街のなかには交通公社、花屋、文化センター、ショッピングセンター、レストラン、ガソリンスタンドなどがあり、約四〇〇名の重度障害者が完全な生活のプライバシーと働く機会を得ている。

私は、この十年間さまざまな批判のもとに障害者だけの「工場」をつくることに全力を傾けてきた。障害者もまた努力した。日本の全生産工場の平均欠勤率四・八〜五・六パーセントに対して、太陽の家の平均欠勤率は二・三パーセントである。そして、彼らのつくる製品は市場において何ら遜色ない。多くのものが家庭人にもなった。

だが、依然として彼らは一般社会に受け入れられない。

太陽の家は昭和五十年九月現在、一般授産生一三二名、重度授産生一〇九名、福祉工場従業員八二名、職員五七名。土地総面積五万二九〇〇平方メートル、建物延べ面積二万二三七平方メートル、年商は一五億円に達した。無我夢中で積み上げてきた結果である。

この間において、障害者は驚くべき能力を発揮した。とくに重度のものがいかに潜在能力を

もっているかを見せつけ、障害等級にこだわることの無意味さを証明した。

しかし、太陽の家が施設である限り、彼らは決して満足できない。

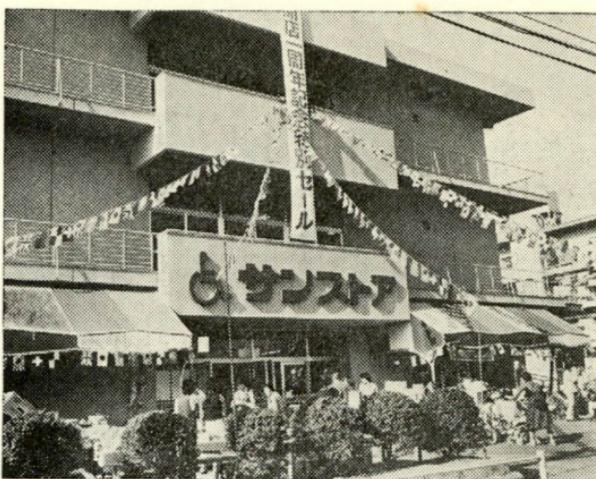
もはや、施設をつくり、年金を与えることが真の福祉に遠いことは疑うことができない。一般市民とともに生きることこそ、障害者の最大の望みであり、それを実現させるのが福祉なのである。

追加報告——より広範な可能性をめざして

昭和五十二年十二月、第二作業棟の改築が完成（延床面積二五四三平方メートル、工費約二億円）。一階部分にスーパー・マーケット、サンストア（売場面積四八七平方メートル）が開店した。

身体障害者が第三次産業へ進出するために、太陽の家は授産科目としての商業科の設置を考えてきたが、国の方針は「時機尚早」である。一方、雇用促進法の改正によって、第三次産業側の受入れ態勢は徐々に進展するという予想もでき、まず太陽の家において実地訓練を始めることにした。もちろん、訓練とはいえ、収益事業として運営しなければならぬ。素人商法が成立つものかどうか、危ぶむ声も多かった。地域の商店を圧迫することになるのではないか、あるいは、店員が障害者であることを嫌って客が来ないのではないかなど、不安はあったが、客の反応は上上であった。周辺人口の膨張もあり、売上げもまずまず、当初の予想を上回っている。

従業員は店長以下六名が障害者。レジスターの女子店員は車椅子なので、レジスター自動読取



スーパー・マーケット「サンストア」(上・玄関, 下・内部)
 車椅子の女性がレジ係をつとめている 身障者の第三次産業
 への進出として注目を集めた

装置などを設置し、通路幅を広くとり、商品棚を低くするなど障害者が一人で買物できるように配慮している。

五十三年一月、株式会社サンインダストリーが発足した。これはソニー株式会社と、太陽の家設立関係者、身体障害者持株の三者による共同出資で(資本金五〇〇万円)、オムロン太陽電機

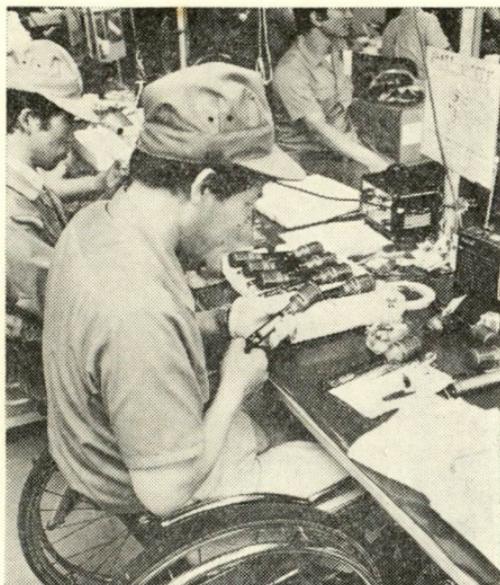
株式会社と同じ形である。ここでは六〇名の障害者がステレオ・カートリッジ、ステレオ・トランスミッター、テレビ遠隔調整装置、ワイヤレスマイクなどを組立て、五十四年夏からは電動車椅子の製造も開始する。

また五十三年七月、本田技研工業と日本精機の協力のもとに精機科も発足した。ここではオートバイ用スピードメーターとタコメーターを製造している。

五十四年四月、身体障害者職能開発センターが発足した。既存の機能開発センターを吸収、働く能力の開発により重点をおいた研究をすすめるということである。

旧第一作業棟跡に建ったセンターは三階建（延床面積一七二三平方メートル、工費約一億五〇〇万円）。自助具展示室、作業訓練室、試作室、職能判定動作分析室、情報処理訓練室（コンピュータ・ルーム）、特殊作業訓練室（LL教室）など。作業現場と直結した研究開発をおこなう態勢が整った。

これと関連して、既設の社会福祉法



サンインダストリー ソニーのオーディオ製品組立て



身体障害者職能開発センター 作業訓練室コンピュータ操作訓練

人・身体障害者自立情報センター（サン・インフォーメーション・センター）東京都新宿区新宿四丁目）は、機関誌『われら人間』の発行など充実をはかりつつあったが、より職能面を強化するため、身体障害者雇用促進協会と業務提携し、新たに障害者雇用自立センターを開設した（同所）。

そして同じ四月、四年前にはじめての車椅子市会議員になった吉永栄治君が再選をはたした。彼は日常、サンストア店長として近所の主婦と接していたし、福祉都市を推進する地域活動も活発にやっていた。「社会的弱者の立場からの発言こそ人間尊重のプログラムづくりには欠かせない」というアピールも、広く共感を呼ぶことができた。もちろん、太陽の家の仲間たちも懸命に駆け回った。

太陽の家の仲間たちは五十四年四月現在、男二九七人、女一二一人の計四一八人。いちばん多い脳性麻痺が一三九人、次が脊髄損傷の五一人、三番目がポリオの三九人。仲間同士の結婚は、これまでに八〇組をこえ、七人の子供が生まれた。定時制や通信制で高校教育を受けているものも



市民ロードレース大会への参加 こうした風景もめずらしくはなくなった

少なくない。五十四年二月に定時制を卒業したT君は、四年間無欠席で全国振興会長賞（勤労学生賞）を受けた。太陽の家の体育館やプールは地域住民にも開放され、とくに構内で催される夏祭りは大いに賑わう。サンストアで買物をする主婦たちは、太陽の家の喫茶室やレストランでお茶を飲んで帰る。温泉銭湯、太陽湯は、いまだに大人二〇円のままである。

一般市民が太陽の家で夕食のおかずを買い、湯に入り、お茶を飲むことがまったく普通の風景になった。同時に、太陽の仲間たちが車椅子にトレパンで市のロードレース大会に参加することも、特別なことではなくなった。

五十四年四月、韓国ソウルで第六回リハビリテーションインターナショナル・アジア太平洋地区会議が開かれ、私は太陽の家の歴史の上に立って、次のようなことが大切ではないかという話をした。



屋休みのひととき 体育館前で

のあがる業種を選ぶこと。サービス産業にも進出すること。

5 一般社会人がどんどん入ってこられるような接点を作業所内につくること。

6 身障者もまた、一般労働市場ないし社会にすすんで進出していくこと。

7 あらゆる面でチャージミングな身障者、社会のルールを守る積極的な身障者を育てること。

これらは私の経験から得たひとつの考え方だが、並べてみると、至極当然すぎることばかりである。

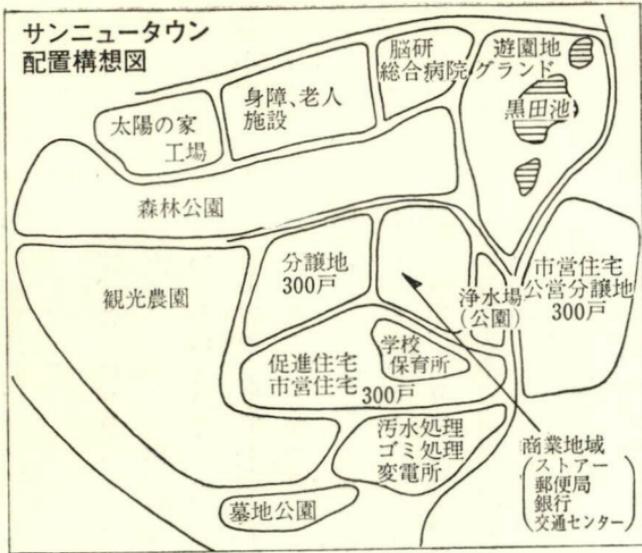
1 身体障害者自身そして庇護^{びご}場が経済的にも社会的にもパワフルになること。

2 そのためにチャリティよりサイエンスをフルに利用し、障害を補うこと。

3 庇護職場も一般社会と共通する運営をすること。

4 健全者と身障者がともに働き、コマースナルベースで運営できマスプロダクションで利益

韓国ではまた、身障者施設「明暉園」(李方子理事長)と姉妹の縁を結ぶことになった。そして早速、研修生がやってきた。われわれにできることは、どこの国の障害者であろうと、限りなく力を貸したい。その第一は、太陽の仲間たちの真剣な仕事ぶりを見せてやることである。甘えない態度を学んでもらうことである。そして、彼ら一人一人がしっかりした生活意識を身につけていることを知ってもらいたいと思う。



太陽の仲間たちにもいろいろ悩みはある。年齢的に将来の不安を強く感じているものもいる。すでに五〇歳を過ぎた授産生も数人いるのである。彼らの老後についても考えないわけにいかない。杵築市のみかん山を買ったのは、彼らの老後対策のひとつである。現在太陽の家の所有分は三・二八ヘクタールだが、これを軸に周辺地の利用ができればという考えから、「サンニュータウン構想」が生れた。ここには保育所、学校、病院、郵便局、銀行、スーパーマーケット、消防署、警察官派出所、観光農園、遊園地から墓地まであ

り、身障者、老人、一般市民の住宅が混りあい、太陽の家の工場もある。いわば、福祉の町である。

五十四年度において、ここにプラスチック工場が完成するが、これは第一段階の布石である。今後、この「福祉のための町づくり構想」は大分県内はじめ各都市に提案し、それぞれの地域に合った形で建設していきたいというのが、現在の私の夢である。

五十四年六月、太陽の家の土地総面積は五万三七〇〇平方メートル、建物延面積二万三〇五〇平方メートル、年商は三五億円となった。この力を社会に還元していかなければならない。私は設立のとき、「太陽の家に働くものは被護者ではなく労働者であり、後援者は投資者である」というモットーを入口の壁にかかげたが、社会に対しては一日も早く「税金を食う立場から納税者の立場へ」ならねばならず、より広い意味で福祉の推進者にならねばならないのだ。

国際身体障害者技能競技大会の構想も、いかにして身障者の力を社会に還元していくかということから生れた。

International Industrial Skill Contest For The Disabled (略称 I・S・C) は、五十六年秋、約五〇カ国の参加のもと、はじめて東京で開催される。私はしばらくの間、その準備に駆け回ることになるだろう。

太陽の仲間たちよ

昭和五十年十一月十二日第一刷発行 昭和五十四年八月三十日第二刷発行

著者——中村裕

© Yutaka Nakamura 1975 Printed in Japan

定価——八八〇円



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

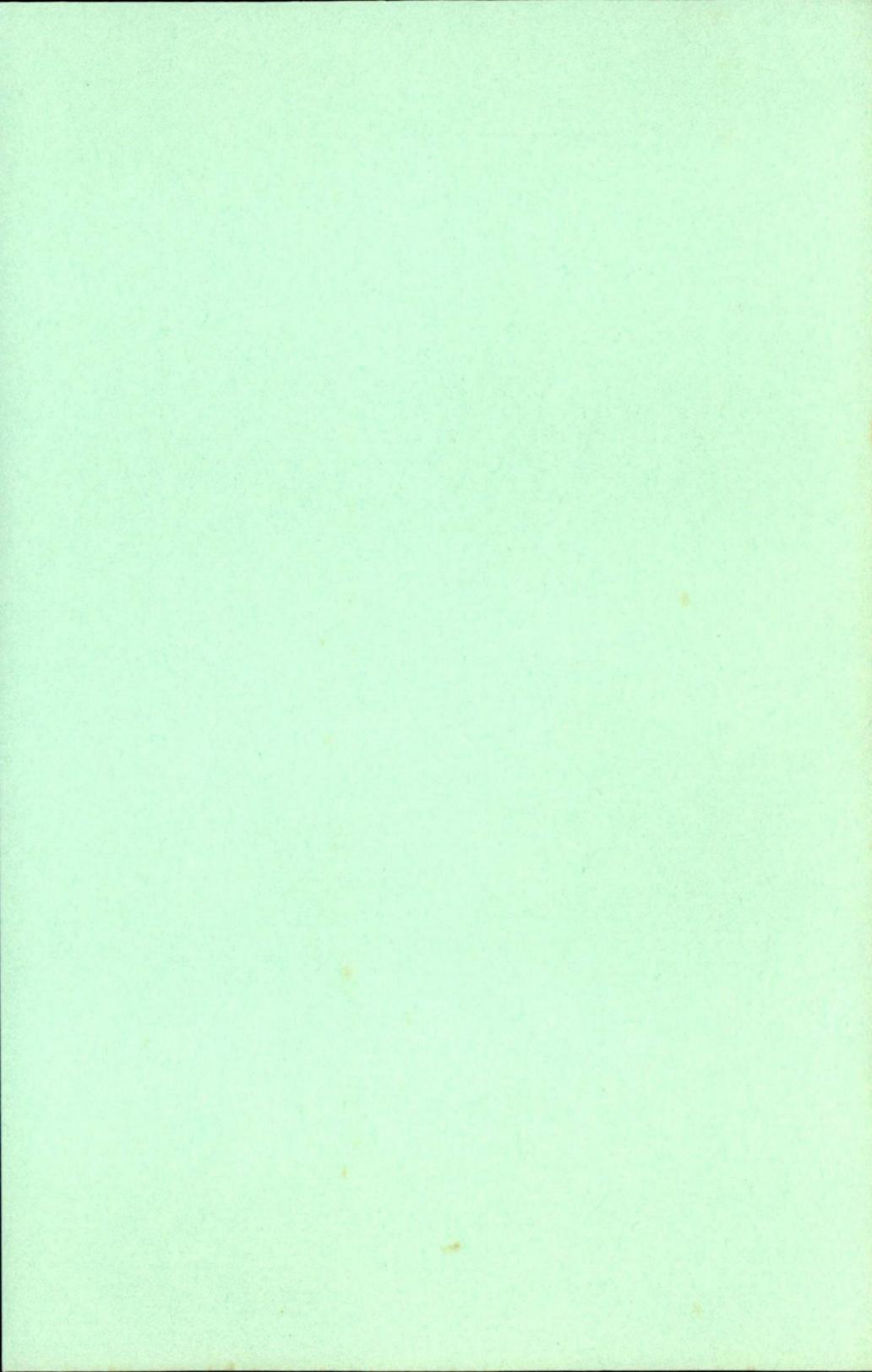
東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号二二 電話東京〇三―九四―二二(大代表) 振替東京八一六〇〇

装幀者——伊藤明 フォトテクニク——永田文子

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

0037-266945-2253 (0)

落丁本・乱丁本はおとりかえします(学二)



社会福祉法人 太陽の家
身体障害者職能開発センター

収 納 :

番 号 :

研修用 4

中村裕——社会福祉法人『太陽の家』理事長

昭和二年、大分に生れる。九州大学医学専門部を卒業、同大整形外科教室を経る。昭和四十一年、社会福祉法人『太陽の家』を創立。昭和四十四年高木奨励賞、昭和五十年吉川英治文化賞を受賞。身障者にこそスポーツを」と身障者スポーツを推進しており、東京パラリンピック、ストック・マンデビル大会に日本選手団の団長として参加している。趣味は園芸、読書。

■現住所・大分市大手町三丁目二四三

太陽の仲間たちよ

中村裕

講談社

0037-266945-2253 (0)

880円